ナンダ・カート 1981

登山・事故・捜索・追悼

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

H A J

ナンダ・カート 1981

登山・事故・捜索・追悼

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

H A J

序

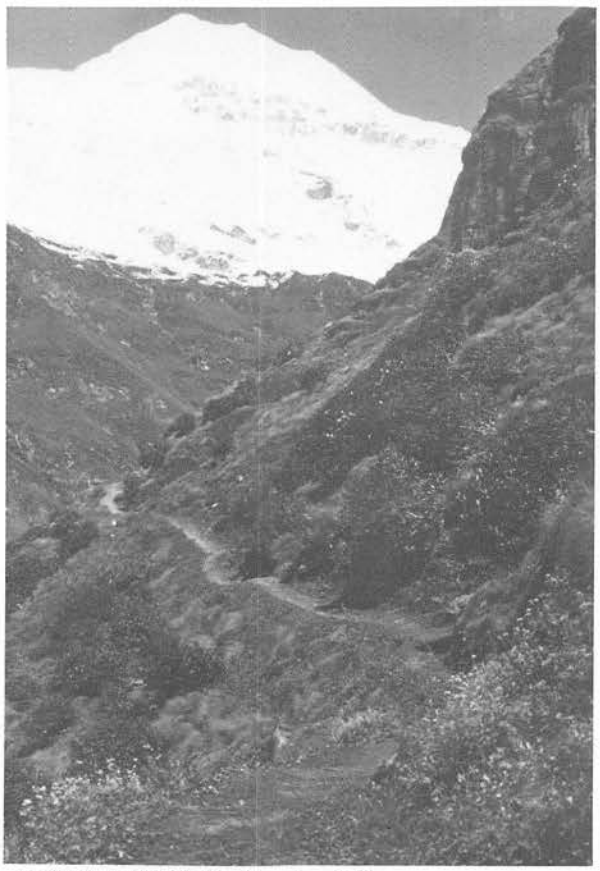
1981年9月、荒れ狂う雪崩の咆哮の中に消えた7人の霊は、ナンダ・カートの懐に抱かれて2度目の冬を迎えようとしている。
大自然のすさまじい力、人間の命の重さとはかなさを、人の死の悲しみの深さと存在の大きさをナンダ・カートは完膚なきまでに我々に教えてくれた。創立以来15年、遭難死亡事故の絶無を守ってきた本会の誇りは消えさり、会史に永遠に記憶されるべき頁を加えることになった。
御家族の平和な日常と多くの友の情を、私たちの冬のエベレストへの夢も10月3日午後3時の国際電話によってすべて打ち砕かれたのであった。
以後、会は持てる力のすべてを挙げてかつて経験したことのない遭難事故にとり組んだ。
インド政府、登山財団、国境警備隊をはじめとするインド・サイドは、外国人に対して最大限ともいえる協力を示してくれた。在印日本大使館、外務者、法務省、関係の地方公共団体は私たちの要請に誠意をもって応えていただいた。また、関係山岳団体、友人各位、本会々員からは多くの援助と励ましの言葉をお寄せいただいた。冬期エベレスト隊員を主体とする捜索隊の各位は自らの計画をなげうち、冬のヒマラヤに身を挺して亡き友の姿を探し求めてくれた。
そして、何よりも感謝申しあげたいのは、残された御家族、縁戚の方々の深い御理解に対してである。遠く離れて充分なコミュニケーションを欠きがちな関係の皆様と終始心を通じあえたのは全く寛大な御理解のたまものであったと深く感謝申しあげたい。
遭難の日から1年有余が過ぎ去った。それぞれの御家族におかれては悲しみの中から勇気をふるって立ちあがりつつあるとお聞きしている。
大自然のはかりしれない力にくらべれば人智はあまりにも小さい。ヒマラヤという地球上最も巨大にして苛酷な自然に立ち向う登山が続く限り、遭難をゼロに帰すことは不可能とも思える難事である。しかも、ヒマラヤ登山はますます困難を求め、生体の適応の限界を押し拡げようとする流れにある。登山史上最初といわれる本格的捜索隊を冬の6,000mに送り、遺体の発見と共に遭難の原因を解折し適確な対策を見出そうとした試みも充分な成果をあげ得ず、只、巨大な自然の力を再認識させられる結果に終った。
けれど、この1年余、私たちは全力を尽して再びかかる事故を起さないための方策を追究してきたしヒマラヤ登山が続く限り果てない命題として研究をやめないつもりでいる。7人の霊に報いることは只一つ、私たちの真剣な努力の継続にあると考える。
御家族をはじめ多くの方々の御協力をもってこの報告を刊行する運びになった。けれど、報告の大きな目的の一つである原因解析と事故防止対策の部分は不満足なものであり多くの御教示と御批判をあおがねばならないと考えている。ナンダ・カートの遙かな高みから7人の友の熱いまなざしがいつも私たちの行動に注がれていることを肝に銘じて事故ゼロへの困難な道を精一杯の努力をもって歩んで行きたいと思う。
今は苦楽を超越した永遠の世界にいる阿部君、斎藤君、鈴木君、寺本君、埜口君、本田君、藤倉君よ安らかに眠ってほしい、そして、残された者の生をいつまでも守護してくれたまえ。

合　掌

1982年12月

日本ヒマラヤ協会専務理事
ナンダ・カート峰遭難事故対策総括責任者
稲　田　定　重

神々の寝所に召された
七名の日本人勇者
此所に眠る
1981. 9. 28
K. FUJI. KURA
I. ABE
SAITO
TERAMOTO
H. G. E. 8
S. HONDA
M. NOGUCHI
Y. SUZUKI

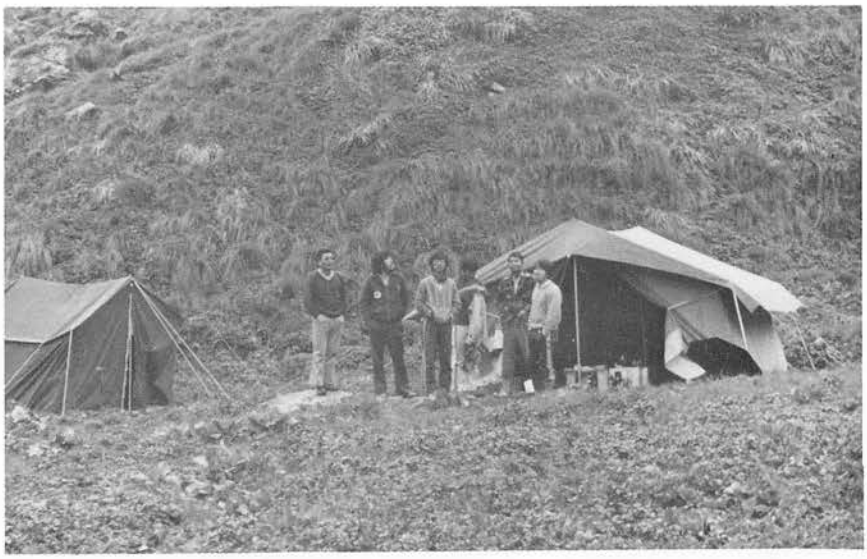


▲プルキアからのナンダ・カート峰

▲第一キャンプへの荷上げの途中で
左から 寺本・阿部・埜口・本田・藤倉

▼ベース・キャンプ（約3,850m）

▼第一キャンプへの荷上げ



▲ベース・キャンプにて
左から 小島・藤倉・埜口・阿部・寺本・本田

▼上部から第一キャンプを見下す

▲1981年11月第一キャンプからのナンダ・カート峰

▼深雪のためラッセルに悩まされながらルートを伸ばす捜索隊

▶藤倉隊の第二キャンプを求めてルートは伸ばされた。後方はナンダ・コット

後方はナンダ・デヴィ東峰

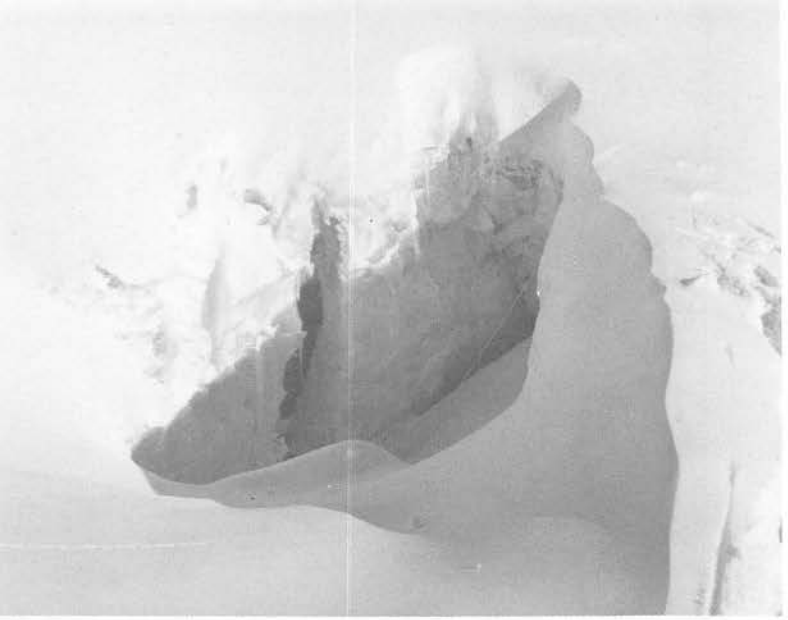
▼捜索隊第2キャンプが設営された

搜索が始ま

2m の

った

.....



フィックスロープが

藤倉隊の第一キャ
深い雪の中……

発見され

ンプも

……

10月４日　東京に
12月20日　東京に
追

於て説明会
於て捜索報告会
悼　　会

左から 藤倉・阿部・斎藤・寺本・本田・埜口・鈴木

▼ピンダリ河右岸のレリーフ

ナンダ・カート1981

目　　次

第Ⅰ部　ヒマラヤ登山学校とは ……1

ヒマラヤ登山学校の背景 / ヒマラヤ登山学校を終えて / ヒマラヤ7,000m峰の短期登山を終えて / キャシードラルの場合 / ケダルナートの場合 / 参加の動機 / 一般隊員の順化例 / ヒマラヤ登山学校の成果

第Ⅱ部　計画から実践へ ……21

募集経過 / 準備活動 / 配付資料から / 隊の構成 / 実践・行動報告

第Ⅲ部　事故対策本部報告 ……33

事故対策本部日誌 / 小島隊長からの通信 / 渉外要員報告 / 外務省領事二課からの情報 / 捜索隊派遣までの経緯 / 遭難家族同意書 / 除籍まで / 会計報告

第Ⅳ部　捜索と事故分析 ……49

捜索隊報告 / 捜索隊構成 / 上部捜索活動報告 / 捜索行動概要 / 事故原因の推定と分析 / ヒマラヤ登山遭難と捜索隊派遣を考える / ナンダ・カートで何が起きた

第Ⅴ部　追　　悼 ……91

追悼のことば / 今は亡き7人の岳友へ / モンスターの歩み / 陽一お前は今どこに / 追悼 / 「阿部ちゃん」を偲ぶ / 想い出よさようなら / 兄荘八を偲んで / 本田君の想い出 / 我が子正則の死を悼んで / 友　埜口君よ / 寺本くんはいま / わが生涯のザイル・パートナーに

第Ⅵ部　資　料　編 ……113

ヒマラヤ登山死亡事故の処理 / ヒマラヤ地域における日本人死亡調

ご協力者名簿 ……132

編　集　後　記 ……133

第 I 部

ヒマラヤ登山学校とは

ヒマラヤ登山学校の背景 ……	稲田　定重	3
ヒマラヤ登山学校を終えて ……	稲田　定重	4
ヒマラヤ7,000m峰の短期登山を終えて ……	沖　允人	5
キャシードラルの場合 ……	山倉　洋一	8
ケダルナートの場合 ……	尾形　好雄	10
参加の動機 ……	トリスル隊	13
一般隊員の順化例 ……	山森　欣一	14
ヒマラヤ登山学校の成果 ……	山森　欣一	17

ヒマラヤ登山学校とは

ヒマラヤ登山学校という名称は、外部からその性格や、運営について疑問が出されている。ここでは、これらに答えるために、過去の出版物等に発表されたものの中から、それぞれの隊長が記述したものを載せ公正を期しこの中から実像を組みとっていただきたい。

ヒマラヤ登山学校の背景

1978年ガルワールヒマラヤ登山隊
隊長　稲田定重
（HAJ．専務理事）

日本ヒマラヤ協会（HAJ）は、1981年創立15週年を迎えることとなる。その主要行事として、ヒマラヤとシルクロード全域を対象としての壮大な行動計画である「H＆Sプラン」の実施が決定されたのが1976年4月の総会であった。

プランは登山と野外活動を柱とし、1977年から5ケ年にわたる総事業費3億円に達する膨大なものであった。登山活動でも1981年カンチェンジュンガ遠征計画がメインであり、最先端に位置するものであった。これは、HAJの総力を上げなければとうてい不可能とも思える遠征計画である。同時に登山部門におけるHAJの基盤が作られる必要があった。

HAJは創立当初から「みんなのヒマラヤ」を掲げ、この国のヒマラヤの一般化、大衆化に努力してきた。遠かったヒマラヤを招き寄せ多くの人間をヒマラヤ各地に送り込んだ。これらの多くはトレッキングであった。その後、年を経てトレッキングはすっかり一般化し、何もHAJにかかわらなくとも自由に機会を作って出かけられるまでになった。

一方、ヒマラヤにおける登山は、地方、単位山岳会からも出されるようになってきた。けれど、その比率は登山者の中でヒマラヤ登山を志望するもののごく一部の者の夢しか実現できないのが現状である。多くの未組織登山者、また会独自では登山隊を出せるにいたらない多くのヒマラヤ志願者が存在している。

トレッキングを主として多くの人を送り、また1971年以来連続的に遠征を実施して多くの高所経験者を育ててきたHAJが、次に取組むのは、この部分であった。

即ち、多くの熱意ある者に対してヒマラヤ登山の機会を与え、その準備と実践を体験させ、彼等を柱として、この国の正しいヒマラヤ登山の一層の進展をはかることである。

「ヒマラヤ登山学校」は、このような背景をもって企画されたわけである。

1978年7月15日発行
G・H・E 1978事前準備・研究集録から転載

ヒマラヤ登山学校を終えて

1978年ガルワールヒマラヤ登山隊　隊長　稲田定重

インドでのめまぐるしかった27日間は、あっという間に終りを告げた。結果はトリスルⅠ峰へ6人、トリスルⅡ峰（6,690m）に7人、無名峰（6,100m）に2人と計15名のサミッターが誕生し、全員無事に母国の土を踏むことができた。

ヒマラヤの高峰に対する速攻の可能性が論じられ、実践され始まってから未だ日は浅い。けれど少数の精鋭登山者ならいざ知らず、大人数の平均的登山者が日本を出発してから帰るまでわずか28日間で7,000m峰をめざすという、一昔前には夢想もされなかったことが試みられ、それを成しとげるに至ったということは、一体どうとらえればよいのだろうか？

人間の歴史の中では、常に先人の経験がとりこまれ、それが後に続く者に力を与え、更に高いレベルの仕事を可能にしてきた。ことにあたる側の実力がどうあれ、意識レベルでの成長・自負は虚構のように見えても、現実に巨大な力として作用する。

「速攻」という言葉で一括されて、それがヒマラヤ登山の一面での最先端のようにとらえられがちだが、内面は非常にドロくさいものであり、また幾つものバリエーションがある。登山史の主流における最先端の速攻もあれば、全く異なる意識の流れでの速攻もある。我々の試みが、ヒマラヤ登山の中において、どのように位置づけられるかの結論を出すには、もうしばらくの時間が必要なように思える。それは、この計画に参画した人間が、今後どのような軌跡をたどって成長（或いは退化）していくかを見極めなければ、広義の正しい評価はできないと思うからである。

全ての仕事において「能率」の追求は必然である。ヒマラヤ登山も、メジャーエクスペディションはそれなりに、またマイナーエクスペディションもそれなりに、必然的に能率（効果）を追求していく。「速攻」は、それを支える確固たる思想をベースとして、ふさわしい万端の要素が総合化されるべきものであるが、決して「完成」することはあり得ない永遠の命題であろう。ヒマラヤ登山の面白さの一面をここに見い出すことができる。

また、私達の隊は、「ヒマラヤ登山学校」を名乗ったことも事実である。当初、「登山学校」の名を借りて編成された遠征隊、という何となく後ろめたい気が随分とあったように思える。が、準備の過程が進むにつれて、或いは登山活動の中で、「登山学校」の意識は、少なくとも運営にあたる当事者の間では、次第に自覚されていった。終了した現在、それは参加した隊員個々の中でも、真剣な検討に付されるまでになった。これは「登山学校」という試みが、検討に価する位置づけを必要としているからだと考えられる。

この国で、「登山学校」は不毛の分野の一つであるが、それだけに検討すべき事柄は多く、発展の可能性を大きく秘めているように思われる。高所登山に関してはなおさらであろう。

ヒマラヤ遠征は、また一つの社会的実験としてみても、様々な興味あるテーマを見い出すことが出来る。育った環境の異なる大勢の人間が短期間のうちに集い、一つの仕事をなしとげて、解散していく。そしてまた、部分的に結合して、壮大な仕事を求めていくという過程は社会そのものである。そして、ヒマラヤ登山は高い確率で人間の死がかかわり、隔絶された苛酷な環境の中で行われるだけに、極めて凝縮された実験となる。

「総括」ということで一区切りはつけているが、それは極めて限定された分野での、しかも部分の総括でしかあり得ないところにヒマラヤ遠征のもつ無限の価値が実感される。それだからこそ、とことん、のめりこみが可能になるように思われてならない。

この報告書は、我々のアクションと思索のほんの一部分であり、隊員にとっての最小限のメモリアルにすぎないが、ヒマラヤ登山の進歩にとって何らかの働きができれば、これにこしたことはない。

トリスル28日間　　昭和54年2月21日発行 から転載

ヒマラヤ7,000m峰の短期登山を終えて

1978年カシミールヒマラヤ登山隊

隊長　沖　　允人

（HAJ．元専務理事）

プロローグ

1965年の私の初めてのヒマラヤ登山（ダウラギリⅡ峰、7,751m）は失敗に終った。雪のためにキャラバンが異常に長びき、ベース・キャンプに入るまでに実に66日間を費した。そして登山が始まった直後、シェルパの転落事故という不運もあって敗退したのだった。

「再びヒマラヤへ」の気持は年々強まったが、仕事が忙しく、とても2カ月、3カ月の休みは取れなかった。そうこうするうちに、ヒマラヤ登山もポピュラーになり、ニュースバリューが失われるとともに、ますます休みを得ることは困難になった。ヒマラヤ登山へ参加するために職を辞めるのがめずらしくなくなってきた。

生活のことを考えると、職を辞めてヒマラヤへ行くのは一大決心がいる。家族があればますますむつかしい。それに、それだけの犠牲を払って取り組むヒマラヤ登山はだんだん少なくなってきた。登山史の一ページを飾るヒマラヤ遠征よりも、楽しむためのヒマラヤ登山が多くなってきたのもその一因であろう。

長期間入山するには休暇の問題とともに、資金のこともウェイトが大きくなる。この二つの問題を解決するには、短期間のヒマラヤ遠征が一つの鍵となると考えた。

1971年、手はじめに夏休みを使ってカシミールのコラホイ（5425m）に大学山岳部の学生と登山した。約8日間で新ルートより登頂し、この位の高度なら日本を出てから10日か15日位で充分登ることができるという目安を立てることができた。

1974年には、6000mに近い、マナリ地方のハヌマンティバ（5928m）を5日間で登った。高度順化が充分でなくても6000m位の山なら苦しいが充分、一気に登り切れることが分った。

この頃からヒマラヤを目指す人たちの間で短期ヒマラヤ登山が話題にのぼり出した。

1976年にはパミールの7000m峰がJAC隊によって登頂され、「速攻登山」として話題になった。日本を出てから帰国するまで35日間、BC建設から登頂まで22日間である。外国人はすでに何度も試みられていることだったが、日本人としては初めてで、岳界の注目をあびた。翌年、私の親しい友人、増田秀穂をひっぱり出しHAJ隊としても7456mのパミールの登頂を試み、見事成功した。日本出発から帰国まで36日間、BC建設から登頂まで23日間であった。

このとき、準備段階で私も、パミール隊隊員と一緒に低圧室に入り、7000mの苦しさを味わった。

これらの結果から、7000m峰を3週間程度で登れるという確信を得ることができた。

HAJのモットー「みんなのヒマラヤ」のもとにいろんな型の隊員が参加することを望んで、隊員を公募した。ヒマラマ未経験の人でも、体力と順化がうまく行けば短期にヒマラヤの7000m峰が登れるということも実行してみたかった。

先年のパミール登山と違うところは、①ルートを自分たちで"見出し"、ルート工作要員の必要なこと、②天候が長期に安定しないこと、③自分たちによる荷上が必要であること、④登山許可取得などの渉外事務があること、⑤アプローチの輸送がめんどうなこと、⑥日本とはかなり違った低い生活条件での日常生活があること、などであり、

どれをとっても登山が計画より遅れる原因に充分なり得るものであった。

せめて、隊員のみは厳選したかったが、ヌン登山の一時不許可などがあり、途中で参加を中止したり、他の山へ変更したりする人が続出して、結局、補充隊員も加えて9名となり、とても厳選するという訳にはいかなかった。GIT運賃という最大28日間有効の割引運賃を利用するためにも、ある程度の人員を確保したかったこともあって応募者は全員隊員とした。

キャラバンは日本から始っている

隊員にはできるだけ高い山でのトレーニングを強制した。富士山、御岳、白山などの山頂で、登攀技術の訓練とともに、低酸素に耐えるための心構えのミーティングやトレーニングをおこなった。やはり、富士山の火口壁でのトレーニング、山頂での2日間のビバークが一番効果的だったと思われる。できれば、出発直前に1週間位、富士山頂でのトレーニングをおこないたかったが、時間のとれぬままに見送らざるを得なかった。しかし、隊員は「キャラバンは日本から始まっている」ということを合言葉に、トレーニングを重ねた。そのために、街での準備に費す時間は最少限にし、打合せなどもほとんどを山行に合せて、テントや山小屋の中でおこなった。

出発直前に、『岩と雪』第62号に原真氏の高所登山に関する「高所順応の方法」という論文が発表され、大いに参考になり、また、私たちの登山計画も成功の確率が高いと自信を得ることができた。

ヒマラヤ速攻登山の困難性

絶対高度、高距、ルートの難しさ、アプローチ事情、許可事情、渉外の困難性、地元民の民度の低さらが項目として考えられる。

タクティックスについては、ヌン西稜について詳細なテクニカルノートを小川登攀隊長が作成し、隊員全員が理解した。その他の項目については、小さい項目と注意書きを、仕事の種類別に5色のカードに記し、処理もれのないよう、しかも迅速に進められるように工夫した。これらのカード約100枚はコピーを3枚とり、先発2名にも持参させて、チェックした。

登山許可に関しては現地に着いてからもはっきりせず、これに隊長は全力を傾注した。先発隊とは連日、電報や電話で連絡をとり、刻々と変化する現地事情に適格に対応した。結果的にはスリナガルを出発する前日のタイムリミットぎりぎりに登山許可を得ることができた。

アプローチ事情は、事前にできる限り調査しておいたが、現実には予想を裏切る出来事が続出した。しかし、これらは3年前にこの地を訪れ、ヌンの北面を偵察したことのある、沖・小川が臨機応変に処理した。十歩も二十歩も先を読み、事前に対応策を考えておくことと、適格な判断と、決断力が必要である。

ルートは予想していたよりも若干難しかったが、隊員の登攀技術が比較的高かったことと、シェルパも優秀であったので何とかこなせた。また、登攀用には充分な装備を用意した。特に、テント、マット、シュラーフは通常の遠征隊の1.5倍位を用意し、荷上、荷下しの効率化をはかった。

低所用ポーターも積極的に活用した。

速攻登山のタクティクスと現実

出発前の合宿で各自の日本での登山速度（500mを30分～1時間30分位の個人差があった）を、充分に摑んでもらっておいた。ヒマラヤでは、この自分のスピードをこなせない隊員は原則として新しい高度に登らせないことにした。また、必ずその日に泊る高度よりも高く登ってから、再び下り、泊ることも原則にした。

しかし、ローテーションの関係や体調を崩したりする者もいて、必ずしもこれを守れなかったが、ともかく、極力このような動きをした。

頂上アタック前には、一度できるだけ低いキャンプへ下して休養させた後、一気に登らせた。

このように隊員には高所順化を第一に考えた行動をとらせた。

しかし、このために荷上物品の管理がおろそかになり、必要なものがキャンプに集結されないままに、次のキャンプが建設されそうになったこともあった。これを補うために、一、二の隊員が高所順化を無視して無理な動きをしたこともある。

小川登攀隊長には当面の責任者として負荷がかかり過ぎた。私自身も、自分の順化から考えてみ

て無理を承知でC_1まで酸素を上げたこともあった。実際の登山では計画通りいかないのは当り前であり、それをどうこなせるかが隊の“余力”といったものによるのであろう。幸に、私たちの隊はこれらを乗り切ってアタック態勢にもって行くことができた。

ヌン隊成功の要因

とにかく、天候にめぐまれ、ルートが順調にのび、サポート態勢もよかったことが成功の要因であった。ただ、私たちのような寄せ集めの隊で、チームワーク、各人の技術とも未知数の多い場合、7000m峰の速攻を成功させるには山とルートの選定が大きくひびいてくるといえよう。パミールでのソ連国際登山キャンプのような受入れ態勢は期待できないヒマラヤでは、28日間で遠征を終えるには次のことを考えて山を決める必要があろう。

① アプローチが短いこと。往復最大10日間位。これ以上の場合は途中に4000mを越す峠があるなど、高所順化に何らかの形でプラスになる場合。

② 下部キャンプへの荷上に地元ポーターなどの協力が得られること。

③ ルートが比較的分っていて、難しいところが少ないこと。フィックスロープを張る長さを一応の目安とすれば、BCと頂上の間の高距くらいを最大と考える。それ以上だとルート工作に日数がかかりすぎる。

④ 登山許可など渉外手続を登山行動に支障をきたさないように進められるように考えておくこと。例えば渉外要員を決めておいたり、地元旅行社の協力を得る。

⑤ 天候の安定した時期を選ぶ。1週間以上の行動不可能な日があれば登頂の確率は低くなる。

⑥ 全員登頂はよほど幸運にめぐまれた場合に可能だと考えておくこと。私たちの場合でもあと5～6日間余裕があれば第3次登頂隊を出せた。

こう考えてみるとあまり対象となる山は多くない。インド・ヒマラヤではヌン、クン、ニルカンタくらいであろう。アプローチが少し長くてもよいとすれば、バンダール・プンチ、トリスル、ナンダコットなどを考えることができる。

ネパールではアプローチが長いので、エベレスト周辺か、ランタン・ヒマールということになる。それも積極的に小型機を利用しなければ無理であろう。しかも、ネパールはモンスーンの影響が強いので、時期をうまく設定するのがむつかしいということもある。

パキスタンはラワルピンディからの小型機の便が不安ということもあって、あまり対象と考えられる山は少ない。ラカポシ、ティリチミールなどが検討の対象になろう。

6000m級の山なら沢山あるし、可能性も高い。バリエーションルートからの登頂、など別の面で面白味が出せると思う。いずれにしてもインドのような渉外が難かしいところでは、これをどのようにうまく、速くこなすかが最大の難関の一つであろうと思う。渉外のために1週間も2週間もニューデリーあたりで足止めをくっているようでは短期登山は成功しないであろう。うまくいかないときは転進するための第2案、第3案を用意しておくことも必要である。

装備、食料のことなどもある程度の工夫は必要であるが、これは通常の隊とあまり変りはないと考えてよい。

最後に、今後再び私が7000mの速攻登山に参加するとしたら、6カ月位前から体力トレーニングを厳しく行うことと、出発直前に富士山頂での1週間の合宿をぜひとり入れたいと思う。

「ヒララヤ」84号　昭和53年11月1日発行から転載。

キャシードラルの場合

1979年インドヒマラヤ登山隊

隊長　山倉洋一

（HAJ．副会長）

計画と結果と反省

行動（計画と実行動）

種々のアクシデントによる時間切れのためとはいえ、キャシードラルの頂上に立つことができなかったことは、何んとしても口惜しいことだった。

しかし、時間切れの原因が、必ずしも事故だけにあるとはいいきれない。隊長である私にもその一半があると感じている。それは、バラ・シグリ氷河とキャシードラル岩壁帯の地形判断が甘かったことである。

氷河の中のルートが面倒だとは予想していたが、それにしても厳しかった。氷河下部の斜度が予想以上にきつく、急激な起伏にルートが左右に振られ計画通りの行動をとることができなかった。唯一の資料であったダンシース隊の「バラ・シグリの自然」の記述をよく理解し、このことを当然推測すべきであった。

キャシードラル下部の岩壁帯についても、26年の間におけるアイス・フォールの変化や、ダンシース隊の6月の雪のある時期と、今度の9月の雪の最も少ない時期との差を考え、岩壁から雪が落ちていることを考慮して計画を立てるべきであった。それにもかかわらず、報告書をうのみにして、上部プラトーへは、コンコルディアから1日で簡単に登れるとしてしまった。これは明らかに私のミスであった。

結局、グレゴリーのとったプラトーへの最短ルートをとることができず、反対側の最も遠いルートになり、プラトーへ上るのに3日かかり、さらにコルまで半日近い苦しいラッセルとなった。

このような隊長の読み違いにもかかわらず、行動日数からみると、B・Cに入ってから4日目で予定通りコンコルディアにテントを建設し、コルに立ったのは、予定より1日の遅れだった。

このことは、常に隊のトップで活躍した佐々木副隊長の気力や、これに負けない男子隊員の努力と共に、初めてのヒマラヤにもかかわらず、これに遅れることなく行動した女子隊員の頑張りを評価すべきである。もし、事故がなく、予定通りB・Cに入っていたならば、今回の隊員の力で充分に頂上に立てたものと確信している。それだけに頂上に到達できなかったことを一番残念に思っているのは、私自身かも知れない。

キャシードラルのコルに立った隊員の気持として「あと3日、いや2日延ばせたら…」との気持が強くあったと思っている。このことは隊長である私自身としても強く感じ、できるならそうしたいと願っていた。しかし、そうすることによって、帰りのキャラバンのバスや宿の手配が狂ってしまい、また、デリー帰着後の日程が無くなってしまうことになる。このような「あと1日か2日あれば…」の状況は往々にして起りうると思われるので今後はこのような時にはどうするのか、現地エージェントや隊員達とも充分に話し合っておく必要があると感じた。

さらに、運営側として考えなければならない重要なことは、現在の登山学校のあり方では、参加隊員の技術、体力等に大きな差があることである。登山学校の実績が上れば上るほどこの差は大きくなると考えられる。この質の異なる隊員を同時に行動させるにしても、分割するにしても、いまのインストラクターの人数で、安心して行動できるかどうかということだ。

キャシードラルでは、分割は当然ありうるものと考え、９名の少ない隊員であったが、当初から２班に分けて計画をたて、具合の悪い者、弱い者をこの中で回転させるように考え、それぞれにインストラクターを１名つけ、隊長は全体の運営としてフリーにした。

ところが、予想もしないバス事故があり、これを契機に、この隊は一蓮托生、登頂の首尾、不首尾も共に一諸の方が、後になってあれで良かったと想い出すことになるだろうと、隊を２班に分けることをとり止め、できる限り同一行動をとることにした。

隊員も同じ心境だったのか、隊長、菅野インストラクターが輸送のため隊から離れ、たった一人となってしまった佐々木副隊長をカバーし、何の衝突もなく、お互に助け合って楽しく行動したことは、望外の成果だった。

高度障害（対策とその結果）

高度に経験のないヒマラヤ初心者を、10日余りの日数で、6500ｍ前後の高度に上げるのであるから高度障害の出ない訳はない。問題はこれをいかに低く押えるかにある。

登山学校での、わずか２週間前後の活動期間で、ひとたび高度障害が出たならば、これを克服する時間のないままに、苦しい登山に終始してしまう。かと言って、高度順化のために上下キャンプ間の往復を頻繁に繰り返していたのでは、登頂の前に時間切れとなってしまう。

キャシードラルでは、これらの相反する要因を前提に、上下テント間の反覆行動以外での対策を考えた。

その一つが「精神面に対する学習」による対策である。（内容は機関紙“ヒマラヤ”93号参照）他の一つは、楽しい登山を前提に、現地での活動を強く規制せず、荷上げその他の行動を隊員自身の判断に任せ、心理的な圧迫をできるだけ排除するようにしたことである。

これ等のことにより（必ずしもそうだとは言い切れないまでも）精神的に安定し、心理的な負荷がかからず、余裕をもって行動ができることにより、6500ｍ位までの高度ならば、初心者であってもそれ程ひどい高度障害に罹らないのではないかと考えた。

計画の段階で、標高3955ｍのロータン峠をバスで一気に越えることで、何らかの症状がでるものと予想していた。ところが、快適な天気と雄大な景観の良さに、観光気分で通過し、頭痛の気配さえなかった。

さらに、チャトルでの橋の故障により、約3700ｍのチャトルから、3910ｍのシグリ氷河末端部まで、約45kmの道を3日かけて歩いたが、高度障害と思われる身体の不調を訴えた隊員は１人も居なかった。この4000ｍに近い高度での３日間の歩きが、高度順化の役にたったのかも知れない。

Ｂ・Ｃ以上の登山期間中、不調で行動のままならない日が、各隊員に一日位ずつあったが、食欲は日頃と変らず、夜ともなれば定例の合唱をやっていたから、これは疲労によるものであったようだ。

唯一の高度障害らしきものは、Ｂ・ＣからＣ・Ｉ往復の帰りで、一番頑丈だと自他共に許していた志田隊員が途中でダウンした時だった。迎えに行った男子隊員に抱えられた姿を見た時「うむっ！とうとうきたか……」とガクッとしたが、ドクター共々全員一致でシャリバテの診断が下された。

隊員においても、比較的年令層が高く、落ち着いて面倒見の良かった住友隊員や、体力抜群で行動力のあった照井隊員などのお陰で、隊員間に起りがちなトラブルもなく、安心して、自己の体力の範囲内での活動を続けることができたことが、高度障害を排除する大きな要因どあったと思っている。

結局、中または低高度における高度障害の対策として、次の四点に気を配り、これがうまくいけば、かなりの効果がある筈である。

1. 精神的に安定させること。
2. 心理的な負担をかけさせないこと。
3. 体力の限度いっぱいまでの行動をさせないこと。
4. 疲労の蓄積を早期に解消させること。

最後に、キャシードラルでは、２日に一度、時には連日にわたって、少量とはいえ、酒やウイスキーがあったことが、疲労解消と高度障害の排除に、大きな力があったのではなかったか？という

ことを附記しておく。

登山学校の今後について

登山学校の参加者は、誰しもが頂上に立ちたいと願っている。しかし、現実には、参加者の登山技術や体力等には大きな差があり、これをひとつにまとめ、同一行動で登頂にもってゆくことは大変難しい。

登山活動が順調にいっている時には目立たないこれらの差が、ひとたび予定が狂ったりアクシデントが発生すると、隊活動のブレーキとなり、隊長やインストラクターに大きな負担をかけてくる。参加者の安全とスムーズな隊の活動を考えれば、参加者の登山技術や体力を或る程度のレベルに揃える必要がある。

いままでに、62人の人々が登山学校に参加し大きな事故がなかったことは、インストラクターの努力はもとより、隊員自身の自覚と協力によるものとはいえ、高度障害の個人差や登攀技術の難易度、そして体力の限界から考えると、2週間足らずの日数で7000m前後の山に、初心者を安全に登らせること自体がすでに矛盾を抱えていることを考えねばならない。

今後、より多くの初心者を対象に、登山学校への誘致を考えるならば、参加者のレベルを考慮し、まったくの初心者を含めた初級コースと、一応の登山技術と体力をもった者の中級コースを設定する必要もあると考えられる。また、できる限り余裕のある登山期間を設定できるよう、山の高さも6500m前後に押えるなど、それぞれの要因を含めて登山学校のあり方を再検討すべき時期にきていると思う。

「HIMALAYA」1980　昭和56年1月20日発行から転載。

ケダルナートの場合

1980年インドヒマラヤ登山隊
隊長　尾形好雄
（HAJ.会員）

全長28Kmにも及ぶといわれるインド最大の氷河、ガンゴトリ氷河が横たわるガンゴトリ・エリアは、ガルワール・ヒマラヤの中央部に位置し、これまで外国人による登山活動が許されないまま長い間不遇を囲っていた山域である。

ガンガ（ガンジス河）の源頭に位置するこの未踏峰の宝庫も、1979年には漸く外国人にオープンとなり、この秋、インド政府観光局、その他の招待に依り、当協会の稲田専務理事も招待客の1人としてこのトレッキングに参加し、新解禁となったこの聖なる地・ガンゴトリに入域した。氏らのトレッキングは、ヒンズー教の3大聖地の1つガンゴトリから、更にガンゴトリ氷河の舌端の現れるガウムクからタポバンへと足を踏み入れ、周辺峰をつぶさに観察され、貴重な資料を持ち帰られた。

この秋のオープンは新聞の連載や山岳雑誌の紹介に依って日本の登山界にガンゴトリ・ブームをつくり出し、禁断の聖なる地へのプロポーズが殺到することとなった。

HAJとしても早速、この新解禁エリアに登山隊を送るべく、取り敢えず1980年の登山学校の

目標山としてケダルナートのアプリケーションを提出した。

ケダルナートは、ヒンズー教の「シバ神の山」という意味を持ち、まさにその名にふさわしい堂々とした秀麗な山容で、ガンゴトリ氷河とキルティ氷河の合流点に聳える山である。山の標高、山容（ルート）、アプローチ …… 等々から検討して、登山学校に適した山であろうということで、ケダルナートが選ばれた。しかし実際はこの山を知れば知るほど、登山学校のように短期速攻登山を実践する山としては非常にやりずらい不向きな山であることが判明し、今後の登山学校の山の選定に反省を促した。

ケダルナートの許可取得はスピーディに進み、アプリケーションを出してまもなく許可が交付された。

1979年の暮も押し迫った12月22日に、HAJ登山学校委員会が開かれ、1979年登山学校（キャシードラル隊）の山倉隊長より引き継ぎを行う。1980年登山学校の執行体制は内田嘉弘隊長、南勲副隊長それにHAJの特別事業となっていたカンチェンジュンガ・プロジェクトに参画していた小生、尾形がインストラクターとして加わることになってスタートした。

年が明けて、1980年の1月26日～27日に、（社）日本山岳協会の海外登山技術研究会（第18回）が八王子大学セミナーハウスで行われた機会を利用して、ケダルナートの基本計画について話し合いがもたれた。

2月に入ると、カンチェンジュンガ偵察隊の出発準備も大詰を迎え、HAJルームは連日慌ただしい準備活動が行われるようになったが、そんな中でケダルナートの登山計画書も出来上り、全国に散らばる隊員に配布された。

カンチ偵察隊の本隊を成田に見送った翌日（3月2日）、京都の内田宅で基本タクティックスについてのミーティングが行われ、B・C以上13日間の登山活動日数という短期速攻戦術が討議された。

3月15日～16日の第1回目の隊員打合せは、折から来日されていたインド登山財団（IMF）幹事のジョギンダール・シン（中佐）氏を迎えてのインド・ヒマラヤ会議と併せて行われ、20名の隊員がこの日初めて顔を合わせた。この日の打合わせで出発迄のスケジュールが発表され、残された半年の準備活動は始まった。

5月2日から5日にかけてのゴールデン・ウィークに富士山での合宿を持った。5月2日の朝、三々五々、富士吉田駅前に集合した隊員は、スバルライン経由で5合目に至り、佐藤小舎へと向かったが、我々が佐藤小舎に着くや否や雪崩遭難事故の救助依頼があり、直ちに救助隊を編成して事故現場に向かった。内臓破裂の重傷者をスノー・ボートで搬出し、5合目から救急車で病院に運び、なんとか一命はとりとめた。初日から搬出活動という事で初山行とは思えぬ良いチーム・ワークで事に当たるのを見て、大世帯というチーム・ワークに対する一抹の不安は消し飛んだ。

翌日は、5合目の佐藤小舎から頂上までをピストンした。寒風に蒼氷と、まさに真冬並みのコンディションの中、慎重にケダルナート・ドームに想いを寄せながら登高し、頂上に登った。北海道からはるばるやって来た村上、物井の両嬢は、本邦最高峰の登頂でえらく感激していたようだった。

翌4日は、山中湖湖畔の保養所でミーティングを行い、3日間にわたる合宿は散会した。

この5月合宿から帰ってまもなく、エントリー・ビザ取得のためのメンバー・リストやウォーキー・トーキーの使用許可申請書、パッキングリスト等をコックス社（エージェント）を通してIMFへ送った。

今回の登山学校の隊員20名は、前述したように、北は北海道から南は九州・佐賀県に至る広域に散らばり、なかなか隊員が一同に会することは難しく、出発迄に顔を合わせる機会はほんの2～3回であった。そこで、こうした事情に鑑み、出発迄に隊員同志少しでもお互いを知りあおうと〝カンチ・ノート〟をまねて〝ケダルナート・ノート〟なる雑記帳を作って北廻り、南廻りの2冊を回覧した。人数が多いため、回ってくるまで日数はかかるが、それだけに回って来たときに読むボリュームも多く楽しみであった。もっとも北廻りの方はどこで途中下車してしまったのか、出発迄にとうとう目にすることができなかった。

6月の中旬になって、悲しい知らせが飛び込ん

で来た。北海道の物井さんがトレーニング山行中に事故を起こしケガをして入院したというのである。出発前の不運なアクシデントに依り、結局、彼女は参加断念を余儀なくされ、伴に悲しい思いをした。

6月28日～29日の第3回ミーティングでは、立川航空医学実験隊のお取り計らいに依り、低圧チャンバーで6,000m迄の高度経験を踏むことができた。この低圧実験に参加した隊員達は、各々初めて垣間見る6,000mの世界で現れる唇・爪のチアノーゼ、心拍数の増加、頭痛、思考力の低下などの諸症状に依って、高所登山に対する心構えを新たにしたようであった。

7月に入ると各担当者は8月中旬の隊荷梱包に向けて集荷態勢に入り、担当ごとに準備の方は着々と進んでいった。

ところが出発1カ月前の8月に入っていろんな問題が続出し、重大な局面を迎えることとなった。8月に入ってすぐ、僅か1週間の間に隊長、副隊長、ドクターの3名が急に参加できなくなったのである。出発を1カ月後に控えての事態で途方に暮れてしまった。

時間が無いだけに一刻の猶予も許されず、結局尾形が隊長となって、インストラクターにカンチ偵察隊から戻ったばかりの山田、角田の両氏を補充することでこの局面を乗り越えることに決った。

しかし、ドクターの方は八方手を尽してみたが、なにせ時間が無さ過ぎ、見つけることはできなかった。そこで不本意ながらドクターレスで出発せざるを得なくなってしまった。一応、何かの場合には同じ時期にメルーに入る飛騨山岳隊の山元ドクターにお世話して頂こうという厚かましいお願いを致しての見切発車であった。隊長、副隊長が旧知であったこともあってこの厚かましいお願いも心よくお引き受け頂いたものの、当隊の陣容に就いては大いに反省させられた。

こうしたゴタゴタの中で8月16日～17日の両日、隊荷の梱包が行われ、26日にはカートン24個、総重量432 kg の隊荷が日通航空に引き渡された。

隊荷も送り出し、あとはいよいよ出発という段階で最後の難題がまたまた持ち上がったのである。我々のエントリー・ビザ発給について、インド大使館よりクレームがついたのである。インド大使館のバルマ担当官の言い分は、ドクターが行かない登山隊というのはおかしいというのである。これもまたおかしい話だが、担当官が「発給できない」というのだから困ってしまった。やむなく大阪の好井ドクターからパスポートを取り寄せ、エージェントでわざわざ航空券を切って貰い、それらを提示して一緒に行くことを証明して、なんとかビザを発給して貰うことができた。この一件以来インド・アレルギーとなり、インド大使館には近付き難くなったほどの冷汗もので、今思い返してもゾーッとする。

こうして最後の最後まで、いろんな問題が沸き起こり、前途多難な事が思われたが、どうにかこうにか出発の運びへとこぎ着けることができ、9月4日、先発隊として尾形、北出の2名が成田を出発してデリーへと向った。

「ヒマラヤ、そして仲間達へ!!」
1982年5月5日から転載

参加の動機

1978年 ガルワールヒマラヤ
遠征隊．事前準備集から転載

ここに紹介するのは、ヒマラヤ登山学校に一般隊員として参加したメンバーが、どのような背景で参加したのかを、1978年ガルワールヒマラヤ遠征隊が、出発前に発行した「GHE・1978事前準備・研究集録」集から生の声を再録し、この登山学校の位置づけを考える参考としていただきたい。

高原　修

「'77年京都カラコルム・クラブ遠征隊」のパキスタンへの遠征が計画された時、参加の意志表示をし、計4名で計画が進められていたところ出発の2ケ月前、隊員が訓練中に事故に遭い遠征は中止されました。その時、同クラブの内田嘉弘氏より、HAJのヌン・クン遠征隊の隊員募集を教えていただき、費用、期間、山域も自分には適当と思えた事と、そして何よりも確実に実行されるであろうと思い参加を申し込みました。技術も経験も浅いのですが、普通の山行と同じ気持で行けたらいいなあと思っています。

安中秀子

ヒマラヤへ行きたいという自分がいた。それはトレッキングよりピーク・ハントをと願う自分であった。

しかし、地元のダウラギリⅠ峰隊に申し込む程の実力もなく、まして自分でリーダーシップをとることなど及びもつかないことであった。

そんなところ、月刊誌〝ヒマラヤ〟のニュースを見た。ヌン峰登山の隊員募集であった。応募要項を送ってもらってしばらく考えていた。しめきりが過ぎた。数日後、山が変るかも知れないけれどどうかという印刷物が届いた。私は考えることをやめて参加申し込書を発送した。

結局、自分は行きたいのだから考えてもあまり意味はなかったのだ。やってみなければ、いろいろな理屈はこねられない。

飯島孝夫

私がこの登山学校に参加したのは、私の所属する山岳クラブの先輩のすすめからであった。

私がヒマラヤへ行きたいと思いはじめたのは2年程前からであった。クラブの仲間2人とヒマラヤの7000米前後の未踏峰を登ろうという目的のもとにヒマラヤ研究会なるものをつくり勉強をはじめた。しかし、職域山岳会の我がクラブは遠征隊をだすという機動力はまだそなわってはおらず当面は無理ではないかという少々あきらめの気持ちがでてきた。そんな時に現在茨城県山岳連盟の理事長である加藤氏からこの登山学校の話しを聞き参加をきめた。

昨年の日本山岳会主催の登山学校（タルコット峰）に我がクラブの仲間である桧山氏が参加し、その登山学校の装備、食糧、タクティックス、その他の計画がすべてインストラクターサイドで計画され隊員の意見が入る余地がなく、いわゆるパッケージ登山であったという話しを聞き、今回のHAJ登山学校もそうなるのではないかという懸念があったが、稲田隊長並びに野中副隊長にわざわざ水戸までおいでいただきHAJ登山学校の目的なり計画を伺い、また東京集会、富士山合宿等に参加し、この登山学校が一つの遠征隊であるという見識になった。遠征隊の隊員の1人として、この遠征の成功を目指してがんばりたいと思う。

真島博志

私のように山歴、経験共に大変浅い人間でも、7000米の稜線に立てるということをヒマラヤで

実践してみたかったから参加させていただきました。近い将来に我々のクラブで遠征するチャンスが来た時に、この経験が何かの力になることだと思います。

釣　部　恵　子

「ヒヤラヤ、ヒマラヤ、ヒマラヤ……永年の夢だったヒマラヤに来年こそ行ってみたい。」こんな途方もない夢を抱いて、胸ばかりワクワクさせていたのは、1年以上も前のことだ。もちろんトレッキング。行きたい所はブータン、シッキム、アッサム地方。トレッキングも兼ねて、できれば4500米位の山に登りたい。そうなったら思い切って1年位は行ってみたい。とまあ、おおよそ計画はこんなところであった。ところが、かといって肝心な外国への入国手続きのこと、トレッキング申請のこととなると皆目検討がつかず、こんな計画性と実現性のない私に、会の先輩から今回の登山計画があるという話しをもらったのは締め切りも間近の去年の10月の頃だった。

計画の内容は、めざす山が7000米を越えること。これは別としても、今までの勤務先で頑張れば有休内で行け、止めずにすむ可能性が出てきたこと。色々考慮して正式に参加申し込みをした。

ヒマラヤ登山、そのましてや7000米を越える山に登るということは、それまでの私にとっては夢のまた夢で、この計画に隊員の一員として参加を決心することで、私の中に「ヒマラヤ行き」は質的に変化し、また大きな突破口ともなった。

「ヒマラヤに行きたい、そしてこの目でヒマラヤの山を見たい。そして登りたいのだ。」絵でもよい、写真でもよい、ヒマラヤの山々、その高峰に一度心を動かされた者が、ましてやそれが岳人であるならば、そうした夢を持つことに何の不思議があろう。

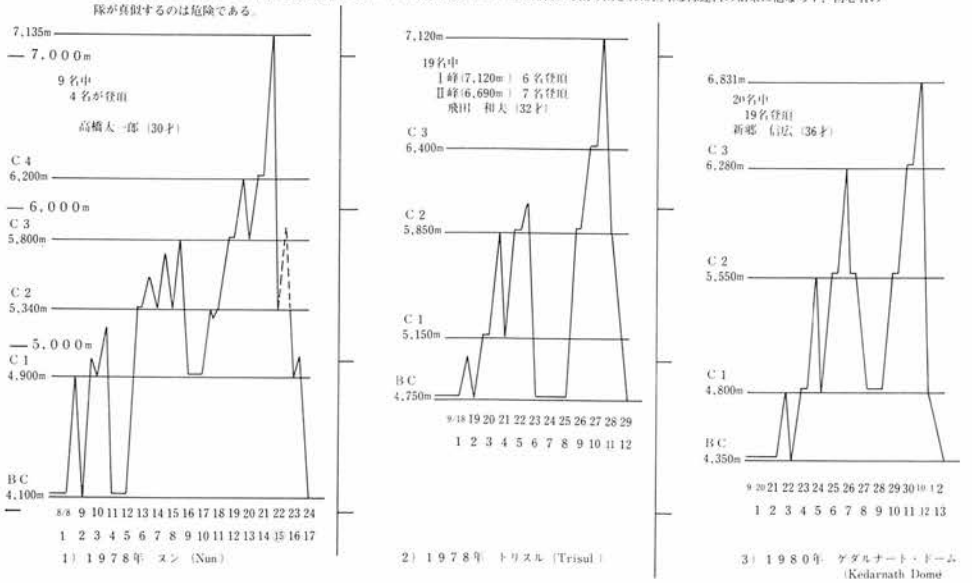
当初アタック目標にしていたヌンが登山禁止になり、止むなくトリスルに変更するという一連のいきさつもあったが、計画を進めていくなかで隊員も決まり、合宿も打ち、今は最終打合せ、隊荷の梱包、発送作業を終えれば、あとは出発を待つばかりとなった。また、私も分担された隊務を自分なりにやってみるなかで、今まで全く知らなかったことがわかってくる。これは1つの大きな喜びだ。青くさい言葉で言い切ってしまっても、やはり「勉強」になる。

そして、トリスルという1つの山に隊員全員が力を合わせて登るということ。このことに私は私なりに参加することに意義があると思っている。

日本ヒマラヤ協会主催・ヒマラヤ登山学校隊の一般隊員の順化例

1981. 11. 19作：山森

インドヒマラヤを舞台に協会が実施している登山学校は、その意図するところから「短期速攻型」となるがほぼ当初の計画どおりの登山を展開し参加者を満足させている。これは協会が派遣するスタッフの豊富なヒマラヤ登山経験から割り出された慎重な隊運営の結果に他ならず、初心者の隊が真似するのは危険である。



北　川　勇　人

1977年春、東京白稜会集会。「今年の夏にどこか海外の山へ行かないか？」と大先輩の中岡さん。私は去年アラスカへ行ったばかり、おまけに今年の秋は結婚する。ダメだ。

秋、私達の会と友好関係のある東京岳人倶楽部が来年の春にマッキンレーへ行く、私も……、そんな矢先に再び中岡さん。「来年、インド・ヒマラヤへ行かないか？」私はその場でOK。「野口さんがインド・ヒマラヤへ行ったことがある。それによると割合短期間で……」などどいろいろの情報。私は今の会の現状では6000米位が適当と考えていた。

そんなある日、日本ヒヤラヤ協会がヌン峰へ行くという。7000米級。中岡さんは高さに魅力を感じたらしい。結局、こちらに便乗することになるが、私の気持ちは複雑。ここで私の気持ちを整理してみよう。ヌン峰に便乗する気になった大きな理由として次の4点が考えられる。

1. いつも東京白稜会の仲間としか山行していないので他の山岳会の人たちと遠征に参加することに意義を感じた。私たち山ヤは「井の中の蛙」的すぎる。
2. 1ヶ月という短期間なのでなんとか仕事を休める。それに休暇を比較的とりやすい時期でもあった。
3. 遠征前の事務的な面に自信がなかった。おまけに横文字は全く弱いときている。
4. やはり7000米という高さが魅力。

しかし、気の進まない点もあった。それはこんな2点だった。

1. ヌン峰はあまりにも有名であった。
2. やはり東京白稜会の遠征を出したい。

何日かのち、この2点は解消された。

1. ヌン峰は登山禁止となり、トリスル峰に変更になった。
2. 海外遠征参加希望者が減少。東京白稜会のやる気のある2人はトリスル峰に気持がだいぶ傾いていた。

こんな訳で私はトリスル峰に参加希望することになった。残された問題はあと1つだけ。なにしろ私は結婚して1年もたっていない。私の愛妻は私のわがままを許してくれるだろうか？

飛　田　和　夫

1976年6月下旬、私は羽田に着いた。自分自身でもわかる程にやつれていた。3年程前からヒマラヤの計画を企て計画を進めた。6～7名程がおり私が隊長という事だった。海外登山の文献、又、経験者は身近におりさまざまなアドバイスを受けた。が、1つ1つの最終決定には悩んだ。しかし、それも楽しい想い出となるべきだったが、中止せねばならなかった。それも登山許可をやっと取得してからだった。

しかたなく3名は、中止の通知と共にトレッキングの申請を提出し、返事がないまま出発した。出発しなければいてもたってもいられない気持で。

当然かもしれないが、そんな私達に当局は何故中止にしたか、トレッキングの申請書が届いてないという。実際にはあったが。

許可を取り、リエゾンがつき、スカルドに向けて出発する時は約1ヶ月が過ぎ、トレッキング終了後ヨーロッパを回る計画でいた2名は、ヨーロッパを止め、スカルドへ向けて出発。休暇の関係で私は単身帰国した。私自身にとって出発前の準備、現地での対応等、それなりに勉強になったが……。

出発前の苦労が片付けられなくてはヒマラヤどころではないと思うが、あんな苦労をしないで、パッと行けないものかと、そんな時、HAJの計画を見る。これなら山に登るだけでいいかも。まして1ヶ月で7000米。だが行くからには、装備、食糧、その他の事について全く知らなかったではあまりにもみじめだ。今後の計画のためにもヒマラヤの基礎を学ぶのに絶好のチャンスとばかりに申込む。さらにより多くの人達と接し一緒に登る事は私自身のプラスになるのではないかと。

出発から帰国までの1ヶ月間で7000米にほんとうに登れるか不安はあるが……。

高山病症状？での登山は数度ある。いわゆる二日酔。一度わざとやってみたことがある。何はともあれ、素直な気持で楽しく登ってきたいと思っています。

角　田　不　二

21才の夏、私はひとりでネパールへ出かけた。ただただヒマラヤへ行きたかった。理由はそれだけであった。インドの旅も含めて4ケ月を向うで暮し、帰国した時、東京のおびただしいネオンと洪水にとまどいながら、私はただひとつのことのみを考えていた。「次は、どうやってどこへ出かけるか」である。1年の後、私は仲間と3人でカラコルム登山計画に着手した。最初の年は基礎調査で暮れたが、主催を出身の大学山岳部とし、資金計画、その他大学当局との交渉、JAC加盟、タクティックスの検討など具体的にもぼつぼつ進行していった。結局この計画が実現しなかったことは、今、私がHAJガルワール隊に入っていることで証せられる。メンバーが予想外に集まらなかったことや、山岳部内の諸々の問題などもあったが、要するに私と仲間達の力量不足が坐折の主因であり、私は己の未熟さを思い知った。が、この坐折が私をそれまで以上に完璧なまでの遠征病患者にしてしまったようだ。今、私は巨大な目標を持っている。ちょっとキザかもしれないが、私はそのことに対して“限りなき人生の喜び”を感知している。しかし、喜びや情熱だけで事が成就するものでないことは、以前の経験でよく知っている。その意味でトリスルは私にとってひとつのステップであり、必要欠くべからざる経路と考えている。

それは、ただ単に遠征を経験するとか、7000米を経験するということだけを意味しない。もちろんそれらは非常に重要なことだが、それ以上に私の場合、HAJを舞台に行動することを強く意識している。次に控えるより大きな目標のために、さらには自らのライフワークのひとつの場を確立するために、それは必要なことなのである。敢えて以前の仲間と離れてこの隊に加わった理由を私はそのように位置づけている。

西　田　茂　夫

登山をやるからにはヒヤラヤに行ってみたいという願望から参加した。

今回参加をしたのは、昨年の秋に日本ヒマラヤ協会の沖さんが北九州の小倉でヒマラヤの話をされて大変良かったので、私自身もヒマラヤの自然を自分の目で確めて見たいので参加した。又、私達のクラブがナンダデビィ東峰に行っているが、休暇の関係上参加出来ないため短期間で行けることはできないものかと思っていた。

しかし、トレッキングでは何かと不満足でありやはり行くからには低くてもいいので1つ山に登ってみようと思っていたところ、条件がピッタリの山行があるので参加しました。

中　岡　　久

ここ1～2年ヒマラヤへ行きたいという欲求が強くなり、少しづつ資料などを調べ‾いた時、たまたまHAJの隊員募集を知り、ヒマラヤへ行くのは初めてだし、また1つの海外経験としては手頃だと思い参加を希望したわけです。また僕はある山岳会に所属していますが、そちらの方ではいま、海外、特にヒマラヤへの機運が少しずつ高まっているわけで、山岳会の方へもHAJの情報はすべて流しています。そしてHAJに参加した経験を基にして自分たちだけのヒマラヤ登山をしてみたいわけです。そのことがHAJヒマラヤ登山学校の意義であり、それで僕らのような者を受け入れることができるのではないかと思っています。

鈴　木　節　男

私が山を登り始めたのは今から3年前の秋からのことであった。

それまでは、どうしてあんなに重い荷物を背おって山へ行き、そのあげくに遭難してずいぶんとくだらないことをやっている人種がいるものだなぁと真険に思っていた。

しかし、いざ自分が山へ行くようになると、どうしてこんなに素晴しいことを今までやらなかったんだろうという悔が残るのである。

私がヒマラヤに行きたいという気持ちになったのは、この冬山の魅力に起因するところがあると思われる。

山行をするにつれ憧れは拡大し、昨年の春ごろから絶対に一度はヒマラヤに行ってやろうという気持になってきた。

何気なしに始めた山が、ヒマラヤまで発展するとは自分自身におどろいているしだいである。行くと決まると着火した炎は燃えあがり、チャンスは絶対にのがすまいという気持になってくる。そういうときに降って湧いたように、私の目の前に表われたのが、HAJのトリスル隊々員募集であった。それ来たという気持で連絡をとったのである。

隊員としてエントリーしてからは、隊員の皆さんに迷惑のかからぬように自主トレに励んでいるしだいである。

ヒマラヤ登山学校の成果

HAJ ヒマラヤ登山学校一覧表

年	山	名	隊員数			登山期間	結果	B.Cから頂上までの標高差	B.Cから登頂日数
			派遣	一般	計				
1978	ヌ ン	7,135m	2	7	9	28	登頂4名 D_{41} 峰登頂4名	3,035m	15
1978	トリスル	7,120m	2	17	19	28	Ⅰ峰登頂6名 Ⅱ峰登頂7名	2,370m	11
1979	キャシードラル	6,400m	4	9	13	29	5,850mまで（アイスパス）	2,020m	（10）
1980	ケダルナート	6,940m	3	17	20	28	ドーム登頂19名	2,481m	12
1981	ナンダ・カート	6,611m	2	6	8	28	6,000m付近で7名行方不明	2,911m	（ 9）

第一回　カシミールヒマラヤ・ヌン（7,135m）
期　間　1978年8月4日～9月3日（31日間）

	氏名・年令	結果	その後のヒマラヤ登山
隊長	沖　允人（43）		
登攀隊長	小川　務（33）	8／23 D_{41}（5,813m）登頂	
隊員	鈴木　正規（47）	〃	
	安藤　忠夫（34）		
	飯村　富彦（33）	8／22ヌン登頂	
	高橋太一郎（30）	〃	
	東　英樹（28）	〃	1981年ガッシャーブルムⅠ（8,068m）登頂
	八嶋　寛（27）	8／23 D_{41}（5,813m）登頂	1981年ヤルン・カン（8,518m？）登頂
	寺本　政幸（27）	8／22ヌン登頂	1981年ナンダ・カート（6,611m）で死亡

第二回　ガルワールヒマラヤ・トリスル（7,120m）
期　間　1978年9月10日～10月7日（28日間）

	氏　名・年　令	結　　果	その後のヒマラヤ登山
隊　長	稲田　定重(38)		
副隊長	野中　和雄(29)	9／28 II峰（6,690m）登頂	
隊　員	鈴木　節男(24)	9／27無名峰（6,100m）登頂	
	畠山　秀夫(32)	〃	
	飯島　孝夫(25)	9／28 II峰（6,690m）登頂	
	安中　秀子(28)	〃	1980年バギラティII（6,512m）隊長・登頂
	角田　不二(25)	9／28 I峰（7,120m）登頂	1981年ヤルン・カン（8,518m?）登頂他遠征多数
	中岡　　久(28)	9／28 I峰（7,120m）登頂	1981年ランタン・リ（7,239m）登頂
	北川　勇人(25)	9／28 II峰（6,690m）登頂	
	飛田　和夫(32)	9／28 I峰（7,120m）登頂	1981年ヤルン・カン(8,518m ?)登頂
	釣部　恵子(24)	9／28 II峰（6,690m）登頂	1981年シシャパンマ（8,012m）
	野島　照雄(27)		
	今井　清和(33)	9／28 II峰（6,690m）登頂	
	和田　誠治(29)		1982年サトパント(7,075m)
	高原　　修(34)	9／28 I峰（7,120m）登頂	
	真島　博志(23)	9／28 II峰（6,690m）登頂	
	西田　茂夫(27)	9／28 I峰（7,120m）登頂	
	桑原　健一(29)		
	八嶋　　寛(28)	9／28 I峰（7,120m）登頂	1981年ヤルン・カン（8,518m ?）登頂他

第三回　クル地方・キャシードラル（6,400m）
期　間　1979年9月16日～10月14日（29日間）

	氏　名・年　令	結　　果	その後のヒマラヤ登山
隊　長	山倉　洋一(49)		
副隊長	佐々木　正(38)		
インストラクター	菅野　武士(33)		
医　師	吉野　英二(26)		
隊　員	住友　房夫(38)		
	照井　　博(34)		1980年ガネッシュ・ヒマールIII（7,130m）で死亡
	江端　峯男(32)		
	角田　　哲(31)		
	加藤　　守(28)		
	斉藤　則子(30)		
	戸部　洋子(25)		
	北畠須磨子(25)		
	志田セツ子(24)		

第四回　ガルワールヒマラヤ・ケダルナート（6,940m）
期　間　1980年9月13日～10月11日（28日間）

	氏　名・年　令	結　　果	その後のヒマラヤ登山
隊　長	尾形　好雄(32)	10／2ドーム（6,831m）登頂	
副隊長	山田　　昇(30)	10／1　〃	
インストラクター	角田　不二(28)	10／2　〃	
隊　員	大野　広美(37)	10／2　〃	
	新郷　信広(36)	10／1　〃	1982年冬期マナスル（8,156m）
	飯田　徳治(34)		
	遠藤喜重郎(33)	10／2ドーム（6,831m）登頂	1982年ブリクティ(6,720m)登頂
	宇佐美博康(30)	10／1　〃	
	関　　久雄(29)	10／2　〃	1983年シブリン（6,543m）予定
	高瀬　敏久(29)	10／2　〃	
	菊池　春枝(29)	〃	
	野畑　浩之(27)	〃	
	山形　正己(25)	〃	1983年シブリン(6,543m)予定
	丸　誠一郎(25)	〃	
	木村　陽子(25)	〃	
	熊谷　　洋(24)	〃	
	斉藤　光明(23)	〃	
	藤岡　明生(23)	〃	
	村上　豊子(23)	〃	1981年ブリグパント（6,777m）
	北出　昭彦(22)	〃	

第 II 部

計画から実践へ

募集と準備

　募集経過…… 23

　準備活動…… 24

　配付資料から…… 25

隊の構成 29

実践・行動報告 小 島 守 夫 30

募集と準備

１９８１年 ナンダ・カート隊の場合

1 募集経過

1. 1980年5月号（NO 102号）ヒマラヤで、会員に向けて「ナンダ・コット（6,861m）」隊員募集
2. 1980年9月号（NO106号）ヒマラヤで、目標の山が「ナンダ・カート（6,611m）」に変更になったことを広報し、併わせて、既に資料を請求した会員に対して「1981年登山学校実施山名の変更のお知らせ」を発送し、変更になった経過を説明し、改めてナンダ・カート峰の資料を添付した。
3. 募集資料の請求者に「1981年HAJ登山学校計画資料」をその都度発送した。資料請求者は最終的に24名となった。
4. 8月27日 ナンダ・カート峰初登頂の記録（ヒマラヤン・ジャーナル27巻)のコピーを資料請求者に送付
5. 10月20日ナンダ・カート峰に1972年登頂したインド隊の記録のコピーを資料請求者に送付
6. 1981年2月12日 参加申込者9名に第一回合宿通知と負担金納入通知を送付
7. 2月28日 募集締切り

1981年ヒマラヤ登山学校隊員募集

――ナンダ・コット(6,861m)――

地球上の最高所であるヒマラヤにおける登山は、岳人の誰もが憧れるところであり、素晴らしい世界であることはいうまでもありません。しかしながらヒマラヤ登山は高所という自然的条件がもたらす様々な技術的困難さと渉外をはじめとする複雑な準備があいまって、実現させることは容易ではありません。

ＨＡＪは、一人でも多くの意欲ある登山者にヒマラヤ遠征の機会をと、1977年以来、4度にわたり延べ90名近い会員をヒマラヤ登山学校隊として派遣してきました。このヒマラヤ登山学校は、確かな技術と経験を有する指導者（インストラクター）の統括のもとに、安全かつ確実を第1にできるだけ多くの隊員が頂上に立つことを目標として実施するものです。

国内における企画・研究・準備実務からはじまり、登山現場での高所登山技術の習得、帰国後の総括・報告までの遠征のすべての過程に隊員が参画して行なうことをモットーにしております。

81年は、日本のヒマラヤ登山が初まって45周年にあたります。ＨＡＪ登山学校はその**発祥の地、ナンダ・コット**で行なう予定です。

ナンダ・コットはインナー・ラインにあり、未解禁のピークですが、ＨＡＪの特別な活動により実現する見通しであります。渉外上、メンバーを早く確定させる必要がありますので、できるだけ早く申しこんで下さい。

目的 ①ナンダ・コット（6,861m）の登頂。
②ヒマラヤ登山の基礎習得

時期 1981年9月14日(日)～10月12日(日)
29日間（登山期間15日間）

負担金 69万円（航空運賃、他の変動によりスライド）

定員 隊員20名（申込順） インストラクター4名

申込み 1980年8月31日まで下記あて申込むこと
（詳しい資料を送ります。）

〒160 東京都新宿区高田馬場3－23－1 淀橋食糧ビル新館506 日本ヒマラヤ協会

2 準備活動

1. 第1回合宿

1981年3月6日（土）7日（日）の2日間に亘って参加者全員が東京の協会事務所に集合し合宿を行った。

隊員が広域にわたっているため、多回数の合宿より数は少くとも実のあるミーティングを行う方針を確認した。各隊員の意志の疎通は各係の仕事に関する事を通じて行い、チームワークを作り上げて行くことを確認した。

遠征隊の発想から実施までの方法、高所登山のあり方、高所障害等について全員で学習し、高所登山について理解を深めた。

任務分担については、食糧を関東地区隊員、装備を関西地区隊員、輸送、梱包を東北地区隊員が分担することを決定し、直ちに各係の基本計画策定に入った。

※この合宿の配付資料

A．ナンダ・カート登山基本方針（案）
　各係の基本計画策定に必要な基礎データを盛り込んだB5版16頁のもの

B．遠征学入門（PART－I～PART－V）
　ヒマラヤ誌上で会員の阿部淳氏が執筆した計画立案に至るまでのアドバイス。B5版11頁のもの

C．キャシードラル隊の準備と反省
　1979年登山学校隊山倉洋一隊長が、出発前にヒマラヤ誌上で発表した「キャシードラル登山の問題点」と帰国後、年報HIMALAYA1980に発表した「キャシードラル1979年」B5版8頁

D．高所登山と体力
　岩と雪71号に島岡清氏が発表した基礎体力の実験レポートB5版5頁

E．高所登山とトレーニング
　岩と雪75号に島岡清氏が発表した8,000m峰登山の体力強化法考察B5版6頁

F．出発までの日程
　第一回合宿から9月出発までの細かい日程表

2. 第2回合宿

5月3日（日）～5日（火）まで富士山、吉田口から頂上で幕営し、悪天候のため一般技術の訓練のみで下山。山中湖の宿舎へ移動し、各係の基本方針の検討を行った。

3. この後、全体打合せは8月の梱包作業まで行われなかったが、各係の担当者同志による打合せは数度にわたって行われた。各係の計画は相互に関係しており、電話、手紙による連絡は頻繁に行われた。

この準備段階に於て各隊員の意思疎通が計られ実のある準備が進められた。

4. 梱包作業

8月15日（土）～16日（日）に協会事務所で梱包作業を行った。遠征準備の国内での最終段階であるこの作業は、出発間近かと言うこともあって、精力的に、かつ楽しい雰囲気で進められ、更に終了後、出発までの最終打合わせが行われた。

5. 遠征までの学習

A．目標とする山の記録・写真等により、山に関する概念等について学習

B．機関誌「ヒマラヤ」連載の論文「遠征学入門」等により、遠征を行おうとする動機、発想から実施計画策定までのあり方、方法等について学習

C．過去の登山学校の報告等により、高所登山の実際等について学習

D．高所登山と体力、トレーニング、高所順応等について、過去の記録、論文等により学習

6. 参加隊員は、登山技術等については豊富な経験を有しているが、海外登山特に高所登山は未経験であるため、事前の学習も遠征のあり方、高所に関する問題等を重点的に学習した。

また、異なる文化に接した時のカルチャーショックを少なくするため、インドの文化等についても経験者の話等により予備知識の学習を行った。

3 配布資料から

1981．3．第11回合宿で
インストラクターから隊員に配付

ナンダ・カート（Nanda・Khat 6,611m）登山基本方針(案)

1. 目　標

ナンダ・カートの可能な限り多数の隊員による登頂

2. 隊の構成

隊長1名　ドクター1名　インストラクター2名　隊員9名　リエゾン・オフィサー1名　ハイポーター3名　コック1名　キッチンボーイ3名

3. 登山行動の概要

(1) 登攀ルートの概要

ピンダリ氷河（Pindar Gal)とチャングーチ氷河（Changuch Gal）の合流点附近の約4,000mにBCを設営。ピンダリ氷河下部アイスフォールをぬけ、トレイル・パス(Traills Pass 5,896m）下部の雪原に出る。この雪原にC1（5,100m）を建設し、ナンダ・カートから東にのびる稜にルートを求める。東稜の約6,000m附近に最終キャンプC2を建設し頂上に至る。

(2) 登山活動の概要

限られた登山期間（13日間)において、参加者全員が無理なく高所の順応を得て登頂できる行動を前提とし、登山期間を3期に分けて行動する。

i) 第1期

先発隊（2名）によるBC・C1の建設及びピンダリ氷河下部アイスフォールのルートの確保及び本隊の受入れ準備

ii) 第2期

6,000mまでの高度順化及び最終キャンプ建設と頂上アタック体制の確立

iii) 第3期

ナンダ・カートの登頂及び各キャンプの撤収

※　短期間に登頂を可能にするには、高所への順応が大きなファクターとなるので、積極的な高所順化への対応が望まれる。

尚、登山期間は、登頂の成功、不成功に関係なく13日間で打切る。

(3) 隊員行動について

i) 先発隊

先発隊は本隊より10日前に出発し、デリーにおける登山手続、隊荷の通関、物資の購入等を行い、リエゾン・オフィサー(L/O)ハイポーター（H・P）コックその他ベースキャンプポーター（B・P）等、及び本隊々員のキャラバンに必要な個人装備を除く隊荷と共にデリーを出発する。C1建設後、BCにて本隊と合流

ii) 本　隊

本隊は、日本出発前日に東京に集合し、デリー到着の翌日BCに向けて出発する。

iii) 登攀行動

BCにおける本隊及び先発隊の合流後は隊を2班に分け、日差行動を原則とする。

但し、班の編成は、隊員の体調により適宜変更することもありうる。

各キャンプにおける生活単位は3人一組とする。

隊の統括は隊長が行うが、登攀中の細部行動は各インストラクターの現場判断に基づいて行う。

H・PはBCよりC1までの荷上げのみとする。

(4) 登山活動における問題点

i) 登攀ルート上における問題点

a) ピンダリ氷河下部アイスフォール

アイスフォールの通過が、本登山のルートの上で最大の課題である。

BC～C1の高度差は約1,100mであり、

いかに効率良く、かつ、安全なルートを確保するか、先発隊の任務は大きい。

b) トレイル・パス下部雪原のヒドン・クレバス、この雪原は、ピンダリ氷河の涵養域となっているので、ヒドン・クレバスに充分注意を払う必要がある。固定ロープのない所では、アンザイレンによる行動を厳守し、確保したルートから外れないよう注意を要する。

ii) 高度障害に係る問題点

4,000m を越える高所においては、高度による障害を避けることはできないので、いかに障害の程度を低く押え順応するかを考えるべきである。

高所未体経験者にとって、高度障害は大きな不安ではあるが、いたずらに不安を助長させるのではなく、出発前の学習、体力の強化等により積極的に高度の問題に取り組み、高所登山技術の中で重要なひとつと言われる「自己管理」をスムーズにできるよう努めるべきである。

また、高所においては、意識レベルの低下により、高度障害の自覚は困難となるため、隊員相互による観察も必要であり、隊員同士の相互理解、チームワークが重要となる。

※出発前の学習で得た知識は、現実にその事柄に遭遇した場合、その対応処理が速やかに行なわれる。少くとも下記については目を通しておくべきであろう。

○高度障害に関する解説、研究、実例等に関する文献等

○海外登山の報告書等による海外登山の実情等

○その地方の気候風土、文化、人々の生活状況や物の考え方等

4. 予定日程

（省　略）

5. キャラバン日程

(1) 往　路

日数	行　　程		交通	距　離
1	Delhi	— Almora	BUS	
	Almora	— Kapkote	BUS	
	Kapkote	— Loharkhet	Trek	16 km
	Loharkhet	— Dhakuri (2,987m)	Trek	11.6km
	Dhakuri	— Dwali(2,743m)	Trek	16.5km
	Dwali	— Martoli (3,450m)	Trek	9 km
	Martoli	— BC(4,100m)	Trek	4.5km

(2) 復　路

日数	行　　程		交通	距　離
1	BC	— Dwali	Trek	13.5km
2	Dwali	— Loharkhet	Trek	28.1km
3	Loharket	— Kapkote	Trek	16 km
4	Kapkoto	— Almola	BUS	
5	Almola	— Delhi	BUS	

6. キャンプ配置

(1) キャンプ位置の概要

i) BC

ピンダリ氷河とチャングーチ氷河の合流点付近の右岸約 4,100m

ii) C1

ピンダリ氷河下部アイスフォールを抜け出た雪原の末端約 5,100m

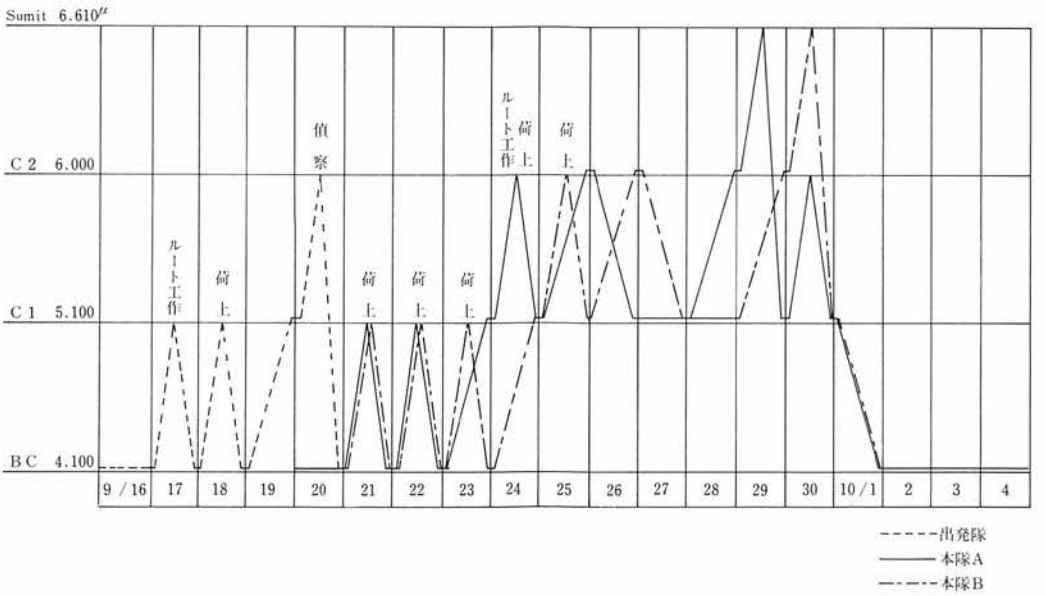
iii) C2

ナンダ・カート東稜上約 6,000m。ルートによっては主稜と東稜の間、上部雪原となる事も考えられる。

	テント数	標高	高度差
BC	隊員用テント L／O用（2～3人用）×1 H・P用（6～7人用）×1	4,100m	
C1	冬天（4人用）×4	5,100m	1,000m
C2	冬天（4人用）×2	6,000m	900m

※BCに於るテントはシカール社で準備

7. 行動予定表



8. 各キャンプ必要物資量

	食量 kg	生活器材 kg	燃料 kg	登攀器材 kg	その他 kg	計 kg	のべ宿泊 人数 人	のべ荷上 人数 人	最大可能 荷上量kg	左の60 % kg
BC	人日 123		日 ℓ 19×2							
	185	40	38	40	20	323				
	366	88	25	70	37	636	123	—	—	—
C1	23+14 =87	4 set	23+4 =27					(担荷量 20kg/人)		
	131	32	27	20	10	220				
	181	48	37	30	17	313	73	60	1,200	720
C2	26+7 =33	2 set	8+2 =10					(担荷量 10kg/人)		
	50	16	10	10	7	93				
	50	16	10	10	7	93	26	23	230	138

上段：各キャンプ必要量
下段：累積量

※ 重量原単位　食　糧：1.5kg／人・日
生活器材：8.0kg／天幕
燃　料：1.0kg／天幕・日

※ 個人装備、通信器材、行動時登攀用器材は含まず。

(1) 各キャンプ宿泊人数

	宿泊数				のべ宿泊人数					備考
	先発隊	本隊		リエゾン	先発隊	本隊		リエゾン	計	
		A	B			A	B			
BC	4	7	8	19	8	42−1	56−1	19	123	先発隊：2名
C1	1	6	5	−	2	36	35	−	73	本隊A：6名
C2	−	2	2	−	−	12	14	−	26	B：7名
計	5	15	15	19	10	89	104	19	222	リエゾン：1名

(2) ストーブ使用数

	宿泊数			ストーブのべ使用数				備考
	先発隊	本隊		先発隊	本隊		計	
		A	B		A	B		
C1	1	6	5	1	12	10	23	先発隊：1
C2	−	2	2	−	4	4	8	本隊A：2
計	1	8	7	1	16	14	31	B：2

(3) 最大可能荷上人数

	のべ荷上回数				のべ荷上人数					備考
	先発隊	本隊		H・P	先発隊	本隊		H・P	計	
		A	B			A	B			
C1	1	2.5	3.5	7	2	15-1 ※1	24-1 ※1	21	60	先発隊：2名
C2	−	2	2	−	−	12-3 ※2	14	−	23	本隊A：6名
計	1	4.5	5.5	7	2	23	27	21	83	B：7名
										H・P：3名

※1：先発隊の休養　　※2：C2ルート工作

(4) 各キャンプ荷下量

	生活器材 kg	登攀器材 kg	その他 kg	計 kg	のべ荷下人数 A	B	H・P	計	最大可能荷下量 kg	備考
C1	16 16	5 5	7 7	28 28	6	−	−	6	60	上段：荷下必要量 下段：累積量
BC	32 48	10 15	10 17	52 80	6×0.5 3	7×0.5 3	3	9	180	

9. 食糧及び装備について

(1) 食　糧

登山期間が短い事を考慮し、食べやすく、美味なものを中心に考える。また、高度障害への対策として水分の摂取量（約4ℓ／日）も考えて計画立案する。

(2) 装　備

i) 特に登攀に困難な山ではないので、登攀用機器等に特殊性を考える必要はなく、過去の登山学校等の計画を参考にしながら立案する。尚、アイスフォールの通過を考慮しFixロープ、スノーバーの数量は下記の通りとする。

Fixロープ	BC～C1	500m
	C1以上	200m
	計	700m
スノーバー	BC～C1	30本
	C1以上	10本
	計	40本

ii) 個人装備

登山期間及び都市滞在期間が短いので、余分な物は持たないように努める。

隊の構成

隊　長　　小島　守夫(41)1940.3
宇都宮市
(勤) 栃木県中央蚕業技術
指導所　宇都宮白峯会所属
1968　ボリビア・アンデス
1976　ランタン・ヒマール
1980　ランタン・ヒマール

副隊長　藤倉　和美(31) 1950.3 生
東京都豊島区
無職　雪と岩の会所属

1974　ツクチェ・ピーク(6,920m)登頂
1978　ヒマルチュリ(7893)登頂
1981　カンチェンジュンガ(8,598m)
登頂
※1976年には、ネパール政府に招かれて、ネパール人のみの登山隊の技術指導を行った。

隊員 鈴木 陽一(28) 1953.7. 生
神奈川県相模原市
(勤)日本電気(株) 横浜事業場
浜山岳部所属　　日本電気横

(積雪期) 槍ヶ岳　鹿島槍ヶ岳
白峰三山　聖岳赤石岳　仙丈岳
クンブ・ヒマール　台湾・玉山

隊　員　阿部　直彦(35)1946.1 生
横浜市旭区
(勤) 京橋郵便局　東京こぶし山の会
所属

(積雪期) 白馬岳主稜　鹿島槍ヶ岳
白峰三山　白馬岳～唐松岳

隊　員　　本田　荘八(30)1951.5. 生
横浜市緑区
(勤) 日本電気(株) 横浜事業場
日本電気横浜山岳部所属
(積雪期) 北岳　仙丈岳　表銀座縦走

隊　員　　埜口　正則(29)1952.5 生
吹田市
(勤) 吹田郵便局　岳友クラブ所属(積
雪期) 八ヶ岳　富士山　鹿島槍ヶ

岳～五竜岳　北鎌尾根　屏風岩

隊　員　　寺本　政幸(30)1950.11 生
愛知県津島市
(勤) 青山製作所
ちんぐるま山の会所属
1978　ヌン(7,135m) 登頂

隊　員　　斎藤　孝雄(35)1946.11 生　〒985
宮城県多賀城市　(勤) ソニー・マグネ・プロダクツ　雪包山の会所属

(積雪期) 剣岳北方稜線　朝日連峰
奥大日岳北面　早池峰
※尚、一般参加隊員として、この他に参加申込(申込書の提出と申込金の納入)があったのは、坂本正智(43)、高井勝夫(26)、勝畑浩(24)の三名がいる。坂本、高井の両名は7月に勝畑は5月に参加を取消している。又、この他に1名については申込書のみ送付され

申込金納入ないまま1980年12月に取消しがあった。

※読売新聞の1981年10月20日付「95分署」ー死を直視した山男……それでもヒマラヤへーの記事の中で記者が取り上げている「若松芳信(28)」氏が、この隊に「加わるはずだった」と書かれている。そしてこの隊に応募したのは10人に満たなく、若松氏もその一人だった。との事であるが、当方にはそのような該当者はいないので公正を期すために紹介した。

実践・行動報告

隊長　小　島　守　夫

1981年8月29日、藤倉副隊長、ネパールから本登山隊準備のためニューデリーに到着。

9月5日、先発隊の寺本隊員が成田を出発、7日にニューデリーに到着し、藤倉副隊長と合流、現地渉外、出発準備を行う。

9月10日、先発隊ニューデリーを出発し、アルモラに泊る。

9月11日、本隊（小島、阿部、斎藤、本田、埜口、鈴木）の6名が東京集合、出発準備を行う。

先発隊：アルモラ～カプコットへ（バス）

9月12日、本隊：成田発

先発隊：カプコット～ロハルケット（徒歩）先発隊に同行していたリエゾンオフィサーはアルモラへ引き返す。

9月13日、本隊：早朝ニューデリー着、午前10時チャーターバスでアルモラに向けて出発、宿舎でリエゾンオフィサーと合流。

先発隊：ロハルケット～ダクリ。

9月14日、本隊：アルモラ～カプコット（バス）先発隊：ダクリ～カティ。

9月15日、本隊：カプコット～ロハルケット。先発隊：カティ～プルキア。

9月16日、本隊：ロハルケット～ダクリ。先発隊：プルキア～ベースキャンプ。

9月17日、本隊：ダクリ～カティ。先発隊：約4100m地点までルート工作。

9月18日、本隊：カティ～プルキア。ナンダ・カートの姿をとらえる。BCの先発隊と初交信、先発隊：C1予定地までのルート工作。

9月19日、本隊：プルキア～ベースキャンプ(3700m)・先発隊：BCにて隊荷整理。

全員BCに合流。

9月20日、BC～C1途中～BC

朝から雨模様のため、C1入りを中止し、小島を除く7名とハイポーター3名が約4350m地点まで高所順応を兼ねて荷上げを行う。

尚、隊員以外のBCの陣容は、リエゾンオフィサー1名、ハイポーター3名、コック1名、キッチンボーイ2名、シカールトラベル社員2名である。

9月21日、BC～C1（4800m）

雲一つない好天となり、全員でC1建設に向う。

藤倉、寺本、ハイポーター1名計3名がC1泊。小島、阿部、斎藤、本田、埜口、鈴木とハイポーター2名、シカール社員1名は、BC～C1～BCと荷上げを行う。

9月22日、C1～C2途中～C1

藤倉、寺本、ハイポーターはC2へのルート工作（ナンダ・カートから東にのびる岩稜のクーロアールルートを求める）を行う。

本田、埜口、鈴木、ハイポーター2名、シ

カール社員1名はCIへ荷上げし、隊員はCI泊り。阿部、斎藤は4350mまで荷上げしてBCへ。

9月23日、C1～C2予定地～C1

藤倉、寺本、本田、埜口、鈴木の5名はC2予定地までルート工作してC1へ戻り、阿部、斎藤、H.P2名、キッチン1名がC1へ荷上げし、隊員はC1に宿泊、他の3名はBCへ、

9月24日　休養日

9月25日　C1～C2

藤倉、寺本、鈴木の3名はC2を設営し宿泊。阿部、斎藤、本田、埜口の4名はC2へ荷上げしてC1へ。小島がBCからC1に上り宿泊。HP2名がBCからC1へ荷上げしてBCへ。

9月26日、C2～C3予定地～C2

藤倉、寺本、鈴木の3名はC3予定地（約6000m）までルート工作してC2へ。
阿部、斎藤、本田、埜口の4名はC1からC2へ。小島、HP1名CI滞在。

9月27日、C2～C3（6000m）

久しぶりの快晴となる。C2の7名がC3の設営に向う。12時の交信でC3を設営中との報告であった。又その後の予定は、藤倉、寺本、鈴木が上部へのルート工作、阿部、斎藤、本田、埜口の4名はC2へ下るとのことであった。

16時の交信でC2に向ったパーティとの連絡が出来ず心配であった。しかし17時の交信でC2に向った4名がC3に戻っていることが確認された。正午すぎからの降雪のため、C2へのトレールを見失いC3へ引き返したものと判明。

C3の藤倉と協議した結果、この時点で再度C2へ下降を試みることは非常に危険であり、C3は4～5人用テント一張りであるが、何とか収容可能とのことなので、明日下山させることにした。

18時の交信、明日の行動予定について協議し、天候次第であるが、藤倉、寺本、鈴木の3名は頂上アタックへ、阿部、斎藤、本田、埜口の4名はC2へ下降と決定する。この時点でC1でもかなりの降雪なので、上部キャンプの雪崩等に対する安全性について確認したが、C3、C2とも大丈夫とのことであった。尚、降り続いているため充分注意するよう指示し、明朝7時の交信を約束して終了した。

9月28日

朝約束の7時に呼んだが応答なし。その後、7時30分、8時、9時、10時、12時と交信を試みたが依然として応答なし。トランシーバーの故障とも考えてみたが、C3には2台あるはずであり、2台同時に故障というのも考え難く、何らかのアクシデントが発生したのではないかと判断した。（状況から考えて雪崩に遭遇した公算が強い考えだが、しかし、C3・C2はC1から状況確認の出来ない場所なので、あくまでも推測の域を出ないものであった。）その結果、今後の対策を協議するため、一旦BCに下ることにし、午後1時HPと共に下山を開始し、午後5時BCに到着した。

BCにおいて、リエゾンオフィサー、シカール社のラジェシュ氏と協議した結果、29日HP3名をC1附近の状況確認に向わせる。一方、関係機関への連絡については、29日のHPからの連絡を待って、一名をニューデリーへ向わせることに決定した。

9月29日

HP3名がC1に向かい午後5時に到着した。しかし、C1はテント一張が雪崩により埋没しているとの連絡が入った。またその他のC1附近の状況からHPを更にC2、C3に向わせることは危険であると判断し、30日にBCへ下山するよう指示した。

9月30日

コックのダクを連絡のためニューデリーへ派遣した。HPがC1からBCへ下山。

10月1日

天候の回復が見られたので小島がHP2名と再度捜索のためC1へ上がり宿泊。

10月2日

C1からC2に向うも積雪が多く、C2到達は無理と判断し、クーロアール取付地点

から引返しBCに下山した。この間にリエゾンがアルモラに下山したことを知る。

その後ＢＣにて隊荷を整理し、10月4日、午前8時最後の呼びかけを行った後、BC を後にし下山を開始し、10月7日、カプコットで協会から派遣された伊東君と合流、カプコットに到着していたＩＴＢＰ救助隊に状況説明をした後アルモラに向う（ＩＴＢＰは11日にBC入りし、15日までC1附近で捜索を行ったが多量の積雪のため断念、18日BCを離れた。）

10月8日、ニューデリー到着、日本と連絡をとり、12日まで滞在し、再び小島がＢＣに向いＩＴＢＰと合流し、24日ニューデリー帰着、10月25日成田着。

第 Ⅲ 部

事故対策本部報告

事故対策本部日誌 …… 山森欣一 35
小島隊長からの通信 …… 37
渉外要員報告
　第一次・伊東満からの国際電話 … 伊東満 37
　第二次・稲田定重 …… 稲田定重 38
　第三次・八木原圀明 …… 八木原圀明 39
外務省領事二課からの情報 …… 41
捜索隊派遣までの経緯 …… 山森欣一 42
遭難家族同意書 …… 43
除籍まで …… 44
会計報告 …… 48

事故対策本部日誌

山　森　欣　一

10月3日（土）

15：00　稲田定重専務理事と山森欣一事務局長が稲田宅（福島県双葉郡浪江町）で事業推進の打合わせを行っているところへ、ニューデリーの旅行会社シカール社から国際電話が入り、ナンダ・カート隊遭難の第一報となった。その場で打ち合わせを行い、東京の事務所にいた菊地薫評議員と打ち合わせ、仕事の分担を行った。折り返えし東京からニューデリーへ電話を申込む。

17：00　ニューデリーと電話連絡がとれて、小島守夫隊長がベースキャンプで吹き込んだカセットテープを日本大使館で聴いた、と言う北海道大学山の会越前谷幸平氏から内容を聞くことができた。

18：00　隊員家族、協会役員への連絡を浪江、福島、東京で分担して開始する。

22：15　外務省・中村氏よりヘリコプター出動について問合わせがあった。

23：20　渉外要員派遣のためのチケットについてエアーインディア・石井晃氏と協議。

1981年10月4日（日）

7：00　稲田・山森東京本部へ入り直ちに対策本部の陣容を以下のように決定した。

ナンダ・カート峰事故対策本部

総括責任者　稲田定重（協会専務理事）

対策本部長　山森欣一（協会常務理事）

本部員（報道関係）菊地薫（協会評議員）

（家族関係）八木原　圀　明

土　居　正　勝

（総務関係）尾　形　好　雄

佐久間　　隆

（現地派遣）伊　東　　満

15：00　高田馬場・シチズンボウル2階会議室に於て、家族・友人・報道等関係者に対する説明会を開催。

16：40　成田に到着した越前谷氏から、ベースキャンプで小島隊長が吹き込んだカセットテープを受取る。第一次渉外として伊東出発。

22：00　宿舎の大正セントラルホテル会議室に於て家族・友人・報道等に対して小島隊長肉声のカセットテープによる事故報告を公開。

10月5日（月）

13：00　冬期エベレスト西稜登山計画の中止を決定し、スポンサーとの契約を解除した。

15：00　家族への説明会席上に於て、最悪の場合を仮定して今後の対策について協議。捜索隊の概要について検討した。

20：45　大正セントラルホテル会議室で家族会を開き「遭難の最終結論は小島隊長から電話により事故対策本部に情況報告があった後決定する。10月6日夜までに生存が確認されなければ次の行動（捜索隊派遣等）を開始する必要がある」ことを確認した。

又、家族会の出席範囲を協定した。

23：30　捜索隊派遣について家族の意向を打診した。

10月6日（火）

18：20　家族会の模様をNHKから撮影したい旨申入れがあった。家族と協会から今回の事故についてNHK放映に行き過ぎの面があったことについて抗議した。捜索隊の想定される規模や費用について家族側に具体的に説明を行った。派遣については一家族が反対であった。

10月7日（水）

20：50　家族会を開き捜索隊派遣について具体的な意見交換を行う。その後家族だけの話し合いを持った。

21：50　再度家族会を開き、捜索隊派遣について家族側の合意内容が確認された。しかし、一家族が反対の立場であり協会側は受け入れ

ることができなかった。その後、協会側に何点かの質問があり捜索隊派遣について全家族が合意したため協会もこれを受けることに決定した。

10月8日（木）

18：00　ニューデリーに帰着した小島隊長からの電話による報告が入り、これにより遭難と結論を出した。

20：00　家族会を開き小島隊長から受けた事故状況とその後について報告した。

10月9日（金）

13：25　大正セントラルホテルで最後の家族会を開催し、捜索隊の派遣スケジュール、小島隊長帰国報告、今後の連絡方法等について協議した。又、捜索隊派遣についての全家族と協会との合意書の作成について原案が出され了承した。

10月12日

協会々員に対するカンパ依頼状を発送。

10月15日

第二次渉外員として稲田出発。

10月17日

第一次渉外員伊東帰国。入れ代わりに第三次渉外員として八木原圀明出発。

10月18日

第二次渉外員稲田帰国。

10月21日

捜索隊の先発として菊地薫隊長、鈴木茂隊員がカトマンズに向けて出発。

10月25日

捜索隊の本隊として尾形好雄副隊長他6名がニューデリーに向けて出発。小島隊長帰国。

10月26日

小島隊長・山森事務局長が外務省・日山協等関係機関にお礼傍々挨拶に回る。

10月31日

午後からシチズンボウルに於て小島隊長による事故報告会を開催した。終了後、各キャンプから回収できた隊員の遺品の引き渡しを行った。第三次渉外員八木原帰国。

11月2日

捜索隊ベースキャンプ設営

11月14日

ナンダ・カート通信No 1 発行

11月24日

ナンダ・カート通信No 2 発行

11月28日

捜索隊ベースキャンプ撤収

12月6日

捜索隊本隊帰国

12月10日

ナンダ・カート通信No 3 発行

12月20日

東京・岸記念体育館に於て捜索隊報告会を開催した。続いて合同追悼会・家族会を行った。

12月25日

家族からの除籍手続きを速やかに行って欲しい旨の申入れがあったので法務省民事局第二課の戸籍係に出向き、事故状況・捜索状況・各家族の除籍についての考えと手続情況を報告し、各法務局に対して速やかに死亡届受理の見解を出されたい旨申入れを行った。（山森事務局長）

1982年1月13日（水）

読売新聞・夕刊「ニュースすくらんぶる」の欄に捜索隊の模様がとり上げられ報道された。

1月16日

ナンダ・カート通信No 4 発行

1月17日

寺本政幸隊員葬儀（愛知県津島市）が行われた。小島守夫、菊地薫、山森欣一参列。

1月22日

法務省民事局第二課よりナンダ・カート事故の7隊員については「死亡」と認める旨連絡が入った。

1月23日

ナンダ　カート通信No 5 発行

1月24日

埜口正則隊員葬儀（大阪府吹田市）が行われた。小島守夫、菊地薫、山森欣一参列

1月27日

ナンダ・カート報告書に掲載する各隊員の追悼文依頼状を発送した。

1月31日

鈴木陽一隊員葬儀（山形県南陽市）が行われた。

小島守夫、菊地薫、稲田定重参列

2月14日

藤倉和美副隊長葬儀（福島市）が行われた。山倉洋一、稲田定重、菊地薫参列

斎藤孝雄隊員葬儀（宮城県塩釜市）が行われた。小島守夫、西郡光昭、山森欣一、伊東満参列

2月21日

本田荘八隊員葬儀（新潟県長岡市）が行われた。小島守夫、稲田定重、館野秀夫参列

3月9日

捜索隊八ミリフィルムを希望者に複製して発送した。

3月10日

ナンダ・カート通信No6発行

3月15日

外務省より死亡関係書類受理

3月28日

阿部直彦隊員密葬（横浜市）が行われた。小島守夫、山森欣一、佐久間隆参列

4月 1日

阿部直彦隊員葬儀（大分県竹田市）が行われた。山森欣一、片岡邦夫参列

4月 2日

ナンダ・カート通信No7発行。ナンダ・カートベースキャンプ訪問申込書発送。

4月 8日

全隊員の葬儀が終了したのでナンダ・カート事故に対しご協力いただいた皆様へお礼の文書発送。

5月 6日

ベースキャンプ訪問について意思確認を行った。

小島隊長からの通信（肉声を吹き込んだテープから）

ナンダ・カート峰隊について悪いニュースを送らなければならなくなりました。順調にルートを延ばしていたのですが、27日、C3入りした藤倉以下3名と、C3からC2に戻る途中トレールを見失い、C3に戻った4名計7名との交信が27日夜6時の最終交信を最後に、28日の最初の交信である朝7時の交信から29日の現在までコンタクトできずにいます。多分、27日夜からの降雪のため、雪崩に襲われた可能性が強いと思われます。私とハイ・ポーターの1人はC1にいましたが、28日の昼ごろまでに60～70Cmの積雪がありました。

28日12時の交信まで続けましたがコンタクトできず、B・Cに下ることに決定し、夕方5時にB・Cに下り着きました。その後B・Cから交信するも連絡とれず、リエゾン・オフイサーとシカール社のラジェ氏と協議し、29日、早朝、3名のハイ・ポーターを捜索のため、C1に上げましたが、依然として天気が悪く期待薄です。連絡について協議をした結果、コックをデリーまで行かせた方が早いということで、この連絡を届けることにしました。在インド日本大使館、I・M・Fにはとりあえず現段階のことについて、シカール社から連絡をしてもらうことにしてありますが、その後の対策については、手を打てずにいます。こんな結果になって誠に申し訳ありませんが、今後の対策についてよろしくお願いいたします。

9月29日、B・Cにて 小島。

（テープに少し間があり）

その後の経過について若干お知らせしたいと思います。

29日夜、C1に達したハイ・ポータからの連絡によりますと、C1のテントが、多分、28日夜と思われますが、雪崩で流されて埋没しているとのことです。以上のような経過から、このままハイ・ポーターを上部で動かすことは、さらに危険を増すことにもなりますので、29日夜の段階で、30日にC1を徹収してB・Cに下山することで決定いたしました。つきまして私のその後の行動予定としては、3日までB・Cに滞在し、予定通り4日にはデリーに向けて下山したいというふうに考えております。その件よろしくお願いいたします。

渉外要員報告

◉第一次　伊東満（10月4日～10月17日）

－10月5日16時39分国際電話－

今朝、デリー着と同時に大使館の八嶋さんが空港まで出迎え。八嶋さんの情報は次のとおり。

状況については、クマールの情報と変わりなし。大使館の情報源は、Mr・クマールとI・M・Fからである。Mr・クマールの情報は、彼のスタッフのB・Cからの手紙によるものであり、この手紙のコピーは、越前谷氏から受け取ったものと思う。

大使館から外務省を通じヘリの要請をした。陸上からの捜索は出た模様であるが、確認できない。新聞の捜索隊準備中の報道は、I・M・Fのできるであろうという話が大使館に伝わり、大使館から新聞社の取材に対してでるであろうという言葉が準備中に変った模様。

陸上からのヘリを飛ばしても状況の確認ができないかもしれない。I・M・Fのサリーン氏の見解は、捜索隊が行っても無駄であろうといっている。水曜日、木曜日は宗教上の行事で休みになるためヘリは飛ばせない。ヘリによる捜索は、今日と明日の2日だけに限られる。

C1とC2の2パーティに分かれているの情報は、インドのI・T・B・Pから得たものと思われるが真偽は不明。

以上が八嶋さんによって得た情報です。結局のところMr・クマールの情報が最も信頼性があります。

IMFの件ですが、午前中IMFへ行きましたが、サリーン氏は会議中で会えませんでした。午後、再度会う予定ですが、サリーン氏の部下の方とお話しをしまして、ヘリと地上からの捜索を行なうよう要請中です。午後、サリーン氏と会って再度、要請する予定です。

Mr・クマールの見解では、小島隊長がデリーに帰るのは7日夕刻ごろであろうと推定される予定は、4日B・C発、6日夕刻カプコット着、7日夕刻デリー着。それでヘリと地上からの捜索が決定しましたら、すぐに再度、電話をいれる。ヘリに生存者をできるだけ多く収容したいので私はヘリには乗りません。小島隊長をヘリで収容することは、小島隊長がベースを出て下山中の可能性もあり、無理かも知れません。

だいたい以上のところです。その後の新しい情報についてはデリーでも得られておりません。

◉第二次　稲田定重（10月14日～10月18日）

第1次渉外員として派遣した伊東満が休暇の都合で帰国せねばならないこと、HAJ の責任ある立場の者が行く必要が出てきていることなどから急拠出発の運びとなった。

10月14日（水）

浪江からタクシーを飛ばして30分、原町駅より24時30分の急行に乗る。

10月15日（木）

上野5時19分着。モノレール浜松町駅で尾形君より大阪までの航空券と渉外旅費を手渡され、羽田発7時55分のANAで大阪空港9時着。空港で西遊旅行の中江氏よりデリー往復チケットを受領、10時45分発TG921便に乗る。マニラ経由バンコック17時30分着。22時発のTGに乗り換える。

10月16日（金）

ニューデリー空港着2時。伊東君とクマール氏の出迎えをうけ、インペリアル・ホテルに入る。伊東君よりこれまでの経過を聞き、4時就寝。

8時30分、シカール社に行きクマール氏と捜索隊派遣にともなう諸事項をひとつずつつめて行く。また、在印中の渉外事項の進め方を打合わせる。

10時30分、IMFに行き、モトワニ事務局長にこれまでの協力を感謝するとともに捜索隊派遣に必要な協議を行う。登山パーミッション、ロイヤリティ、リエゾンの件、その他スムーズに運んだ。しきりに冬のヒマラヤの危険を説かれるが、精鋭隊であることを強調して納得を得る。

10時50分、エアー・インディアにJ・シン氏を訪ね、小島隊の隊荷輸送の件で協力を依頼、エクセスなしのフリーパスとしてもらうことでOK。氏のはからいでH・C・サリーン氏、ITBPヘッドクォーターと連絡をとりアポイントを取りつける。

15時、日本大使館に八嶋書記官を訪ね種々話合いをする。HAJの諸要請に関していかに大使館が精一杯対処しているか、対策の問題点などを話される。ひとつずつ話をつめて了解をいただくとともに今後の方策、死亡証明書の件など協議して辞去する。

17時30分、IMF総裁H・C・サリーン氏と通信省別館で会う。御協力に感謝するとともに現在までの状況を聞き、捜索隊受入れについてお願いする。大変懇切な対応に只感謝。

18時30分、伊東君は今夜のフライトで帰国のため空港へ向う。諸事伝言を依頼する。ホテルで整理と記録を行う。走りづくめの1日だが疲れは感じない。日本へ電話3回。

10月17日（土）

8時30分、ITBP司令官フカム・シン氏宅を訪問、救助活動に御礼を申しあげ、状況を聞く。既にITBP隊は下山の途についていることを知る。遭難防止に関して氏のアドバイスを聞く。

10時40分、IMFにモトワニ事務局長を訪ねて捜索隊派遣の件、他について細部をつめる。小島隊のリエゾンが漸く帰ってきていてさかんに事情聴取を受けている。大使館の八嶋氏も来ていて一諸に今後の対策をお願いする。

14時、シカールに行き捜索隊受入れの具体策を打合わせる。16時、ホテルに帰り引きつぎ事項をメモ、17時、ヨーク・ホテルに仙台トリスル隊を訪ねる。18時、YMCAホテルに旭川隊を訪ねてミーティング、捜索協力の申し出を受ける。

18時50分、ニューデリー山岳協会々長アルワリア氏（国会議員、今回のアジア大会聖火リレーの第1走者をつとめた）の自宅に行きHAJとの協力関係について話し合う。

19時55分、J・シン氏宅を訪問、その後市内に出て会食、22時30分ホテルにもどり帰国準備。23時55分、チェックイン完了。日本へ電話3回。

10月18日（日）

ニューデリー発2時20分、TG933便にて第3次渉外員の八木原氏の空港着とすれ違いに出発する。仙台隊と一諸になる。バンコックにてエンジントラブルのため正午発のTG600便にのりかえる。待合時間に日本に電話で概要を連絡。

成田着22時20分、電車がないため上野駅でステーション・ビバークをする。

10月19日（月）　上野発7時、帰宅11時10分。何ともあわただしい渉外であった。

◉第三次　八木原圀明（10月17日～10月31日）

10月17日　成田発。出発前成田で帰国した伊東と会い、引継ぎを行う。

18日　ニューデリー着。日曜日のため動けず。仙台山岳会隊のトランシーバーの件で電話が2本入る。

19日　11時にシカールトラベル社のラジェッシュ氏がホテルへ来て打合わせを行う。

① I・M・F訪問＝モトワニ氏とクリシュナ氏に会い、英文メンバーリストを渡す。捜索隊の申請書を提出すると、今

回は登山ではなく捜索なので第三キャンプ（約6,000m）までの許可とのことであった。小島隊のリエゾン・オフイサーの事故報告書はI・M・Fに届いているので明日コピーを受取ることにする。I・TB・Pの報告は未だ届いていない。ジョシマートのヘッド・クオータへ帰ってから報告書を作成するので1週間以上かかるであろう、とのことであった。更に捜索隊の増員の場合の必要事項について細かくアドバイスを受けた。

② 日本大使館訪問＝矢嶋二等書記官と会う。和、英文の捜索隊計画書を渡す。現地で参加してもらう旭川志岳会の3名について事情を説明。死亡推定証明書の発行については、I・T・B・P、L／O等の報告書が届かなければ難かしい。大使館では、伊東、稲田に言ったことと同じことを長時間聞かされた。又、I・TB・Pの行動はヘリコプターの飛行等と共に軍事機密であり明確には出来ないとのことである。

③ 東京からL／O変更依頼の電話入る。

10月20日 シカール社訪問＝L／Oの変更依頼の手続きを頼む。シカール社員がL／Oの報告書のコピーを取りにI・M・Fへ出向くが、サリーン総裁が読んでいないのでコピーできないとのこと。エアーインディアのジョギンダール・シン氏は病気のため出社していない。I・M・Fから捜索隊の隊荷の総量を聞かれる。

10月21日 ①エアーインディアのカプール氏から捜索隊の日程の質問ある。②エアーインディアのジョギンダール・シン氏を訪問しL／Oの交代についてI・M・Fモトワニ氏に電話で依頼。L／Oはサリーン氏の推せんなので交代は難かしいとのこと。シン氏は、L／Oを呼んで諦めさせるとのことであったが最終的に変わらなかった。③トランシーバーの出力が大きいために内務省とI・M・Fで話がつかず、許可の件長びくもよう。④東京から捜索隊と説明会、死亡証明書について電話あり。

10月22日 東京との電話連絡

10月23日 小島隊長が早朝ホテル着。東京へ電話入れて報告。小島隊長は、アルモラのディストリック・マジェスターの報告書とI・T・B・Pのレスキュー隊長の報告書を持ちかえる。日本大使館へ小島と共に報告に行く。

10月24日 東京から電話が入ったので、小島の帰国予定や大使館の死亡推定証明書について報告。I・M・Fと日本大使館へ報告と挨拶に行く。夕刻L／Oがホテルに来た。カトマンズから電話が入っており明日夜3名が来るとのこと。小島ニューデリー発。

10月25日 カトマンズより捜索隊第一陣として、菊地、山田、鈴木到着。打合わせを行う。

10月26日 捜索本隊尾形以下6名がニューデリーに到着。準備に入る。菊地、尾形はI・M・Fに行きトランシーバーの通関依頼を行い空港で本隊の通関をする。シカール社と捜索隊について打ち合わせ。灯油講入許可証の取得を行う。L／Oと共同でトランシーバーの使用許可を強行する。

10月27日 デワリ祭。隊荷整理、梱包。菊地、尾形、八木原はジョギンダール・シン氏を訪問し、ベースキャンプ～ニューデリー～東京の連絡網について、エアーインディアの協力を依頼する。東京と連絡。

10月28日 日本大使館を訪問。捜索隊現地からの連絡網について相談し、大使館～本省について協力を依頼。シカール社々員とトランシーバーの通関。捜索隊は午後2時過ぎニューデリーを出発。大使館へ事故隊員のパスポートの返戻について確認するが、これは、除籍終了後、大使館－本省－法務省－家族のルートで返戻されるとのことである。

10月29日 東京と連絡、細かい業務の指示がある。I・M・Fに行き最後のツメを行う。

10月30日 夜のエアーインディアにてニューデリーを出発。

10月31日 成田着、家族報告会へ出席。

10月8日 朝

外務省領事二課からの情報

（第一項）

6日、大使館よりインド外務省、国防省、空軍司令部及びI・M・Fに対して行方不明の捜索のためヘリコプターの出動を要請。これら各省と接衝を重ねた結果、午後4時にいたって天候が許せばヘリコプターに依る捜索を7日早朝より開始する旨、決定をみた。この決定に対し、インド空軍当局は、(イ) 捜索対象地域が、標高6,000mであること、(ロ) ナンダ・カート峰を中心として標高5,000m～6,000mの稜線がU字状に走っているため、悪気流がうずまいていると考えられるので、ヘリコプター搭乗員にとってはきわめて困難な飛行になることを指摘すると共に(ハ) 捜索対象地域は悪天候が続いているので飛行には事故発生の懸念があり、慎重にすすめる必要がある旨、表明した。また、空軍当局はすでに行動を開始しているインド・チベット国境警備隊（I・T・B・P）と緊密な連係をとりつつ捜索を行なうこととし、UP州（ウッタールプラデイッシュ州）、カップコットに下山しているとみられる小島隊長とすみやかに連絡をとるよう努力するとしている。(ニ) さらに、インド空軍当局は、このような悪条件が続く限り、仮にC・3の所在を確認し、行方不明者が生存していることが判明しても通信連絡物資投下などは行なえるであろうが、ヘリコプターからの救助員の降着、遭難者の救出はまったく不可能に近いとしている。

7日午後5時、現地より大使館に入った連絡に依れば伊東満は、10／7 B・Cを出発して下山した小島隊長に会えた模様であり、同隊長は、近く当地に帰着するおもむき、また、I・T・B・Pは8日、B・Cに向けて出発する予定のおもむき。

（第二項）

6日夜、大使館より日本ヒマラヤ協会の捜索隊派遣の意向を詳しくモトワニI・M・F 事務局長に伝えたところ同事務局長は、とりあえずの所見として(イ) 空軍及びI・T・B・Pに依る空地連合の大がかりな捜索救助活動が開始されたばかりであり、この活動をみまもりつつ現地からの報告を待って、日本側のレスキュー・パーティの派遣を検討すべきではないかと述べると共に、(ロ) 山の条件は、刻々変化するものであるし、10月下旬となれば遭難の発生した地域は厳冬期になりヒマラヤ登山に経験豊富なベテランで編成されたレスキュー・パーテイーといえども容易に接近できないと述べ、さらに(ハ) 日本隊が派遣されるとしてもインドの捜索救助活動の指揮下に入って側面から協力してもらうにとどまることになろうと述べた。

（第三項）

当館としては、上記二項のモトワニ事務局長の言の他、小島隊長及び日本ヒマラヤ協会の伊東満が、インド側の捜索活動に参画していることも考慮し、現在行なわれているインド側の捜索救助活動の進行ぶりをみまもりつつ、その方針及び状況判断をふまえた上で対処すべきものと考えるので日本ヒマラヤ協会の捜索隊派遣については今週末ないし来週早々にI・M・Fの最終的判断をへた上で報告することといたしたい。

捜索隊派遣までの経緯

山　森　欣　一

連日、夜遅くまで続く隊員家族への説明はこと細かな点にまで及んだ。この中にあって、10月5日には、稲田、山森、菊地によって、冬期エベレスト計画の中止が話し合われた。そして中止することで合意をみた。

この10月5日午後8時半過ぎから行われた、説明会の席上で、家族会の構成メンバーが決められ、この家族会によって①最終的な結論は小島隊長から直接、事故対策本部へ報告が入った時点で本部が決定する。②生存の確認が6日夜まで無い場合は、次の行動を起さなければならない。と決定された。

そして夜になっても「生存」の連絡が入らなかったため、午後11時30分から家族会を開き、次の行動即ち「捜索隊」の派遣について家族と協会側で種々協議に入った。

家族の大部分は派遣を希望していた。しかし、翌6日に行われた家族会では1家族が反対を表明した。席上、協会側が家族の皆さんに提案したのは、

① 仮に派遣する場合は隊員家族の全員一致の要請がなければ、協会としては受けられない。
② 家族対策としての名目的な隊ではなく、実質捜索を行う隊である。
③ 隊員に協会が付保した隊の保険金は、事故処理（捜索以外）に補充する約束になっているが、捜索隊を派遣することが決まれば、これを全て協会が拠出する。
④ 残額は隊員家族が均等して分担してもらいたい。
⑤ 捜索隊の目的は、遺体の発見にあり、遺留品、遺骨の収容を第一義の目的とするものではない。

この日の討論の中では、捜索隊の経費概要を示すことが出来なかったため、翌7日には明細を説明した上で更に協議を行ったが、前日同様1家族が反対であった。協会側が提案した①の件があるため、これでは派遣は不可能であった。

そこで暫らく協会側を除いた家族の間だけで話し合いをしてもらい、更に捜索隊の内容に関する細かい質問があったが、結局反対している1家族も派遣に同意した。(もっともその後、家族関係者から聞かされた話しでは、このようにかなり強力に派遣反対の立場を表明した家族がいたにも拘わらず「反対したかったが、反対と言える雰囲気ではなかった。」「協会が派遣の方向へ持っていった。」との話しがあると聞く。)

こうして総費用約1,600万円（隊員12名）期間1ヶ月半の捜索隊派遣の合意をみた。費用は保険で充当する600万円を協会が負担し、900万円を隊員8家族で均等分担することになった。

協会は事故処理に当てる予定であった隊員の保険金を拠出したため、捜索隊以外に既に支出し今後も見込まれる事故処理費用を会員からのカンパと役員への支援依頼によって何とか切り抜けることにした。又、当面の捜索隊に係わる費用（保険金は除籍が済まなければ請求出来ない。）についての資金調達しなければならなかった。

「遭難の七人は絶望」

小島隊長から直接連絡

▲ 1981年10月9日付読売新聞（朝刊）

遭難家族同意書

遭難捜索隊の出動を要請するに当り、遭難家族会での意見を次のようにまとめる。

1. 捜索の目的は、あくまでも遺体の発見であって遺骨、遺品の収集を絶対的に要求するものではない。
2. 捜索にあたって、目的を達成できない場合でも何ら異議はありません。
3. 捜索隊に託す家族の気持は、遭難者家族の眼となり、手足となって現場の状況を確かめ報告いただけることによって、心の整理をしたいところにある。
4. この捜索活動が、今後の日本山岳界、日本ヒマラヤ協会、後継者に対し、何らの形で貢献するであろうことを願う気持がこめられています。
5. 捜索費用に関しての確認
   (1) 出発前隊員にかけられていた保険（簡易保険：100万円）全額を捜索費に充当することを承諾いたします。
   (2) 総費用約1,500万円のうち、上記保険で不足する900万円は、隊長家族をも含む8家族で均等負担とする。
   (3) 上記負担金の一括払いができない場合は、協会を窓口として何らかの方法により、分割払いの方法を検討し、最終的には、平等に支払いできるように運用する。
   (4) 家族全員の努力にもかかわらず、必要資金900万円を調達できない場合は、協会も含めて別途協議する。
6. 捜索隊の二重遭難に対する保障に関しては、家族会では責任を負えない旨、協会に了解をいただく。
7. 捜索隊が無事帰国の際は、家族会にて「慰労会」を行い、その際、捜索報告をお願いしたい。

上記、家族会の決定事項に対し署名をもって同意いたします。
尚、同意事項に対し一切の異議申し立てをしないことをお約束いたします。
ここに相互確認の為、2部を作成し各々の代表が所持する。

昭和56年10月9日

1. 家族会代表　　住　所
　　氏　名
1. 家族会員　　住　所
　　氏　名
1. 同　上　　住　所
　　氏　名
1. 同　上　　住　所
　　氏　名
1. 同　上　　住　所
　　氏　名
1. 同　上　　住　所
　　氏　名
1. 同　上　　住　所
　　氏　名
1. 同　上　　住　所
　　氏　名

上記、同意書に合意いたします。

日本ヒマラヤ協会　会　長　柴　田　金之助

住　所　東京都新宿区高田馬場3－23－1　淀橋食糧ビル506

除籍まで

ヒマラヤ登山で発生した死亡事故は、遺体のない場合や医師の随行がない場合が比較的多く、そのため、死亡証明書（遺体検案書）が無い事が多い。このため除籍に至るまで時間がかかるケースが必然的に多くなる。これらの手続きについては一般的な例として参考までに第六部資料編に掲げた。

ここでは、今回の死亡について小島隊長が帰国して開かれた報告会の後（10月31日）市町村へ提出する「死亡届」に添付する書類として協会が各ご家族にお渡ししたものを掲げた。

◉市町村への死亡届

1）死亡届の提出先

本籍、現住所のいずれかの市町村（区）

2）死亡届の添付書類

医師の証明書等がないので下記のものを代わりに添付する。

1. 登山隊々長の事故報告書
2. インド州行政官の書類（英文、和文）
3. インド・チベット国境警備隊の捜索隊々長の報告書（英文、和文）
4. 日本ヒマラヤ協会々長の参考文書
5. 遭難を報じた新聞記事

3）遺体の埋葬許可

遺体がありませんので許可は必要ありません。

1. 登山隊々長の事故報告書

（省　略）

2. インド州行政官の書類（英・和）

（次ページ）

3. インド・チベット国境警備隊の捜索隊々長の報告書（英・和）

（次ページ）

4. 遭難を報じた新聞記事

45頁～46頁

5. 日本ヒマラヤ協会々長の参考文書

昭和56年10月31日

市　長　村　長　殿

日本ヒマラヤ協会
会　長　柴　田　金之助

インドヒマラヤ、ナンダ・カート峰における遭難者の生存の可能性について（ご参考）

標題につきまして、今回の遭難者の生存の可能性について、ヒマラヤ登山の専門家の立場から下記のとおり判断しておりますので、ご参考までに添付いたします。

記

1）事故発生日　昭和56年9月27日午後7時から28日午前7時までの間（通常のヒマラヤ登山では携行したトランシーバーにより、定時交信を行うが、これが途絶えたのがこの間である。しかも遭難者は7名で2台を携行しておりこれが同時に沈黙している。）

2）事故現場　標高6,000mの第三キャンプには二度の頂上アタックに備えた食糧（7名×2日分＋予備食）しかないのが通常である。テントは一張と確認されている。

3）捜索の状況　第一回＝9月29日　第二回＝10月1日　第三回＝10月11日～16日

いずれも多量の積雪のため第二キャンプに到達することさえできなかった。

4）事故原因推測　事故日時と思われる9月27～29日にかけて、インド、ネパールを中心とす

るヒマラヤ全域は西方からの大きな低気圧の影響で大量の降雨・雪があり平地では大きな洪水となり、山岳部は大雪となったものと推測され、当時キャンプ1にいた小島隊長の経験も考えあわせると、雪崩による埋没の可能性が強いと考えられる。

5）生存の可能性　以上のように、1・事故原因 2・事故からの経過期間（10月16日で19日間）3・事故現場の情況（食糧、高度、テント）を考えあわせると既に10月16日の時点で生存の可能性はきわめて薄いと判断します。

以　上

洪水で死者1200人 ネパール

【カトマンズ五日＝AFP時事】五日当地に達した情報によると、先月二十九日ネパールの南部および南西部を襲った豪雨による洪水でこれまでに約千二百人が死亡した。とくにブタワル地区では西独とスイスの援助で建設中のティンハウ・ダムが決壊、このため四百人が濁流にのまれたのではないかとみられている。

▲1981年10月6日付朝日新聞（朝刊）

インド洲行政官の書類（英・和）

TO WHOM IT MAY CONCERN

An expedition to the Mount Nandakhat in Garhwal passed through this district and I have been informed through official xx sources that seven members of this expedition are missing. A rescue team of the Indo-Tibetan Border Police went to search for these mountaineers from 11th to 17th October 1981, but with no success. Due to inclement weather the rescue operations have reportedly been withdrawn now.

Almora,
Oct. 22, 1981

(S.K.Das)
District Magistrate,
Almora

（和訳）

カルワールのナンダ・カート登山隊は、このディストリクトエリアを通過しかつ、私は亡くなった7人の登山隊員の報告についてお知らせします。

インド・チベット国境警備隊の捜索隊は、1981年10月11日から17日にかけてこの山に捜索に出かけましたが、成功は得られませんでした。伝えられるところによれば、悪天候のため捜索隊は撤退したとのことです。

1981年10月22日

アルモラ

S. K. DAS
ディストリクト、マジストウレイト
アルモラ

インド・チベット国境警備隊の捜索隊々長の報告書（英・和）

From
Leader (Sub Major B.S Lama)
ITBP Rescue Party

TO WHOM IT MAY CONCERN

On receiving the message about the 7(seven) Japanese climbers who were reported missing at Mt Nandakhat. A team from ITBP consisting of 11 members & which was headed by myself was sent to conduct the rescue operation. The team reached Nandakhat base camp on 11th of October & started the rescue operation. Camp-I was established by the team & the next four days the party tried to establish further camps, but due to bad weather & heavy fresh snow route was not negotiable beyond camp-I. Since rescue party could not operate further rescue operation due to bad weather & the rescue team called off on 17th Oct 81.

(Sub Major B.S. Lama)
Leader Rescue Party

（和訳）

ナンダ・カートで亡くなった7人の日本人クライマーに[illegible]。11日から、私をリーダーとして11人のメンバーが[illegible]ために派遣されました。そのチームは10月11日にナンダ・カートの[illegible]キャンプに到着し、[illegible]。[illegible]10月17日[illegible]しました。

[illegible]

新聞
SHIMBUN
10月4日 日曜日
昭和56年(1981年)
発行所 読売新聞社
東京都千代田区大手町1-7-1
郵便番号100
電話(03)242-1111
郵便振替口座東京4-612
©読売新聞社1981年

気力充実
健康の秋。実り大きく。マルユーは住友で。
あなたの街にくらしの中に 住友銀行

ヒマラヤで7人遭難

荒天で撤退、雪崩？

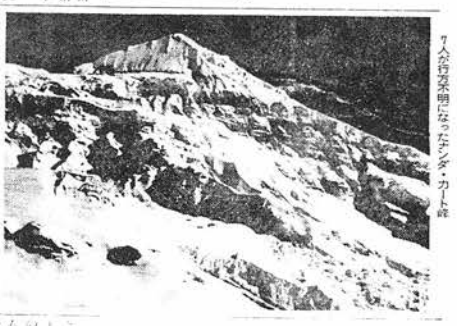
応答なし6日間 隊長が連絡

【ニューデリー三日＝山口（拡）特派員】三日、ニューデリーの日本大使館に入った連絡によると、中国と本ハールの国境に近いインド北部のウッタルプラデシュ州のヒマラヤ山系ナンダ・カート峰（六、六二一㍍）に登山中の日本ヒマラヤ協会ヒマラヤ登山学校パーティー（小島守夫隊長ら隊員八人）のうち、小島隊長を除く七人が、先月二十八日以来、消息を絶った。現地は、豪雪に見舞われていることから、七人は、雪崩にあった可能性が強く、インド当局は、捜索隊を派遣する方針。今年ヒマラヤ周辺では、さる五月に中国・ミニヤ・コンガ峰で北海道山岳連盟の八人が転落死するなど、報告されただけでも日本人登山者による遭難ですでに十件に達し、死者、行方不明者二十六人に上っている。（関連記事22・23面に）

今年既に10件26人 ヒマラヤ周辺

連絡によると、ナンダ・カート付近は、二十七日から激しい雪となり、同日、標高六千㍍の第三キャンプにいた七人のうち、四人が同キャンプを降り始めた。同日午後六時の定期連絡で、第二キャンプに残っていた小島隊長の一人から無線連絡がそれぞれ入った。

[illegible]



7人が行方不明になったナンダ・カート峰

「門戸開放」でふえる事故

[illegible]

（第三種郵便物認可）

気軽さが落とし穴に

——遠征ラッシュ、人間の弱さ忘れないで——

なぜ、こんなに人が山で消えてゆくのだろう。ことになって、海の向こうの山から遭難の報を聞くたびに、重苦しい思いと、怒りがこみあげる。友人や、さほど親しくなくとも顔ぐらい知っている人もいるから、正直、他人事ではないのだ。今回のナンダ・カートの場合、生還の望みは残されているが、その重苦しさに変わりはない。

どんなにすぐれた登山家でも、あっさり雪崩や滑落事故でやられることがある。それをどう説明していいかわからないので、山の仲間たちは、普通「運がなかったな」と考える。水壁での、ザイルでの目に確保が不十分だったり、雪崩「海」テントを張ったりすれば、やられるに決まっている。そうは言ってみても、多分当人だって、わかってても避けられなかったほどに厳しかったんじゃないか、と思いがちだ。

日本ヒマラヤ協会がはじめての遠征を出した一九七一年前後から、日本人の海外登山は急速に活発になっていった。途中の経過を省いて、最近の傾向をうつと、「小人数で、あまり金をかけずに、好きな山登りを」ということになりそうだ。頂上をきわめることを目的としないトレッキングも、気軽にできるようになり、ヒマラヤはこれ近な存在になった。

もっとも、頂上をめざす方は、海外の山である以上、どうしてもしなければならないことがある。登山許可の問題である。いい山、いいルートは、外国隊もおちうから、競争率が激しい。あちこちの山の個別分かの登山許可を、あらかじめ取ってしまおうという手慣れたグループも出てくる。じっくり待っていたのでは、肉体的に時を逃してしまう可能性もあるので、待ってはいられないのだ。そして許可を取った以上は、何としてもその山を「むすぶ」。

同時に、「無酸素」、「単独」、「厳冬期」などという、魅惑的な冒険が、いつの間にかヒマラヤを覚える者の間では一般的になった。「無酸素・単独」の方が他的が上だ、と思われがちだ。

本当は、さまざまな時で楽しんでいいはずの山登りへの価値観が、何となくワンパターンになっているのではないか。人間は、本来そんなに強くないし、持ち味もさまざまなのに、最近の傾向は、あらゆる人が同じ登り方をめざしているように見える。

山登りの良さは「自由」にあるが、といった人がいるが、たとえば「自由」などというものも、あっていいのではないか。そのかわり、国際の自然や人との立ち合いと、ため頂上に立った人と同じような感覚を得られるような、真剣な取り組みさすればいい。現役のバリバリ組にこんなことを言えば、こわれるだろうが、それなら、こんなに人間が山で消えてゆくのは、なぜなのか。肉体的にはちっぽけな弱い存在であるわれわれができることは、山で何を発見して帰って来るか、ということではないだろうか。

（江本嘉伸記者）

"ヒマラヤ登山学校"暗転

まさか…息のむ留守宅

7人不明　寄せ集め、一か月行程

ヒマラヤの厳しさを学ぶはずの「登山学校」が一転して七人もの行方不明者を出してしまった。三日夜、インド・ヒマラヤの六千㍍峰、ナンダ・カートから届いた一報は、ことし海外での日本隊遭難ラッシュでショック続きの日本登山界に、またも大きな衝撃を与えた。この十年、十数隊のパーティーを送り、一人の犠牲者も出さないことを誇っていた日本ヒマラヤ協会。まだ詳細は不明だが、全国各地からの寄せ集め隊、おまけに全行程一か月の登山期間で、本当に無理がなかったと言えるだろうか。それにしても、史上前例のない、ことしの海外での遭難多発。隊員の留守家族は、七人の無事をひたすら祈っている。

一報は、小島（おじま）守夫隊長ら第二次、日本の留守本部にあてた口述テープによって、三日、もたらされた。ベースキャンプを引き揚げた同隊のコックが、このテープを同隊のインドでの移動を手伝ったインドの旅行社に届け、このテープの内容を日本大使館に伝えた。

それによると、九月十二日、日本を出発した八人は、十九日ごろ、ベースキャンプ地点（四千[illegible]）に到着、直ちに登はんを開始。

同じインドのジャオンリ峰で、先月二十三日に遭難した北海道[illegible]隊（三人死亡）の救援に駆けつけた日本人が、たまたま居あわせ[illegible]

当初計画[illegible]第[illegible]キャンプを設け、[illegible]ルートの状況[illegible]。しかし、[illegible]、さらに[illegible]キャンプを設け、二十六日、[illegible]隊長ら[illegible]人が[illegible]キャンプに、[illegible]キャンプに入った。

翌二十七日、第[illegible]キャンプにいったん小島隊長を除く七人が集結したが、この日は天気が大荒れとなり、同夜の交信でも「天気が悪[illegible]」。

[illegible]、「[illegible]」との連絡が[illegible]。この夜、十八日[illegible]、第[illegible]キャンプにいた小島隊長が[illegible]を受けたところ、第三キャンプからはまったく応答がなく、そのまま七人の消息が不明となった。小島隊長はやむなくベースキャンプに下り、インド政府の連絡官に連絡。三十日には、上部に二人のハイ・ポーター（高所荷揚げ要員）が[illegible]したが、しかし、同夜、第[illegible]キャンプにたどり着いてみると、テントは[illegible]につぶされていた。

このため、上部キャンプも、[illegible]な雪崩[illegible]にさらされていた。

[illegible]第一キャンプ[illegible]

[illegible]一の[illegible]。七人[illegible]の捜索を[illegible]。

八人のうち、[illegible]は[illegible]、[illegible]の経験があり、[illegible]、ガネッシュ[illegible]。これまでマナスル[illegible]、ヒマルチュリ[illegible]。だが、他の[illegible]は[illegible]で、ヒマラヤは[illegible]はじめて。

日本ヒマラヤ協会の[illegible]は「第三キャンプ[illegible]、[illegible]の恐れはない、と思っていたが、第一キャンプ[illegible]」

今回の計画は、[illegible]

ヒマラヤで７人行方不明の悲報に、安否を気遣ってかかってくる電話に応対する日本ヒマラヤ協会事務員（３日午後８時）

ベテランぞろいだった

「まさか」と隊員の留守宅や[illegible]家では、行方不明の連絡に一瞬息をのんだ。

宇都宮市[illegible]、[illegible]の小島隊長宅には、山の仲間らから次々と電話がかかり、妻の[illegible]さんがあわただしく応対。「連絡がないので……。隊員の人たちもみな無事だといいのですが」と安否を気遣うばかり。小島さんは宇都[illegible]山岳部の主将をつとめ、[illegible]アンデスやヒマラヤなどに出かけ、今回が[illegible]回目の海外登山。経験と技術をかわれて隊長に選ばれた。

（宇都宮）

[illegible]隊員の[illegible]さん（[illegible]）の[illegible]、[illegible]の[illegible]は「[illegible]」と[illegible]。[illegible]は故郷の[illegible]市にいた高校時代から[illegible]。

[illegible]、安否を[illegible]ら、[illegible]。ベテランぞろいなのに[illegible]とうだけ。

また、[illegible]さん、[illegible]の[illegible]、[illegible]の[illegible]は「[illegible]」。[illegible]ていた[illegible]。[illegible]を助けたと[illegible]いたのに……[illegible]

[illegible]さん[illegible]。で隊を組織しており、[illegible]。[illegible]部[illegible]する[illegible]。同隊では、十年前[illegible]シミール・ヒマラヤ[illegible]隊を送ったのをはじめ、[illegible]毎年のように隊を送[illegible]、これまで[illegible]

750人の会員

日本ヒマラヤ協会[illegible]、昭和四十[illegible]年、ヒマラヤでの[illegible]、[illegible]。[illegible]会員[illegible]七百五十人。[illegible]ようなら、[illegible]めて心配[illegible]としている。

三光白衣

東鳩キャラメルコーン

小島守夫隊長

行方不明の隊員たち（敬称略）

藤倉　和美

鈴木　揚一

阿部　直彦

木田　荘八

関口　正則

寺本　政幸

斎藤　孝雄

この１年で遭難こんなに

1.4　クック山（3,760　ニュージーランド）　[illegible]・中野山岳会の隊員１人が凍死、２人がクレバスに転落死
1.8　（公認入山）エベレスト山ろく（ネパール）　福井県武生市の男性と東京都練馬区の上[illegible]がトレッキング中、高山病死
1.12　エベレスト（8,848　中国・ネパール国境）　日本冬季エベレスト登山隊の隊員１人が転落死
5.10　ミニヤ・コンカ（7,556　中国）　北海道山岳連盟隊の８人が転落死
6.13　ボゴダ山（5,445　中国）　京都山岳会の女性隊員１人がクレバスに転落死
7.4　マッターホルン（4,478　スイス・イタリア国境）　静岡県の会社員が転落死
7.7　カラコルム・ガッシャーブルム[illegible]４峰（7,980　パキスタン）　関西クライマースクラブの３人が雪崩に遭い死亡
7.20　マッキンリー（6,194　アメリカ）[illegible]　関西山岳会の３人が遭難死亡
8.4　ユングフラウ（4,158　スイス）　福岡市の女性２人が滑落死
8.5　モンブラン山系ドリュ北壁（3,754　フランス・イタリア国境）　静岡県の登山者１人が[illegible]で死亡
8.6　グランドジョラス（4,208　フランス）　[illegible]県と大阪府の２人が落石で死亡、２人が重軽傷
8.9　マッターホルン　[illegible]の３人が転落死
8.9　クン峰（7,077　インド）　杉並区勤労者山岳会の女性隊員が高山病で死亡
8.12　コングール峰（7,719　中国）　京都カラコルムクラブの３人が遭難死亡
8.13　ヒマラヤ山系[illegible]ドランドラン氷河（5,200　インド）　[illegible]大生がトレッキング中にクレバスに転落死
8.13　マッキンリー　北海道[illegible]の[illegible]が遭難死亡
8.27　アイガー北壁（3,970　スイス）　[illegible]の男性が転落死
9.23　ヒマラヤ山系ジャオンリ峰（6,632　インド）　北海道[illegible]の[illegible]人が雪崩に遭い３人が遭難死亡
9.25　ヒマラヤ山系[illegible]（6,446　インド）　[illegible]山岳会の３人が[illegible]

会　計　報　告

1）収　入　（18,185,000 円）

1.	HAJ 会員等カンパ収入	3,190,000
2.	保険金収入	6,000,000
3.	捜索隊派遣遺族負担金収入	8,995,000

2）支　出　（20,262,485 円）

1.	事故処理費	4,886,191
2.	捜索費	15,376,294

3）差　引　（△ 2,077,485 ）

※　差額は一般会計から補充した。

※　遺族ベースキャンプ訪問（1982 年のみ）に派遣する随行員費、一周忌等費用、借入金返済等今後発生する費用はHAJ 会計で処理する。

（支出の内訳）

1. 事故処理費

1.	説明会	821,850
2.	現地渉外費	1,631,290
3.	通信費	730,795
4.	人件費	389,630
5.	葬儀費	761,710
6.	写真費	119,668
7.	借入金金利	185,000
8.	事務費	73,998
9.	雑費	172,250

2. 捜索費

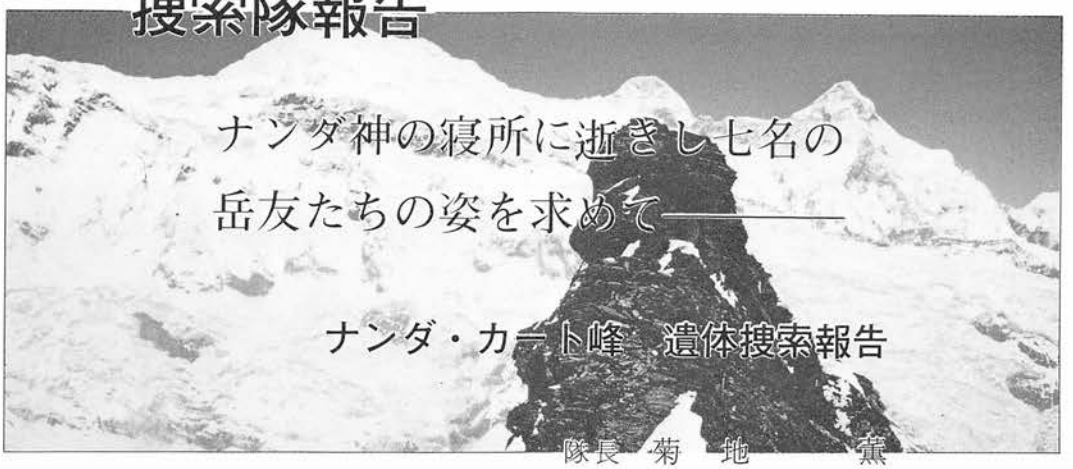
1.	渡航費	2,059,200
2.	装備費	2,202,048
3.	食糧費	534,846
4.	輸送費	1,322,490
5.	こん包費	165,000
6.	記録費	2,111,943
7.	滞在費	355,800
8.	通信費	109,660
9.	保険料	345,070
10.	渉外費	521,680
11.	医療費	300,000
12.	事務費	280,007
13.	現地アレンジ	5,068,550

第 Ⅳ 部

捜索と事故分析

捜索隊報告 …… 菊地　薫 51
捜索隊構成 …… 60
上部捜索活動報告 …… 尾形　好雄 61
捜索隊行動概要 …… 尾形　好雄 65
事故原因の推定と分析 …… 尾形　好雄 68
ヒマラヤ登山遭難と
　捜索隊派遣を考える …… 山森　欣一 88
ナンダ・カートで何が起きた …… 読売新聞記事 89

捜索隊報告



ナンダ神の寝所に逝きし七名の岳友たちの姿を求めて――――

ナンダ・カート峰　遺体捜索報告

隊長　菊　地　　薫

七羽の白い鳥が紺碧の空に羽ばたいている。
虚空の彼方へ飛翔するかの如く、大きく、ゆっくりと、孤を描きながら舞っている。
ここはヒマラヤの只中、ナンダの女神の山、ナンダ・カートの第三キャンプ地点、6,000 mをも越える高み。
此所に倒れ果てし7名の岳友たちの亡骸を求めてこの地にたどり着いた今、　彼らの魂は天空の彼方へ昇天してゆくのか。
遠く日本から訪ね来たりし友の姿を迎えて彼らは鳥になったのだ。
彼らの魂を乗せて舞い上がる七羽の鳥たちよ願わくばその御霊の安らかならんことを。
そしてナンダの神の御加護が永遠たらんことを。

はじめに

ガルワール地方の冬の訪れは早い。11月は冬を告げる季節。冬期エベレスト西稜登山と言うヒマラヤ登山界の大きな課題を中止して取り組んだナンダ・カート峰捜索隊ではあったが、思いもかけぬ早い冬の到来で、遺体の捜索発見、遺品の回収の目的はことごとく果せずに終ってしまった。

それも冬のヒマラヤで最も懸念されているジェット気流による強風のためではなく、二度にわたる大量の降雪による結果としてであった。

このヒマラヤ登山史上初めての試みである本格的捜索隊の派遣、それも冬期のヒマラヤへという冒険的企ては、全くふがいない結果に終り、御遺族の方々の思いや協会の会員諸氏の期待に応えることができず、我々捜索隊員の心情は申し訳なさで揺れ動いている。この事については平身低頭をくりかえすより術がないと思っている。

しかし、今回の捜索が終った今、隊員たちに共通の親しい友人を含めて7名という多くの岳友を失ってしまったという言い難い喪失感と、捜索そのものが所期の目的を達成せずに終ったという、敗北感と挫折感、これらの自らに対する憤りに入り混って他の感情がある。それは不遜にもある種の満足感にも似たそれである。彼ら7名が残した道標べの赤旗数本、それに残置されたフィックスザイル、そしてナンダ・カートの石以外は何も持ち帰れはしなかったけれど、隊員全員一丸となって事にあたり、限界ぎりぎりのところまで全力を出し切ったという思いが隊員たちの胸の中にしみ渡っているのも確かである。そして、この奇妙な自慰にも似た我々の思いを、彼らはきっとわかっ

てくれるだろうと信じてもいるのである。

こうした様々な思いを隊員たちの胸に残して今回のナンダ・カート捜索隊は終ったが、ここで簡単にその概略に触れておくことにしたい。

捜索隊出発まで

10月3日、デリーにあるトレッキング・エージェント、シカール社のクマール氏よりの国際電話でこの悪夢は始まった。「HAJ隊ナンダ・カート峰で7名遭難！」、この報を受けただちに事故対策本部を設置し、御家族の方々にも上京していただき、連日正確な情報の収集と善後策の検討をくりかえす。この間、第一次現地対策員として伊東会員、第二次には稲田専務理事が現地に飛び、そして第三次として八木原会員がと連続して現地入りし速やかな事故対策と情報の入手にあたった。それにもかかわらず毎日朝夕の二回現地より入って来る電話による知らせは悲観的なものばかり、遂に10月9日には、生存の知らせが届かぬまま、全員絶望の決断をせざるを得なかった。むろん、現地入りした3名は、ヘリコプターによる空からの救助活動とI.T.B.P.隊（インド・チベット国境警備隊）へ強力に出動の要請をくりかえし、地上からの強力な救助隊派遣にまでこぎつけた。しかし空からの二度にわたる飛行、そして地上からのI.T.B.P.隊による活動にもかかわらず、とうとう待ち望んだ吉報は来なかったのである。

この現地での救助活動と並行して、日本で起こすべき行動についても、種々検討された。そしてもし、万が一生存の見込みなしと断定されたならすぐそれに対処すべく、具体的には、遺体捜索隊派遣についても、つっ込んだ話し合いが幾度か、くり返され、御遺族の方々の間で意見がまとめ上げられ、正式な派遣要請を全御遺族一致で作成していただき、それを受けて早速捜索隊作りに入った。この決定がなされたのは先発隊出発12日前のことであり、全く殺人的スケジュールになったが、検討会でも幾度か話されたように、今冬に予定していたエベレスト登山を中止して、その人員、装備、食料など全てをつぎ込むことによって、何とか対処できた。とは言え、ネパールに予定していた登山を急拠インドへ振り向けた訳であるから、別送品の発送からはじまり、メンバーの決定、インドの登山ビザの取得に至るまでその困難さは時間との闘いであり、特にビザは先発隊出発の3時間前にかろうじて下りるというきわどいものであった。

重なる疲労から先発出発を目前に倒れかけた菊地をささえて、そんな中で、尾形の活躍は目を見はるものがあった。

ともあれ、捜索隊が短時日の間にまとめられ、予定通り出発にこぎつけられたのは、御遺族からの切なる要請と、エベレストを中止しても何とか彼らの変りし姿を捜し出したいと願う隊員たちの熱い思い、そして、HAJの永年積み重ねられた豊富な経験と洗練された知識があったからに他ならない。

最終的には捜索隊参加のメンバーは、現地ニューデリーから友情参加の支援隊員3名を含めて14名の多きにのぼった。

ピンダリの川をたどって

10月25日夜遅く、尾形以下6名の本隊は、全ての日本での準備を終えて予定通りニューデリー空港へ着いた。出迎えたのは第三次の対策員として現地に残っていた八木原と、この日夕方カトマンズよりデリー入りした先発隊の菊地、鈴木、それにネパールの秋の登山を終えてカトマンズで先発隊と合流し、登山装備を共に搬出して来た山田の4名、それともう1人、今夏ブリグパントというガルワールの山に登山しそのままデリーに残留している絹川、彼は3名の現地援助隊員の1人である。

この他にドクターの参加が間に合わなかった我が隊のために、やはりブリグパント隊の2名の看護婦さんがやはり援助隊員として参加してくれたし、更に、これは後の話になるが、我々のベースキャンプ入り後、今回の捜索隊参加の要請は見合せていた春のカンチェンジュンガの仲間、若尾、片岡の2名が、秋のネパール登山の疲れもいえぬ身で、自らの意志で登山終了後すぐにカトマンズから駆けつけてくれたものである。

これが今回の捜索隊の全陣容である。

さて、26日、27日の両日を通常の登山隊がす

ると同じ様にあわただしい準備活動にあて、26日には無事隊荷の通関にも成功、27日は折悪しくインド最大の祭日の1つ、デワリと重なってしまったが、現地購入品の買付、デポ装備のチェックなどを終え、翌28日は予定通り貸切ったバスで、投宿していたインペリアルホテルを後にすることができた。

この日はデリー出発が、午後になってしまったこともあり、夜遅くサブヒマラヤの山並みが続くふもと、インド平原の端にある田舎町、ハルドワニへ着き、そこで泊まることになった。

蚊に悩まされた一夜も明け、10月29日は一日中バスに揺られての旅である。サブヒマラヤにつけられた道が延々と果てしなく続いている。これがインドヒマラヤ、ナンダ・カートへ続く道程なのだ。松の木陰に遠くヒヤラヤが見え隠れする。

あれはきっとナンダ・デヴィ山塊だ。目ざすナンダ・カートはどの辺りだろうか。

途中、アルモラでこの地区の行政長官と警察署長に会い、速やかな連絡網の設置に関する便宜の供与を依頼する。双方共、心よく引受けてくれた。ナンダ・カートの事故に関しては良く理解しており、協力を惜しまないという。異国の辺境にあって、地元役人の協力は心強い限りだ。ありがたい。

一日中、走りづめに走ったバスは夜10時過ぎ、カプコットの奥2km程の所にあるバラリ・バザールという小さな町へ着いた。ここがピンダリの谷へのキャラバンの出発点となる所だ。今日は彼ら7名も投宿したここの小さなロッジ泊りとなる。

インド入りしてからは連日快晴が続いており、秋のヒマラヤの気候そのもののようだ。明るく29日も真赤な朝焼けのうちに迎え、バザールから見えるナンダ・コットの鋭峰が美しい。

キャラバンの初日はのんびりとした出発になった。ポニーとポーターで計100個近い荷がさばかれる。隊員たちが荷物の出発を確認後、バラリを後にしたのはすでに昼をまわってからであった。

道は河沿いの車道工事中の広く平坦なものが続いており、3時間程歩いてから一登りすると山の斜面の中腹にある小さな村ロハルケットに着く。ここのツーリスト・ロッジでキャンプ第一夜を迎えた。

次の日はダクリの峠越え（2,940 m）がある。ロハルケットより上は村がなくカルカ（放牧小屋）が点在するばかりの山道となるが、ネパールとは違い道はすこぶる良い。ダクリの峠からは目指すナンダ・カートもその頂稜部分を見せていた。隊員たちは初めて望見するナンダ・カートにそれぞれの思いを胸に峠を越えて行った。一下りした森林の中にひっそりと建っている瀟洒（しょうしゃ）な山小屋がこの日の泊り場となった。

キャラバン3日目、いよいよピンダリ川に沿った道をたどる。ダクリのロッジから山腹を巻き気味に下りながら最奥の人里、カティ村を経て道はジャングル地帯へと進んでゆく。カティの人は言う。ピンダリ川の奥地にはナンダ・デヴィ（女神）が住んでいると。ナンダ・カートとはナンダの神の寝所だとも言っている。我々は今、その聖なる地へと踏み入ろうとしている。倒れし友の姿を求めて。

左岸の森林帯の中を歩きやすい道は続き、猿の大群に驚されながらも、キャラバンは順調に進み途中、二度川を渡ってドワリの小屋に落ちついた。

明けて11月2日。ドワリから尚もピンダリ川をつめて、プルキア、マルトリと過ぎる。午後になり天候は下り坂、小雪もチラつき始めるが、ナンダ・カートの方は上部ガスの中に第二キャンプへの道をうっすらと見せていた。

この日、我々は予定より一日早く、小島隊のベース・キャンプの下方10分程の所にベース・キャンプを設置することができた。高度3,700 m。ピンダリ川右岸最奥のカルカのあるその名もピンダリ・オティアルという場所である。夕方には小雨に変り、深く切れ込んだピンダリの谷の奥地、岩壁部の下に設けられた我々のB.C.（ベース・キャンプ）は初日から灰色に沈んでいった。

第二キャンプまでの道のり

翌日は大雪となった。アラビア海に発生したサイクロン（インド版台風）の影響とかで午前中は何とか持った空も午後になり、湿雪が間断なく降り続き、全く雪のなかったB.C地も、またたく間に真白になってゆく。初めから厳しい冬の洗礼を受けることになったが、これはもとより覚悟の上、

我々は冬のヒマラヤへ来ているのだからどんな困難もいとうことはすまい。しかし無用の危険は断じて避けねばならぬ。この後も捜索終了まで絶えずトランシーバー交信を通して交されたことに、「安全第一！」という言葉があったが、この夜の降雪には事実恐怖が伴ったことだった。

というのは、B.C.入りした直後からの降雪だったこと、そして突然の多量降雪にピンダリ谷のそこ、ここでドーン、ドーンという雪崩の音。昨日のB.C.入りの時は後方に展開する岩壁の上方がガスに煙っておりよく確認できなかったことがこれに輪をかけた一因であった。

実際には、これは全くの杞憂であり、我々のB.C.地は完全な安全地帯であったのだが……。

さて、翌11月4日には、ささやかに彼ら7名の慰霊を我々の捜索活動の安全を祈願し、いよいよ登攀活動に入った。

しかし2日間降り積った雪のため、きついラッセルを強いられ、その上草付の斜面とルンゼのトラバースが多いため雪崩の危険も伴い、ルートは思うにまかせない。

小島隊とは全く別のルート、ピンダリ氷河のアイス・フォールを越えて第一キャンプ（C1）まで到達するルートを偵察してみたが、アイス・フォールの状態が悪く、ルートとしては芳しくない。

結局、上部氷河函養台地の稜（雪稜と呼んだ）に登り着くのに、藤倉ルートとは別のルートを作ることになった。危険と思われる個所には固定ロープが張られ、C1への道はどうにか確保された。

我々のC1は、小島隊のそれよりずっと下方、雪崩から完全に安全だと思われる我々が「象の頭」と呼んだ稜線上に設置された。高度4,500m。B.Cからここまではトラバースが多く距離があること、その上、登り下りが多くこれ以上先にC1を延ばすのは得策ではないこと等の要因があったが、何よりも重視されたのは当然のことながら、キャンプ地の安全性であった。

こうして難渋したC1までの道程も開かれ、9日には3パーティのうちの2隊、尾形隊と山田隊がC1入りするまでに至った。

またこの間6日には、頼もしい援軍が2人ネパールから到着した。秋期登山を大成功の内におさめた片岡、それに若尾が、登山が終るや否やとるものもとり敢えず、おっとり刀で駆け着けて来たのである。ありがたい。これで隊は強化され、思い通りの陣容になった。

C1に入った6名は次の日から今回の捜索活動の足がかりになる第二キャンプ（C2）に向けてルート工作を開始。上部にはインド・ナイニタール隊が「ロック・バリヤー」と呼んだ岩の大障壁がある。それを乗り越すことが、ナンダ・カートの頂きへ続く大雪原への道なのだ。藤倉たちもきっとこの岩壁帯を越えて行ったに違いない。

中央やや右寄りに真っすぐに上に向って延びる一条のクーロワール、あれこそがルートだろう。しかし、あそこまでどのルートを取るべきか？対岸から連日ルートを指示する隊と交信で種々検討の末、クーロワール取付までは藤倉ルートを取らず、若干困難度は増すが、安全性が高く、かつ短かい懸垂氷河直上ルートを採用することに決定する。

相変らず深い雪に悩まされながらも工作隊の活躍でルートは延び2日目の午前中には問題のクーロワール入口に達していた。案の定藤倉隊もこのクーロワールにルートを採っている。'72年インド隊もそうであったが、我々は我々の仲間に敬意を表し「藤倉のクーロワール」と呼ぶことにした。

彼らが張ったであろうポリプロピレン製の固定ロープも今は深く雪中に没している。それを所々堀り起したり、新たに設置したりしてどうにかこの日午後遅く、クーロワールを抜け切り風雪の稜線に飛び出した。ここからキャンプ2予定地まではほんの一投足、天候は悪化の気ざしだが、5,400mのこの地点まで難関部を僅か2日間で突破したこと、捜索の前進基地となるC2を明日には建設できるだろうことで、隊員たちの士気は高い。

「明日はC2入り。あさってからは本格的捜索活動開始！」

この日の夕方の定時交信では、いつも通りの明るい会話に終始し、各隊員の胸中は今後展開されるであろう捜索活動のことで埋まっており、次の日から続く魔の荒天など予想だにできないことだった。

二度目の降雪については、後述するとして、思いもかけぬB.C.入り直後の降雪に見舞われながらもどうにか予定のペースでC１、そしてC２付近までルートが延びたのはひとえに隊員たちの意志力、体力の強靱さによるものである事に触れておかねばなるまい。冬のエベレストの予定メンバーが大半を占めていたこと、今春と今秋でのネパール登山を経験した隊員が多数いたこと、それに加えて何より仲間たちの捜索を何とかやり抜きたいという迫力。これらが相乗して全く高所順応への不安を抱かせることなく、体調は万全、深雪をはね返すルート工作を見せてくれた。

これは重なる疲労をものともせず捜索活動の終了まで続いたのである。全く頼もしい我が仲間達。

冬の嵐をついてC・３地点へ

冬の到来を告げるその日の降雪は突然に始まった。11月12日、早朝５時ごろより降り出した雪は終日止むことを知らず、C１に居た９名は全員停滞せざるを得なくなった。B.Cも同様に天気待ち。各キャンプ共、テントの除雪に忙しい。

不運は続く。明くる13日も鉛色の空にあけチリチリと降雪は続く。キャンプ１よりの移動は雪崩の危険を避けるため、今日も見あわせもう一日天候待ちを決定。しかしこのまま降雪が続くとC１までのルートさえも維持が危くなってくる。B.C.からはルート確保のためC１へ向けて出発するが、これも途中で引返さざるを得なかった。

この雪は幸い次の日には止み、行動をすることが可能となったが、思い返すにこの日降った雪のため、それまでは何ヶ所かで見受けられた藤倉たちのルート標識も全て埋めつくされ、その後の捜索活動が困難を極める結果となったことを思うと、返す返すも無念で仕方がない。

ナンダの女神は我々に微笑みかけることを忘れてしまったのか？

14日、昨日までとはうって変って快晴にあけた中を隊員たちはC２へ向けて移動して行く。幾度か新雪表層雪崩に襲われながらも無事「藤倉のクーロワール」を抜けて5,400ｍ地点に冬期エベレストで使用されるはずだった新調の特殊ミード型テントが１張設置され捜索隊第二キャンプとした。今日はラッセルがきびしく山田隊のみC２にステイするに留まったが明日には尾形隊もC２入りしもう１張のテントが増えて強化されることになる。

そしていよいよ本格的捜索活動の開始だ。しかしこのC２付近にあったと思われる藤倉C２が全く見当らない。２度にわたる降雪のため雪の中に沈んでいるのだろうか。

ともかく我々は今、やっとC２地点までたどり着いた。これからは彼らが眠るであろうC３地点付近を重点的に捜索の始まりである。

15日には早くも山田隊がC３地点と思しき場所に登り着いた。彼らがいるとしたらきっとこのあたりに違いない。縦横に入り組んだクレバスをぬって上部懸垂氷河をまわり込み、雪の斜面の屈曲部から左に折りかえした所に展開するナンダ・カート主峰下の雪面の直下にある大雪原である。そこにはおそらく９月末の大降雪の折の名残りだろうか、大きなデブリが散見される。

彼らはきっとこの下のどこかに眠っている。事故現場と思われる地点に立ち、いやが上にも隊員たちの気ははやる。それにしても何んと広大な雪原だろう。常識的に考えればキャンプ・サイトとしてはごく一般的な安定した所だ。それでも雪崩の爪跡が見られるとは、やはりヒマラヤの遠大さは計り知れない。

この日から３日間は上部C３付近の捜索に重点がおかれてゾンディーレンがくりかえされた。我々の捜索の手段と方法はこうである。

まず主たる装備である長さが2.5ｍ、太さ10mmの鉄の棒、通称ゾンデ棒と呼ばれるもの、それと雪用スコップ、最後に雪崩レポートの権威である出海栄三氏より御教示いただいたピラミッド・パワー応用による金属探知機、これはごく簡単な細い鉄のバーを曲げただけのものだが、電池式探知機よりも信頼性があることは言われており、特に機械による探知は今回の捜索に参加した館野の言でも明らかな様にほとんどその効力が期待できないということで持参しなかった。彼は今年、10ヶ月の長きにわたって谷川岳に散った仲間の捜索を続けていた経験を持っていたのである。

さて山田隊がC３地点付近に到達した時も、きっと何らかの痕跡が見受けられるに違いないとい

う我々の予想に反してそこは一面の雪野原と化していた。かろうじて見つかったのは、道すがら細いクレバスに張られた一本の固定ロープのみであった。この日からゾンデ棒を振っては、進む単純だが辛く苦しい作業が始った。きっとこの近くのどこかに居る。切なる願いと共にゾンデ棒を50*cm*間隔につき刺しては進み、かすかな反応でも両の手に感ずればスコップで堀り下げるという気の遠くなるような作業のくり返しである。

翌16日からは尾形隊も加わり、必死の捜索は続く。何とかこのC3地点で彼らの姿、そしてテントを発見したい。

C3捜索隊は、我々のC2より捜索地点まで、ほとんど2時間足らずという驚異的なスピードで到達し必死でゾンデ棒を振っている。6,000mの高所でのそれは、常人の想像を絶する労働に違いない。

「我々の上空を今、七羽の小さな白い鳥がゆっくりと舞っています。彼らの魂でしょうか？　藤倉C3はきっとこの近くにあると思います」

七羽の白い鳥に導びかれてその地点を捜索する6名の手に今日もテントを見い出すことはできなかった。

一方、C1の佐久間隊も手をこまねいていたわけではない。C2の6名の食料補給と共にC2付近で天幕発見の捜索を開始する。苦しい荷上の後にゾンデ棒を持つ作業をしている佐久間より、テントらしいものにあたった、との交信があり一瞬喜んだがこれもぬか喜びに終った。

C2、C3付近共旧雪層（昨年までに降ったと思われる雪の層）まで2m以上の深さであり、そこまで至るのに、9月末、11月初めの我々のB.C.入りの時、そして先日と三層程になっていて、それぞれの層が氷化して少し固くなっており、それをつき抜ける時にゾンデ棒が反応するのである。

遂に三日間に及ぶ第一期の上部捜索活動で、我々は何も発見できずに終った。その結果、反省点として、

1. もしかすると9月末の降雪の層というのはもっと下で、ゾンデ棒が届いていないのではないか？
2. 藤倉C3付近と思われる地点が、あまりにも広大な雪原と化しており、捜索ポイントを絞りにくく、はたして「ここだ」と言い切るのに、若干疑問がある。

この2点が上げられ、種々検討の後、より容易に発見できると思われるC2を先に捜索し、その埋没状況を見てから改めてC3を捜し出そうというように戦術が変更された。

こうして活動は第二期のC2発見という目的での捜索に入ることになる。

C2にもう1人でも多く上げたいと言う考えから19日には佐久間、佐藤の両名がC2に入り、上部の滞在者は8名と更に強化された。

旧C2（藤倉隊C2）も色々な情報を総合して見ると、ほぼ我々の近くに位置していたものと考えられる。更に藤倉が交信で残した言葉。

「C2はクレバスの下にあるので、雪崩からは安全です」

ということを手がかりにC2の捜索は始った。C2付近はクレバスが幾重かに錯綜してはいるものの高度とキャンプ・サイト適地から、きっと発見できるはずだ。そうしたらその状況を見てC3も、という我々の予想とは裏腹にこのC2捜索も難行を極めた。C1からの2人も荷上傍々参加して隊員全員10名での必死の捜索にもかかわらず、雪の下に必ず沈んでいるはずのダンロップテントはようとしてその姿を表さない。

三日間の予定ではじめたこの第二期捜索も結局空振りに終ってしまう。隊員たちのオーバー・ミトンはボロボロに破れ、それぞれの顔に疲労の色が隠せない。それでも泣き言ひとつ言わず必死でゾンディーレンを続ける隊員たちの姿に、いかに我が仲間たちとは言え感動の涙する思いであった。

幸いなことに、あれ以来好天が続いている。もっとも恐れている冬の万物を吹き飛ばしてしまう悪魔の様なジェット・ストリームの吹き出しも未だ始まらず、天候による支障はない。高所に位置しているため雪が固まらず、ゾンディーレンするのに深いラッセルを強いられるが、それは隊員のがんばりでなんとかはねのけられることだ。

この3日間のC2捜索活動で、我々のC2付近の雪面という雪面には、隊員たちのゾンディーレ

ンの足跡が付き、あたかも種蒔きを終えた畠地のように見え、それは見事な程美しいものであった。

最後の捜索活動

そうしたある日の夜の定時交信、C2から容易ならざる事態が伝えられて来た。重なる疲労感と焦躁感はジッとのみ込んで、つとめて冷静に、かつ明るく交信をかわすのが常であったが、これは驚きであった。頼みの燃料EPIガスが不足を来たしているという。しまった！　寒さのことをすっかり忘れていた。辛い労働に耐えて活動する隊員たちにせめて食べ物だけはと、どんどん食べる事を指示し、暖を取らせて来たが、ガスの消費量がこれ程早く進んでいるとは。

考えれば無理もないことだ。連日－25℃をゆうに越す冬のヒマラヤのキャンプのことだ。水を作るにしてもただ事ではない。朝早くから夜遅くまでコンロの世話にならざるを得ないのだから。

日本でも多目に計算して持参したにもかかわらず、すでに前にもガスボンベの消費が早いとの報告があり、上部では極力節約している様子だし、C1ではデリー出発間際購入したインド製石油コンロにきり変えて事にあたっている。

いずれにせよギリギリ節約したとしても、当初予定の11月末日までの捜索活動は縮少せざるを得ない事態に直面したことになる。加えて5,400mのC2に上って以来一週間が経っている。いかな屈強の連中たちとは言え、疲れが蓄積しているのは否めない。ここは慎重の上にも慎重にやらなければなるまい。

11月21日夜、第二期の捜索も実りないまま、焦りと苛立ちをおしつつんで次の事項が決められた。

1. 第三期を最後の捜索としC3、C2の各地点を隅なく探ぐる。その期間は11月25日までとする。

2. ガスボンベの不足は3台の石油コンロで代替し、2台をC2に配置する。これに伴い23日の夜からはC2滞在者を4名にしぼる。

この決断により、佐藤、新郷の両名は泣く泣くB.C.へ降りざるを得なかったが、これまでの活躍を考えれば許されることなのに、「残念です。」という言葉を残して彼らは一足先にB.C.へと降りて行った。

C1のテントも石油コンロ1台という決して安易ではない状況になったが、これは一時間朝早く起きれば対処できることだ。要は残された限られた時間内に何とか遺品、遺体の発見に努めることである。

いくつかの問題点が整理され、最終スケジュールが決められてゆく。

一つはC2からC3へ向う途中のクレバスに張ってあったフィックスロープの状況を詳しく調べてみること。これにより新たな事実が判明するかも知れない。

それともう一つ。「藤倉のクーロワール」の取付に張ってあったダブルのフィックスロープの解明。この部分は多量の雪と間断ないチリ雪崩により完全に埋められており、通常ダブルで張る所は余程の悪場に限られるため、万に一つ、ここまで下降しに来て下降用に張ったものかも知れないという一縷の望みが残っていたのである。

このクーロワール取付のザイルは菊地隊により堀起されたが、やはり登攀時のそれであり、それも完璧なまでにしっかりと工作固定してあり、ロープ固定技術の手本を示しているようでもあり、藤倉の性格を知る我々にとっては、少しく感じるものがあった。

一方C3下部のクレバスのフィックスは山田隊が回収したが、やはり固定アンカーは2m程下に埋っており、一方は完全にちぎれて切れていた。ブロックに崩壊によるものだと推定される。これを堀り進んでゆく時に彼らは一本の赤旗を発見した。口惜しいことに雪面下ほんの15cm下から見つかったのである。もし二度の降雪がなかったら、あるいは後のそれがなかったら、きっともっと容易に捜索は進んでいたに違いない。それを思うと今だに悔しい思いがする。

第一期の反省点から、もしかして我々が考えているよりもっと下に彼らがC3を作ったことも想定し、インド隊が張ったと思しき付近も徹底的に捜索したが遂に何も出ては来なかった。

またこの間、ルートを変えたことと、C2、C3は必ず発見できるという考えから通ることのなかった藤倉C1地点を捜してみる必要性を感じ2

日間の捜索で、２m程の雪の下から雪崩ですっかりボロボロになった１張のテントを堀り出すことができたが、他に手がかりになるようなものはやはり何も発見できなかった。

23日からはＣ2に残った尾形リーダー以下４名とＣ1の４名による最後の捜索が続く。24日は再びＣ２付近のこれはと思う所を片っ端から深さ２mの溝を堀って進む。想像を越える作業に彼らの腕はとうに上がらなくなっているはずだ。

とうとう捜索最終日が来た。最後にＣ３地点をもう一度やりたいという尾形隊の４名はＣ２を早く出てＣ３地点へ向ってゆく。Ｃ１の４名はＣ２付近の堀り起しにあたる。

小さなゴミの一片らでもいい。彼らの匂いのするものなら何でもいい。何か見つかってくれ。

最後の望みも空しく時は過ぎてゆく。この日は午後になって今度の登山中一番の風雪となった。彼ら７名の友を帰すまいとする叫びであったのだろうか。逆巻く吹雪の咆哮の中に、断腸の思いで徒労に終った捜索活動に終止符を打つ隊員たちの胸の内は複雑に揺れていた。

無念さ、苛立ち、敗北感、虚無感、挫折感、喪失感、終了感、そうした様々な迫り来る感慨を胸に彼らのためにしてやれることと言えば、塔婆の代りの七本の竹を雪にさし、心ずくしの供物を供し写真を埋めること位であった。

やっとの思いで香をたき手を合わせ、立去りがたい思いを振り切って帰路に着く隊員たちのゴーグルが曇っていたのは、ひとりブリザードのためばかりではなかった。

捜索を終えて

きっと彼らの倒れし姿に相いまみえることができると信じて出かけていったピンダリ氷河の奥地ではあったが、遂に彼らのテント、遺品は発見することなく終ってしまった。

捜索最終日と決めた11月25日、ナンダ・カートの山は荒れに荒れた。激しく頬を打つ吹雪の中で隊員たちはそれぞれの感慨に浸りながら最後のゾンディーレンを終えた。

ピンダリ河の奥地にはナンダ・デヴィの女神が住むという。そしてナンダ　カートはナンダの女神の寝所となる所だとカティの村人は説いてくれた。

彼らは今、神々の寝所で永遠の深い深い眠りについている。この聖なる地で永眠した彼らは故国、日本に戻ることを望まなかったのだろうか？

11月28日、B.C.を離れる日、我々は精一杯の力でジャンピングをふるい「レリーフ」を刻んだ。その大岩の前での慰霊祭で最后の別れを告げた。

「雪山に消えたあいつ」の歌声が静かにピンダリの谷に響いていたのが印象的であった。

「ピンダリ川の奥地におわすナンダの女神よ、願わくば我らが願い聞き届けたまえ。

神々の寝所に召されし７名の岳友達、藤倉、阿部、斎藤、寺本、本田、埜口、鈴木の御霊の永遠に安らかならんことを。

そして我が岳友たち、我々が君達の辿りしルート、倒れし雪原を求めてこの地を訪れてより１ヶ月。

遂に君たちの変りし姿に相まみゆることはできなかったけれど、この上は限りない冥福を祈ろうではないか、いつしかきっと再びこの地を訪れることを約しながら……」（慰霊祭での献言より）

我々捜索隊がベースキャンプに残し得たのは次のレリーフの碑文だけである。

『In the memory of Seven brave Japanese Who sleeping somewhere near "Khat" of Godess Nanda.

神々の寝所に召されし７名の日本人勇者
此所に眠る　　1981.9.28
H.G.E. '81

K. FUJIKURA	S. HONDA
N. ABE	M. NOGUCHI
T. SAITO	Y. SUZUKI
M. TERAMOTO	

』

▼藤倉隊が当初ルートに予定した
アイスフォール帯

捜索隊構成

隊 長 菊地　薫（35）1946. 5生
宮城県登米郡
1974 ラムジュン・ヒマール(6,983m)登頂
1980 カンチェンジュンガ偵察副隊長
1981 カンチェンジュンガ(8,598m)副隊長
1981 冬期エベレスト西稜予定

副隊長 尾形　好雄（33）1948. 7生
東京都中野区
1974 ツクチェ・ピーク(6,920m)隊長
1978 ヒマルチュリ（7893m）隊長
1980 ケダルナート（6,940m）隊長
1981 ヤルン・カン(8,518m?)縦走隊長
1981 冬期エベレスト西稜予定

隊 員 山田　昇（31）1950. 2生
群馬県沼田市
1975 ラトック山群一周
1978 ダウラギリI(8,167m)登頂
1980 カンチェンジュンガ偵察隊
1980 ケダルナート(6,940m)副隊長
1981 カンチェンジュンガ(8,598m)登頂
1981 ランタン・リ(7,239m)初登頂
1981 冬期エベレスト西稜予定

隊 員 若尾　巻広（32）1949. 7生
長野県伊那郡
1979 マッキンレー(6,194m)登頂
1980 カンチェンジュンガ偵察隊
1981 ヤルン・カン(8,250mまで)
1981 ランタン・リ(7,239m)初登頂
1981 冬期エベレスト西稜予定

隊 員 佐久間　隆（31）1950. 8生
神奈川県大和市
1976 ハンチントン
1981 ヤルン・カン(8,000mまで)
1981 冬期エベレスト西稜予定

隊 員 新郷　信廣（38）1943. 3生
佐賀県佐賀市
1978 マッキンレー(6,194m)登頂
1980 ケダルナート・ドーム(6,831m)登頂
1981 冬期エベレスト西稜予定

隊 員 舘野　秀夫（32）1949. 2生
栃木県宇都宮市
1975 リンパール(6,992m)登頂

隊 員 宮崎　久夫（32）1949. 10生
東京都江東区
1974 ツクチエ・ピーク(6,920m)登頂
1978 ヒマルチュリ(7,893m)登頂

隊 員 鈴木　茂（26）1955. 1生
宮城県桃生郡
1978 ダウラギリI(8,167m)登頂
1981 カンチェンジュンガ(8,598m)登頂
1981 冬期エベレスト西稜予定

隊 員 佐藤　誠（27）1954. 6生
東京都中野区

隊 員 片岡　邦夫（27）1954. 4生
高知県高岡郡
1975 マッキンレー（6,194m）
1979 ルプガルサール(7,200m)登頂
1979 ディオチバ(6,001m)登頂
1979 チュルーW（6,630m）登頂
1980 カンチェンジュンガ偵察
1981 カンチェンジュンガ(8,598m)登頂
1981 ドルジェ・ラクパ(6,989m)隊長初登頂
1981 冬期エベレスト西稜予定

現 地 綿川　忠直（21）1960. 9生
サポート 北海道旭川市
1981 ブリクパント(6,777m)

現 地 村上　豊子(25)1956. 3生 看護婦
サポート 北海道旭川市
1980 ケダルナート・ドーム(6,831m)登頂
1981 ブリクパント(6,777m)

現 地 物井　洋子(25)1956. 1生 看護婦
サポート 北海道旭川市
1981 ブリクパント(6,777m)

捜索隊日誌から

上部捜索活動報告

尾　形　好　雄

11月15日　天候～快晴

いよいよ今日からC・2上部の捜索活動を開始する。

山田パーティは今朝7時30分にC·2を出発して藤倉隊C・3とおぼしき所（高度5,900mの地点）迄上がるも何も彼らの遺留品を見つけることは出来なかった。

途中、クレバス内にフィックス（固定）ロープを見つけたと云うので彼らのルートを辿っていることに間違いはないものと思われる。

取り敢えず明日もう一度、今日の山田隊の最高到達点迄上ってみて自分の眼で確かめながらゾンディーレンをしてみたい。

C・2入りしてから彼らのC・2を探し出そうとC・2より15分程登った地点を3名でゾンディーレンするも何もみつからず徒労に終る。

果して9月27日の夜、彼らの元に何が起ったと云うのだ。いろいろな推察が飛びかうもあくまで推察にすぎず、将にナンダの神のみぞ知る。

アクシデントのあった日から数えて51日、この間、当地では3度にわたる大雪があったと云う。この新たなる積雪層が捜索の妨げとなっているのは確かである。何もかもおおい隠し山々は太古の昔の姿を取り戻している。この中から彼らを見つけ出すと云う事は将に砂浜の中からゴマツブを捨うようなものであろうか。

兎に角、明日は彼らのC・3へ登ってみることにしよう。

11月16日　天候～快晴

上部捜索活動2日目の今日も何ひとつ遺留品は見つからず重い足取りでC・2に戻る。

藤倉達のC・3とおぼしき所に立ってその余りにも膨大なデブリの痕跡を見て云いようのない絶望感に襲われた。

12時の交信の時、突然どこからともなく7羽の真白な鳥が現われ我々の頭上を飛翔するのが見られたが、あれは彼らの霊魂であったのだろうか、1羽だけ群から離れて飛んでいた白い鳥、あれは藤倉の鳥だったのだろうか……誠に魔詞不思議なことである。

結局、今日は4時間半にわたる捜索活動で何も手がかりは得られず明日はまたやりなおしである。

6,000mと云う高所でのゾンディーレン、けっしてなまやさしくはないがひと突き、ひと握りが彼らの為にやってやれる最後の務め、メロメロになる迄探しまわろう。

11月17日　天候～晴のち雪

約5時間もにわたる重労働が徒労に終った時、自分は自分にどのように云い聞かせたら良いのだろうか。

上部捜索活動に入って今日で3日目、今日こそはと思って出かけたものの今日もまた何も見つけることも出来ないまま重い足取りで帰幕する。

今日は午后より真冬日の天候となり凍つく中でのゾンディーレンはなかなか辛い仕事である。それでなくとも6,000mでのゾンデは並大低の事ではないのである。遅々として進まぬ作業量を見て腹を立ててもしょうがない、これがこの地に於ける限界なのであろうから。

◦藤倉隊C・3の位置は果して昨日、今日ゾンディーレンをした付近なのであろうか。

◦9／27～28頃の旧雪層まで今のゾンデ棒（2.5m）で到達しているのであろうか。

昨日、今日の反省としてこの2点が気になるところである。明日のRestにじっくり今後の捜索活動について考えてみよう。

11月18日　天候～晴のち雪

7時の時で-18°C、昨日あたりから気温が下がりはじめ、今日あたりの風の冷めたさなどここガルワールでも冬の到来がひしひしと肌を通して感じとれる。

朝とも昼ともつかない食事の後、昨日、佐久間パーティがゾンディーレンをした場所迄行って9/27から今日迄の積雪層を調べる。その結果、9/27頃の積雪層迄は140 cm位であり、先日堀り下げた赤旗が150 cm位であったからまあまあの線であろう。と云う事は今あるゾンデ棒で充分探索は可能と考えられる。

夕方6時の定時交信で明日以降の捜索ポイントを「C・2発見」に置いて全力を注ぐことで上のキャンプと下のキャンプの意見の一致をみる。

C・2はなんとしても探しださねばならない。C・3付近のデブリ帯の捜索と違ってC・2付近はゾンデしやすいのでなんとか2日位で見つかるのではないだろうか。

明日は例のミラクル・パワーも用いてみよう。こうなったら考えられるあらゆる手段をすべて取り入れ隅なく探すだけだ。

山は日一日と冬の装い、一日も早くみつけ出して皆の待つ日本へ連れて帰ろう。

11月19日　天候～快晴

Rest 明けの今日は藤倉隊C・2の捜索に全力を上げてかかったが労多いアルバイトの割には何ひとつ遺留品を見つけることも出来ずグッタリ。

今日でC・2スティを出してから早、6日目。いまだ何ひとつ彼らの遺留品をみつけることができず只々焦燥にかられるのみなり。

C・2の燃料EPIガスもだんだん底をついてきており今、捜索活動も大詰を迎えているが、まったくの手がかり無しでの捜索は将に白銀の砂漠でゴマツブを捨うようなものなり。

今のゾンデ棒で充分探索可能でありながら、何物もひっかからないと云う事は、やはり藤倉隊C・2の位置推定が間違っているのであろうか、明日はもう少し奥を捜索してみよう。

それにしてもこの高度で一日中ゾンデ棒を振りまわすことはなんと辛い事か……。

明日中にC・2をみつけ出さないとC・3の探索などおぼつかなくなる。なんとしても明日には決着をつけたいものである。今日より佐久間、佐藤の2名がC・2入りしたので明日からは8名の捜索活動となる。この人海面のパワー・アップに期待しよう。

また、今日は隊長、L・O（リエゾンオフィサー）もここC・2に登ってきてゾンディーレンをしていった。

隊長の胸中もさぞ焦燥感で一杯であろう。

11月20日　天候～晴のち雪

C・2捜索2日目の今日も何も発見することはできなかった。

日中の最高気温もマイナス10度以下と云う真冬日の中でどこに在るのか解らぬC・2の発見に繰り返す単調なゾンデ作業、何千、何万、何億回雪面を突きさせば出てくるのやら、一日の作業を終えてテントに横たわる時、両足は鉛のように重い。まだ高度順化が完璧でないのだろうか。それとも順応を上まわるオーバーワークなのだろうか。

それにしてもあと2日間で事実上、上部捜索活動が打ち切りとは……。

今朝の燃料計算ではあと4日間はもつと思ったが今夕6時の定時交信になったらEPIガスカートリッジがあと10本しかないと云う。とんだ誤算なり、これも最高気温がマイナス10度以下と云う低温の為に熱効率が悪くなっているからであろう。

それにしてもあと2日とは……手ぶらで帰れと云うのであろうか、御遺族の方々の胸中を思ってもとても出来やしない。大枚かけて当地に赴きながら「7羽の白い鳥を見た。」だけでどうして済まされようか。

それにしても何故見つからないのだろう。せめて夢枕に出てきて暗示を与えて呉れたまえ。我が岳友（とも）よ！

あと2日しかないと云うのであれば死んだ気になって全力を尽くす他はない。

なんとしてでも探し出してやる。俺達はC・2をみつけにきたのではなく彼らを探しに来たのだゾ！

夕方6時から8時過ぎまでの長い長い交信が終

わる。

11月21日　天候～快晴

EPI　ガス燃料の欠乏に依り8名のC・2滞在者からなる本格的捜索活動も残すところ明日一日となったにもかかわらず今日もなにも探し出すことは出来なかった。今日は7時前から午后3時45分迄精を出したが成果は零であった。

ほんとうに藤倉隊C・2はどこに設けたのであろうか。これまで隅なくゾンディーレンをしても見つけられないと云う事はどう云う事なのだろう。ゾンディーレンに依る捜索方法が間違ってるのであろうか……あと考えられるキャンプ・サイトはどこだと云うのだ。

午前中、10時頃迄8名総がかりで捜索隊C・2下方の雪原をゾンディーレンするも手がかりなし。休憩後、2パーティに分れて山田パーティは昨日、片岡より意見のあった上部雪原の捜索、尾形パーティは昨日、菊地隊長がトレースをつけたルートを上部雪原迄ゾンデを行なう。然し手がかりはなかった。

将に矢尽き刃折れ、八方塞がりの状態なり……。

夕方6時からの交信で明後日からの捜索活動方針の検討を行なう。明日で8名での捜索活動は終了し、明後日からは4名がC・2に滞在して引き続き上部捜索活動にあたることにする。C・2に残る者は尾形、山田、片岡、鈴木の4名とし新郷、佐藤の2名は一旦B・Cへと下る。そして菊地、若尾、佐久間、宮崎の4名はC・1に留りC・2のサポートにあたることになる。

いずれもRestを狭んで5～6日であろうか、それが最後の捜索になるであろう。

今日も18時から20時過ぎまで長い交信が続けられ、その中で隊長からの慟哭の交信には胸がつまされた。

舘野、絹川の両名は帰国の途へ。

11月22日　天候～快晴

本日でC・2上部の8名からなる捜索活動は終了した。最後の意気込みもむなしく今日も到頭何も発見することは出来ず、只々焦燥にかられるばかりなり。

今日はパーティを2つに分け山田パーティは例の上部クレバスにかかっていたフィックス・ロープの堀り越し、尾形パーティはインド・ナイニタール隊のC・3付近のゾンディーレンを行なう。

7時過ぎにC・2を出て14時半迄、今日は昼食も取らずに頑張ったが駄目だった。明日には下へ下らねばならない新郷、宮崎、佐藤も居たので捜索現場で香をたいて黙禱をして引き上げる。

上から腑瞰したゾンデの跡はとても美しく印象的であった。本来ならば醜い足跡としか写らないのであろうが、一本一本に思いをこめられた苦労の跡だけに美しく眺められたのであろうか。

夕方6時からの定時交信ではB・C撤収の打ち合わせがおこなわれる。

見つかっても見つからなくても上部捜索活動は25日迄とし26日には全員B・Cへ下山、27日、隊荷整理と隊荷の搬送（ブルキャ迄）、28日、慰霊碑刻みと追悼慰霊祭、そして29日の早朝B・Cから下山と云う日程が交信された。

いよいよB・C撤収の日取りは決った。それにしても手ぶらで帰れるであろうか、とは云うもののこれだけ探しても見つけだせないとは……ほんとうにどこへ消へてしまったのだろう。

ベンを取る側でシュラフにもぐる隊員達は横になるや否やもう寝息をたてている。これ迄の蓄積疲労を訴えるかのような寝息を聞いているとこれ以上の無理を強要することは出来ないようにも思えてくる。

11月23日　天候～晴

いよいよ本日よりC・2滞在は4名に削減。朝食後、C・2の片方のテントの撤収にかかり、10時少し過ぎに4名は下っていった。

下り去る4名を見送ってから残った4名でC・2上部のゾンディーレンを精力的に行なうも何も手がかりは得られなかった。

一方、9時半にC・1に上がってきたハイ・ポーター（高所人夫）と共に藤倉隊C・1に上った隊長は雪崩に押しつぶされた藤倉隊C・1のダンロップテント1張を発堀して回収した。その有様たるやズタズタの状態で若しもC・2も同じような状態であったとすればゾンディーレンでの探索は

かなり難しいように思えるとの連絡がある。

そうは云われても兎に角、上部での捜索は残りあと2日なのである。今やれる手法でベストを尽くして頑張る他ないであろう。

11月24日　天候～晴のち雪

本日はC・2探索の為、ここはとおぼしき所を片端しから塹壕を堀ってみたが赤旗1本、ゴミひとつ見つけることも出来ず徒労に終ってしまった。この高度で一日中穴堀りと云う作業はかなりの重労働で午後も仕舞になる頃には穴の中から雪を放り出す事も出来ないほど上腕が疲れ果ててしまった。

午后3時頃になって視界も40 m程に天候が崩れてきたので今日の作業を切り上げる。

夕方になって雪が降り出し心配されたが20時近くになって雪は止んだ。積雪 10 cm位。

10～12日の悪天周期を考えると丁度、また悪天候期間にあたるが、なんとかあと2日間はもちこたえて貰いたいものである。

それにしてもC·2入りしてから今日で10日目。この10日間必死の捜索にもかかわらず未だ何もみつけることが出来ず、いよいよ明日で上部捜索は一応打ち切りとなる。結局、我々は何一つ彼らの遺留品を見つけることなく帰国することになるのであろうか……。

この高所に於けるこれ迄の捜索活動を振り返ってみても悔いは残らないであろう。我々人間の力に比べヒマラヤの持つ大自然は余りにも大きすぎたのである。

それにしてもこのゾンディーレンの傷痕だけで満足して帰らなければならないとは全くもって残念至極なり。

11月25日　天候～晴のち風雪

到頭何も発見できぬまま無念の下山を甘受する結果となってしまった。本日でもって上部捜索活動は打ち切りとなる。

最終日の今日は4名で藤倉隊C・3の捜索に全力を尽すべく上部雪田に出かけた。

8日振りに上った上部雪田は新雪層が40 cm 程降り積っており、前回のゾンデーレンの跡はきれいに消されていた。例のヒナ段状のハンギング・グレッシャーの左側の氷壁には雪がびっしりとつき雪崩の脅威に怯やかされる。

前回のゾンディーレンの反省をふまえて今日は、ここはと思われる個所をスコップで堀ってみた。然し、デブリの塹壕堀は雪がガッシリと締っており手堀りではこの作業も遅々として進まず大変なアルバイトを強いられる。丁度 120～150 cm 位堀り下げた辺りから依然、堅雪層が現われ堀り出しに時間がかかる。若し、この堅雪層が9月27日頃のデブリの爪跡の層だとすれば、とても4人程度の人力で堀り出せるものではない事を痛感し改めて大自然の力の前に人間の非力さを感じさせられた。

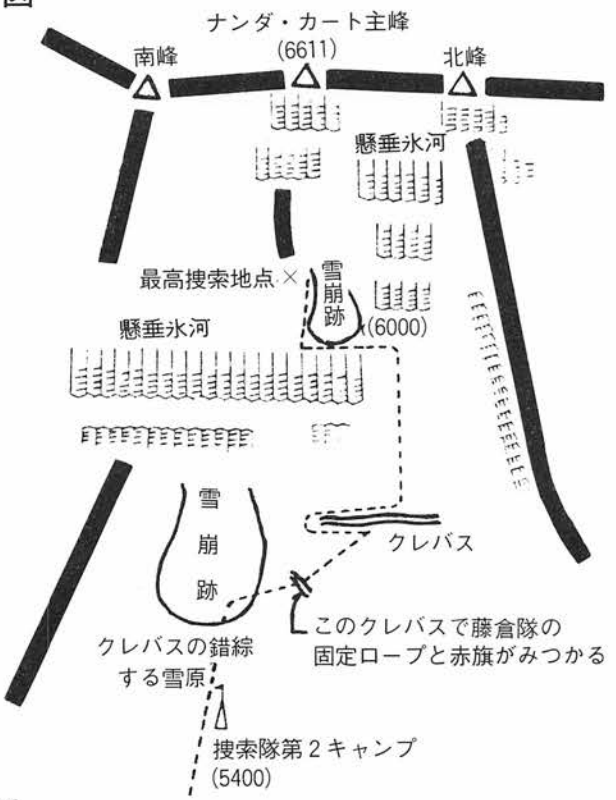
午后2時半、風雪が激しく荒れ狂い視界が利かなくなってきた為、残念至極ではあったが今捜索活動の全ては打ち切られた。

卒塔婆の替りに7本の旗竿を立て、頼まれて携えていった諸々の物をお供えし彼ら7名の冥福を祈って無念の帰幕にかかった。

午后になって荒れ狂い出した風雪は帰る頃には益々激しさを増し、往路のトレールはすっかりかき消され目もあけられぬ程の激しいブリザードの中でルートを探し出すのに難儀した。それでもどうにかこうにか16時少し前にC·2へ無事帰幕した。9月27日の午后も多分、今日と同じようなブリザードに見舞われたのであろう。

今日の風雪、明日には下ると云う事で彼ら最後のなごり雪であったのであろうか……。

第2キャンプ上部のルート図



捜索隊行動概要

尾　形　好　雄

10月21日～菊地、鈴木の2名はカトマンズのデポ装備をデリーに搬送するために成田を出発。

25日～菊地、鈴木それにカトマンズで合流した山田の3名、デポ装備を携えてカトマンズからデリーに入る。

同日、捜索隊の本隊として尾形、新郷、舘野、佐久間、宮崎、佐藤の6名は成田を出発してデリーに向う。

26日～未明に現地渉外要員としてデリー入りしていた八木原とカトマンズからの3名、日本からの6名それに現地サポート要員の絹川が合流。

この日はまずシカール・トラベル社へ赴き捜索隊の契約事項等に就いて打ち合わせを行なう。その後、IMF（インド登山財団）へ出かけ隊荷通関のためのUnder Taking（保証書）を貰いリエゾン・オフィサーのMr.マンガル・ビザとの打合わせを行なう。

午後は空港に行って隊荷の通関を行なう。魔のインド通関も2時間ほどで意外とスムーズに済む。

大型無線機と云うことで懸案になっていたトランシーバーの使用許可もこの日許可証が交付された。

27日～「ハッピー・デワリー」でお役所関係はすべて休み。

（「デワリー」と云う行事はヒンズー教の盆、正月のようなもので大変賑わう

祭りである。）

隊荷の再梱乞と現地購入品の買い出しに一日費やす。

夕方、此の度の遭難事故で一方ならぬお世話を戴いたIMF幹事のMr.J・シン氏の自宅に伺いこれ迄の御礼と捜索隊への御協力をお願いしてくる。

28日～午前中、日本大使館へ赴きこれ迄の御礼傍々捜索隊との連絡方法等について打ち合わせを行なう。

その後、空港へ出かけ入国時にデポしたトランシーバーを引き取ってくる。

「デワリー」をはさんで僅か2日間の慌わただしい出発準備の後、午後2時半1台のバスでデリーを出発する。この日は約8時間のバス・ドライブでハルドワニに到着。

29日～ハルドワニから先は山岳道路となるのでさらにトラック1台をチャーターして隊荷を積みかえバス1台とトラック1台にてカプコットの2 Km程奥にあるバラリへと向う。

途中、アルモラでは行政長官と警察署長の所に立ち寄って捜索隊との連絡方法について打ち合わせを行なう。

バラリには夜9時半頃に漸く到着しツーリストロッジに泊る。

30日～キャラバン開始

バラリ（高度1,130 m）からロハルケット（高度1,750 m）へと辿る。

31日～キャラバン2日目

ロハルケットから2,940 mのダクリ峠を越え峠の下のツーリスト・ロッジに泊る。

ダクリの峠から初めてナンダ・カートの頂稜が眺められる。

11月 1日～キャラバン3日目

ダクリ（高度2,740 m）からピンダリ河へ向って高度を下げ、さらにピンダリ河に沿って遡りドワリ（高度2,738 m）へと進む。

2日～ベース・キャンプ（B.C.）到着

ドワリからプルキア、マルトリと辿り高度3,700 mのピンダリ河右岸の河岸段丘上にあるカルカ（放牧地）に捜索隊ベース・キャンプを設ける。

3日～停滞。

前日の正午ごろより降り始めた激しい降雪が一日中続きテント1張が押しつぶされる。かなり大型のサイクロン(インド判台風の様なもの）が上陸した影響に依るもので下界の平野部では大雨に見舞われ大きな被害が出る。

4日～B.C.で「ハタケ」の儀式（安全登山を祈願する儀式）を行ない、尾形隊（尾形、宮崎、佐藤）はC・1へのルート偵察に出かける。

入りくんだ複雑な地形と前日迄の積雪に依りさっぱり距離を稼げないまま4,080mを最高到達点としてB・Cに戻る。

5日～C・1へのルート偵察

尾形、宮崎、それに高所ポーター1名は前日に引き続いて藤倉ルートをトレースしてC・1へのルート偵察を行なうも不安定な積雪層に難渋して4,320 mの上部氷河函養台地の稜までしか到達出来ずB・Cへ戻る。

一方、別ルートの偵察として山田、鈴木、新郷はピンダリ氷河へ向ったがアイス・フォール（氷の滝）の状態が悪く下部からのルートは不可能との判断を下し引き返す。

6日～前日のルート偵察の結果から藤倉ルートとは別に上部氷河函養台地の稜に出るルートを工作する。これは9月の段階では運動靴で登れた草付の斜面も一面雪でおおわれてしまっており雪崩の危険が危惧されたためである。

Bルンゼ*とCルンゼの間の尾根にルートを取り固定ロープを9本張って上部氷河函養台地の稜に出る。この日はさらにこの稜の裏側に入る沢へと下り沢を渡って対岸の懸垂氷河の下を横切

ってC・1予定地が間近に眺められる所まで足を進める。

若尾、片岡の両名がB・Cに到着する。

＊～上部氷河函養台地の稜に喰い込むルンゼを便宜上、B・C側から各々A、B、C、Dルンゼと命名した。

7日～漸く待望のC・1予定地に到達する。前日の最高到達点から「象の頭」と呼んだ稜線へ急峻な雪のクーロワールを登って到達しこの「象の頭」4,500mを捜索隊C・1とする。

8日～菊地、若尾、高所ポーターの2名はC・1への荷上げに向う。

残りのメンバーは翌日からのC・1滞在に備えて休養。

9日～第一キャンプ建設。

尾形隊（尾形、宮崎、佐藤）、山田隊（山田、片岡、鈴木）の6名はC・1に上がりこの日からC・1滞在となる。

10日～C・2へのルート工作

上部で真一文字に連らなる懸垂氷河に向ってC・1より真直ぐに登り弱点をぬってこの懸垂氷河を越え、その上のクレバス帯をトラバースしてスノー・ドームの下へ到達する。途中、固定ロープを11本張って5,050m迄達っする。

11日～C・2へのルート工作完了。

前日の最高到達点から雪面を登ってスノー・ドームに出てクーロワールの入口に向う。このクーロワールの手前で藤倉隊の2本の赤旗が見つかった。これはその後の大雪で2本とも埋もれてしまった。

クーロワール内には藤倉隊の固定ロープが抜け出る地点まで張られてあったが大半が雪に埋もれており堀り出すのに苦労する。この日はクーロワールをぬけ出した5,380m迄到達する。

12日～激しい降雪のため全キャンプとも停滞となる。

13日～C・1気象停滞。

菊地、若尾、高所ポーター2名はC・1までのルート確保にB・Cから向い途中までラッセルを行なう。

14日～第二キャンプ建設。

山田隊（山田、片岡、鈴木）C・2滞在。物井、村上の両現地サポート要員と11／4にメール・ランナーとして下った絹川の3名B・C到着。

15日～上部捜索活動（上部捜索活動報告の項
25日　参照されたい。）

26日～C・2、C・1を撤収して全員B・Cに集結する。

27日～隊荷整理とB・Cの撤収準備。

28日～慰霊祭。

B・C徹収、プルキアへと下る。

29日～帰途キャラバン。

プルキア～カティ。

30日～カティ～ロハルケット。

12月 1日～ロハルケット～バラリ。

2日～バラリよりバスにてアルモラへ。

3日～アルモラよりバスでデリー帰着。

4日～デリー滞在。

日本大使館、IMF（インド登山財団）、Mr.J・シン氏それにITBP（インド・チベット国境警備隊）のMr.フカム・シン氏の所へ捜索隊の報告傍々挨拶に往訪する。

デリーデポ装備の整理。

5日～IMF総裁、H・C・サリーン氏の自宅へ捜索隊の挨拶に往訪する。遭難者のパスポート・キャンセルの件で日本大使館へ伺う。

尾形、新郷、宮崎、佐久間、佐藤の5名はAI－308便（デリー発21時40分）にて帰国の途に着く。

6日～菊地、山田、若尾、片岡、鈴木、物井はカトマンズからの持ち出し装備の再搬送の為にRA－401便にてカトマンズに向う。

12日～菊地、若尾、鈴木、帰国。

ナンダ・カート遭難

事故原因の推定と分析

尾形好雄

9／27の夕刻6時の交信を最後に消息を絶ってしまった7名の岳友達は果して何処へ消えてしまったのであろうか。誰れ一人として目撃者もなく忽然として恰も神隠しにでもあったように音信が途絶えてしまった此の度の遭難事故……神々の寝所に召される形で戻らぬ彼らの消息は将に神のみぞ知る事となってしまった訳けであるが、ここでは、何故、彼らが消えてしまったのか我々の考察し得る範囲で原因を推察してみることにしよう。

計画段階の反省

HAJの「ヒマラヤ登山学校」は1977年秋ガルワール・ヒマラヤのタルコット峰（6,099m）で日本山岳会に協賛しておこなって以来、毎年継続的に行なっており今回のナンダ・カートは第5回目の「ヒマラヤ登山学校」であった。

では、まず今回のナンダ・カート登山学校の計画から振り返ってみることにしよう。

そもそも1981年の「ヒマラヤ登山学校」はナンダ・コット（6,861m）の計画から始った。

ナンダ・コットはピンダリ河を挟んでナンダ・カートと対峙する山で、我が国最初のヒマラヤ登山が行なわれた意義ある山である。即ち1936年立教大学隊によるこのナンダ・コット遠征で日本のヒマラヤ登山は黎明を迎えたのである。

HAJでは1981年はこのナンダ・コット登頂から45年に当ると云う事でこの日本人にゆかりの山・ナンダ・コットを目標に上げて登山学校を実行すべく1979年に仮アプリケーション（登山申請書）をIMF（インド登山財団）に提出した。然し、仮アプリケーションを提出して間も無くIMFから「ナンダ・コットは国防上の理由から許可出来ない。只、近くのナンダ・カートなら許可する。」との連絡が入った。（6月19日、IMFからの手紙参照されたい。）協会では早速、登山学校実行委員会に計って種々検討を重さね、その結果目標の山をナンダ・カートに変更して1981年の登山学校を実行する事に決定してナンダ・カートへと向った。登る山が外国にある以上、自分達の申請した山が国防上の理由とか他の外国隊と競合しているなどの理由に依り変更を余儀なくされることはインドだけに限らずネパール・パキスタンに於いても多々あるこである。

この新たな目標となったナンダ・カート(6,611m）は、ガルワール・ヒマラヤ東部のナンダ・デヴィ内院の東に位置し、北はロング・スタッフのコル(5,910m)を隔てて盟主ナンダ・デヴィ(7,816m)、南にはパンワリ・ドワール（6,663m)、東には有名なトレイル・パス（5,312m）を経てナンダ・コット（6,861m）へと続いている。このようにナンダ・カートは周囲に聳える著名な雄峰の為にどちらかと云うと不遇をかこっており、1,936年に、周囲のナンダ・デヴィ（西峰）やナンダ・コットが登られたのに対してこの山が最初に登られる迄はさらに25年も待たなければならなかった。1961年の10月20日にP・チョウダリー隊長のインド隊がピンダリ河から初登頂を果した後、1970

年5月にA・K・チャンデカール隊長の率いるインド隊が挑んだが5月31日にピンダリ氷河上部で起った雪崩により3名が遭難死して登山は中止している。第二登は1972年の秋、同じピンダリ河から入ったG・シャー隊長のインド隊によってなされた。(10／13登頂)、その後1978年6月にもP・バッタチャルジーの率いるインド隊がピンダリ氷河より試登したが6／22に無名峰に登頂しただけで終っている。

これらがナンダ・カートを舞台に展開された登山小史であるがいずれもインド隊の記録と云う事で資料が乏しく出発迄資料収集に苦労する。特にルートの写真については九山同人隊よりお借りしたパンワリ・ドワール側からのやナンダ・デビィナンダ・コットからの写真ぐらいでルートの仔細について知悉するには至らなかった。

こうした中での検討の結果、行動の概要は次のように計画された。

まず、ピンダリ氷河とチャングーチ氷河の合流点付近約4,000mにBCを設営、ピンダリ氷河下部アイス・フォールをぬけ、トレィル・パス下部に広がる雪原に出てこの雪原にC・1（約5,100m）を建設し、ナンダ・カートから東にのびる稜にルートを求める。東稜の約6,000m付近に最終キャンプのC・2を建設して頂上アタックを計ると云うものであった。

然し、当初計画したこのルートは後日、捜索隊も偵察してみたが下部のアイス・フォールの状態が悪くルートになりえない事が判明している。

彼らは偶然にも先発の藤倉インストラクターがデリー入りした際に1972年のインド・ナイニタール隊の隊員と巡り合う事が出来、詳しい情報を入手することが出来た為に当初の計画に縛られる事なく初登ルートへ取りつくことが出来たのは賢明であった。

実際、ピンダリ河右岸の河岸段丘上のB・CからC・1へのルートは上部ブリア氷河からの函養台地を形成する稜の山腹を複雑にトラバースする登路となっており、カティの村人達が夏には放牧に上ると云うだけあっていたる所に家畜の踏跡があって判りにくいルートになっている。

先発隊は、ピンダリ河からの登路を知っていると云うジョシマートのハイ・ポーター（高所人夫）を2名雇用した事や前記したように現地入りしてから得た詳しい情報に依ってB・C設営後、ルート偵察に多くの時間を費やすこともなくC・1へのルートを速かに聞くことが出来た。この予定以上の日程消化のスピーディぶりは本隊がB・C入りする前にC・1迄のルートがすでに確保されていたことで伺える。

このように計画段階では目標山の変更を余儀なくされ、その情報収集に奔走するも資料が乏しくルートを良く知悉することが出来ないまま出かける形となってしまった。その后、現地入りしてから入手した情報に依って当初の計画を変更することになった訳けであるが、確かにそれが遭難事故の直接・間接原因云々と云う事とは別に資料不足からの計画のまずさがあった事は確かである。

ヒマラヤ登山の場合、国内の登山とちがって五万分の一の様な詳しい地形図が有る訳けで無く(もっとも極く一部の山に関しては作られているのも有るが)、詳細な文献資料が豊富に有る訳けでも無く一部始終を全て把握して行くことは希であり、逆にそれら未知なるものがあるが故にヒマラヤに魅せられる訳けである。然し当協会が継続事業の一環としてやっている今回の「ヒマラヤ登山学校」の様な場合は、その性質から云って未知なるものを求めることなく豊富な資料が入手出来、予定ルートに関して仔細に知りつくすことが出来るような山で実践すべきであったのであろう。1978年の第一回ヒマラヤ登山学校から1981年のナンダ・カート登山学校まで過去4回の登山学校を振り返ってみると毎年実施された山塊・山名はそれぞれ違ったところで行なわれている訳けだが、「登山学校」としての運営を考えればこうしたやり方よりも目標とする山を三座ぐらいに絞って固定しそれを3年周期ぐらいで順繰と実践していくような方法が良いのではなかろうか。そうすれば過去のデータ蓄積は生かされるであろうし、ある程度遠征そのもののマニュアル化もされるであろう。ヒマラヤ登山学校の「趣旨」にもあるように「安全かつ確実を第一義」とするならばこの辺のところをもう少し堀り下げて検討すべき必要があるように思われる。

今回は現地入りしてから詳しい情報を入手することが出来、また下部ルートなど周辺地理に明るい高所ポーターを雇用するなどした為にルート自体は良く掌握しており、余計なルート偵察に時間を費やすこともなく順調にキャンプ展開が計られ予定よりも早くアタック態勢が確立した。然し、逆にそれが裏目となり登山の最終段階を迎えた時に悪天候につかまり被害を大きくしたとも云える。

遭難事故の原因

それでは次に本論である遭難事故の直接原因に就いて推定してみることにしよう。

まず、彼ら7名の最后の動静を小島隊長との交信内容から見てみよう。

9月27日、第一次アタックを翌日にひかえてこの日ナンダ・カート頂上雪壁の下、高度6,000m付近にC・3を建設し、第一次アタック隊として藤倉、寺本、鈴木の3名は、そのままC・3に留った。C・3建設のサポートと高度順化の為にC・3に上った阿部、斉藤、本田、埜口の4名は、その任を果してC・2へ向けて下降を開始したものの午后になって崩れ始めた悪天候に摑まってトレールを見失いC・2へ下りきれず、また再びC・3へ引き返してきたところから今回の大きな悲劇は始まる訳けである。

16時のC・3とC・1の交信ではC・2へ下った4名との連絡が取れず安否が気づかわれていたが17時の交信の時には4名とも無事にC・3にまた引き返し、留ってた3名と一緒に居るとの事であるから、彼らは17時近くになってC・3に戻ったのであろう。

17時の交信の時にC・3の藤倉は、この時間に再度C・2へ下らせる事は危険であると判断して、この夜はC・3の4～5人用テント1張に7名で泊り明日下山させることに決断する。遅い時間、悪天候などからして当然の判断であったと云えよう。

そして18時の交信では翌日の予定について協議し、C・3の藤倉の考えでは天候次第で藤倉、寺本、鈴木の3名は予定通り頂上へアタックに向い他の4名はC・2へ下山させる旨が伝えられたと云う。また、この時に藤倉に雪崩に対する安全性を確認したがC・2、C・3共大丈夫との事であったと云う。C・1の隊長は、尚も降雪中なのでC・3も充分注意するよう指示し翌朝7時の交信を約束して交信を終えている。

そしてこの交信を最后に彼ら7名はプッツリと消息を絶ったのである。果してこの後、何が起ったのか……将に神のみぞ知る。

彼らが消息を絶ってから50日が過ぎ去った11月16日にこのC・3の事故現場を訪れた捜索隊員は一様にその余りにも広大な雪原に失望した。サッカー場が何面もとれるようなスノー・グラウンドに残る古いデブリの痕跡は次から次に降り積った雪におおわれておりその爪跡は僅かに認められるだけであったがかなりの範囲に散ばっていた。遭難事故のあと初めて彼らの消息が途絶えたC・3付近に上がり、この光景を眼にした時、直感的にこの雪崩にやられたのだなと思ったのは筆者だけではなかったであろう。

C・3に上った7名全員が還らぬ今となっては、あの広大なスノー・グラウンドの何処にキャンプを設けたのかは小島隊長との交信で伝えてきた乏しい交信内容から推定する他はない。

高度6,000mに広がる雪原のドン詰りから頂上に続く雪壁が約600mの高度差を持って迫上がっている。過去2度にわたるインド隊の登頂ルートとなったこの雪壁だが、今回はここで雪崩が起った。雪崩のセオリーから云えば当然ながら雪崩が起ってもおかしくない斜面であるが、ここで問題となるのは雪崩に対する危惧感である。若し、我々が初めてあの地を訪れて広大なスノー・グラウンドに立ってあの頂上雪壁を見た時に雪崩に対する危惧感を果してどの程度抱くであろうか。その度合に依ってあの広大なスノー・グラウンドの何処にキャンプを設営するかが決まる事になるであろう。

前記したように遭難した藤倉パーティは18時の交信ではC・3付近の雪崩に対して危惧感を抱いておらず、それは雪崩に対しては危険のない（と判断した。）キャンプ地を選定したと云う気持があった為なのであろう。あの地で危惧感を抱かずにテントに留っていられると云う隊長への交信内容を考え合わせると彼らは頂上雪壁の基部からかなり離れた所へキャンプを設けたものと思われる。彼らは彼らなりに頂上雪壁の雪崩に対して警戒し

ていたであろうし、万が一雪崩が起った場合でもそのデブリの最高到達距離を考えてキャンプ地を設定したであろう。然し、結果として頂上雪壁から起った大雪崩は彼らの予想をはるかに凌ぎ一瞬にしてテントごと呑みこんでしまったようである。現場の地形からして押し流されるような地形ではなく雪崩に遭遇したら押し潰されるような平担な雪原なのである。それでも万が一の事を考えて捜索隊が上部捜索活動に上った際、このスノー・グラウンドの中ほどに走るクレバスも捜索してみたが其の后のスノー・カバーもあってゴミ一つ見つけることは出来なかった。

以上、捜索隊員として現地に赴き捜索活動を展開した事故現場の状況などから雪崩にやられたのであろうとの直感的な観点から彼らが消息を絶った原因を雪崩と決めつけて筆を走らせてきたが、それは次の幾つかの疑問点を考え合わせても事故の直接原因としては「雪崩」と想定せざるを得ないのではなかろうか。

まず一つには、事故発生の時刻であるが、彼らが持参していた2台のトランシーバーが同時に故障することは通常考え難い事から云ってやはり9月27日18時の最終交信から翌28日朝7時迄の夜間に起ったと考えるべきであろう。若しもこの間に、彼らがC・3から行動を起した後で発生した何等かの事故であれば全員一緒と云うよりも7名のうち誰か1人ぐらいは連絡に降りれるのではないだろうか。連絡に下った者が途中で遭難することも当然予想される訳けでこれだけの事から云々とは云えないが、ここは現場に居た藤倉副隊長の慎重かつ冷静な判断からして悪天候下の夜間行動は絶対に無かったものと確信したい。第三者がこのような確信をすることはおこがましい次第であるが、私事を若干述べさせて貰えば筆者と藤倉副隊長とは高校山岳部時代からの山仲間でかれこれ16年もの長きにわたって山行を共にしてきたのである。その間、ヒマラヤにも6,000m峰、8,000m峰と三度の遠征を一緒に出かけており、ヒマラヤのような高峰に於ける低酸素領域の中で彼がどの様な事を考えどの様な行為に出るかはある程度予測出来る。と云っても過言でない程のカメラードであった事を申し添えておきたい。

余談が長くなったが、もう一つは現地に唯一居合わせた小島隊長が抱いた当日の気象状態に依る雪崩への危惧感である。27日午后からの降雪は小島隊長の居たC・1でも大雪に見舞われ、雪崩が非常に起り易い状態になっていた。

以上の事から判断しても今回の遭難事故の直接原因としては「雪崩」以外に考えられないのではないだろうか。

今回の雪崩遭難事故について

我々山へ行く者にとって雪崩は国内外の山にかかわらず氷雪登山の最大の脅威でありながら、その現象はまだよく解明されておらず、その為に雪崩に依る遭難は、危険の予知と予防が難しい厄介なものであり、なかでも新雪雪崩は時を選ばず発生する点で、特にその感が深い。

ヒマラヤの遭難事故の最近の統計を見ると(註84頁)雪崩に依るヒマラヤの遭難事故は実に56%と半分以上を占めており然も雪崩遭難の場合、その大半が大量死亡となっているのである。

本論に入る前にこの直接原因となった雪崩に就いてもう少し詳しく知ることにしよう。

雪　崩

1. 雪崩の分類

雪崩の分類はその目的によっていろんな分類法がある。1973年の国際分類では、発生の原因(4種類)、発生の形態(5種類)、滑り面の位置(6種類)、発生時の雪の水分(3種類)、通過区の形態(3種類)、運動型(3種類)、デブリの粗さ(5種類)、堆積した雪の水分(3種類)、堆積区内の混入物(6種類)等で分類されており、これら9要素の組み合わせは、単純に計算しても291、600通りあることになる。(註1)

このように30万種にも及ぶ雪崩の中から自分達が遭遇した雪崩を見つけることは到底不可能に近いことであろう。

日本氷雪学会が1965年に作った雪崩の分類法はこれほど詳細な分類ではなく、(1)雪崩発生の形(点発生と面発生)(2)雪崩層の雪質(乾雪と湿雪)(3)滑り面の位置(表層と全層)の3つの要素から分類し、それぞれをさらに2つに分けて6種類に分類している。

ここでは遭難予防の見知からは勿論の事乍ら判

り易い典型的な雪崩を5種類掲げることにしよう。

すなわち、

乾燥雪崩、雪板雪崩、湿潤雪崩、旧雪雪崩、氷河雪崩。（註2）

であるが、ここでは今回の直接原因と思われる乾燥雪崩を中心に触れる事にする。

乾燥雪崩

乾燥雪崩は積雪が増加することによって自然発生する表層雪崩である。寒いときに急斜面に降り積った新雪は、少量ならばこの雪は斜面にとどまっているが、新積雪が深くなると、自分の目方を支えきれずに滑りおちてしまう。風のようなちょっとした刺激でも発生するし、また、これに登山者が踏みこむような刺激を与えればなお発生し易い。従ってこの雪崩は降雪中、降雪後1日の間位に起り易く、その発生率は80％とも云われている。

降雪が終ってから、とくに刺激がなければ新雪は次第に落ちついていき、一般には2～3日でかなり安定すると云われている。然し、気温が低いときは、その危険はさらに長く持続する。

この雪崩は、密度0.1位からそれ以下の軽い雪の雪崩であり、速度が速いのでこれを見てから逃げ出すことは難しい。

次にこの最大の脅威である雪崩の発生条件に就いて見てみることにしよう。

ヒマラヤの雪崩遭難の発生件数と死亡者数は、かなりの高率で起っているが、そのかかえる問題が余りにも難しい事もあって、この難題は解決されることもなく手を束ねているのが現状である。

ここでは、日本などの雪崩から導き出された一般原則的な発生条件を見てみることにしよう。これらが普遍的な原則として即、ヒマラヤの雪崩にあてはまるかどうかは判らないが考察する上での一助とはなり得るであろう。

2. 発生条件

(1) 傾　斜

雪崩は30～50度くらいの斜面に出るのが普通で、ことに40度前後のところに多いとされている。

然し、見通し勾配（雪崩の最上部と最下部を結ぶ線の角度）が18度以下の斜面でも雪崩は起りうる。只、その場合は一般に落下速度は小さく、被害も小さいようだ。

斜面勾配が60度以上のところでは、降り積るそばから流れ落ちてしまうので、普通の降り方では雪がつかない。

一方、広大な斜面の場合には、緩傾斜なるが故に出るべくして出ないでたまっていた大量の雪が、一度に崩落することがあるので、そう云うときは速度も大きく、凄まじい被害をもたらすことがある。

ナンダ・カートの頂上雪壁は、南峰～主峰～北峰にかけて幅広く広がっており、これが6,000 mの高度に展開するプラトーへ向けて一気に切れ落ちている。その高度差は約600 m、平均斜度は45度位であろうか。こうしてみると頂上雪壁の傾斜は、ひとたび雪が降り積もれば極めて雪崩が起り易い斜面であったことは確かである。とは云うもののナンダ・カートをピンダリ河側から攻略しようとした場合、登頂ルートは唯一この雪壁に取らざるを得ない訳けで過去、初登隊以来いずれの隊もこのルートを登っているのである。

(2) 密度・雪崩層の厚さ

乾燥雪崩は、結晶が低温中で形成された雪、いわゆる粉雪の場合に多く発生する。粉雪は密度が小さく（0.10～0.25）、結晶の間に空気の入る余地が多いので結晶同志の結合力が弱く崩落しやすい。

降り積った雪は、変態が進んで締り雪と化し、密度が大きくなって安定するわけで、従って新雪の密度増加は安定化の目安となるが、それ以外の場合には、密度が必ずしも安定度の尺度になるとは云い難い。

積雪の種別と密度の範囲（登山講座　第4巻　山と溪谷社編）

種　別		密　度
新　雪	乾	0.05～0.20
	濡	0.10～0.30
締り雪	乾	0.15～0.45
	濡	0.15～0.50
ざらめ雪	小	0.25～0.50
	大	0.30～0.60

確かに理論的には上記のようになる訳けである

が、実際問題としては新雪の密度推移がどうこうと云うよりも、行動中に積雪層の安定度テストを行なう方が確かであろう。危険のない斜面の積雪を丸く塔を残すように堀り捨て、そこに残された塔を手で押してみる。もし特定の層からすっぱり切れて滑るようであったら、上部の斜面も危いと考えるべきであろう。（若林式弱層テスト）

積雪層の厚さが一定の限界に達すると、それ自体の重量や外部からの刺激により、結晶同志の結合力が崩れて雪崩層の積雪が50 cmになると、他方の積雪を一緒にひきずり落して面発生となるものが多いとも云われている。

(3) 地表面の形、状態

雪崩の発生し易い地形としては、半漏斗状で、下方の急斜面（ことに斜面の下方に滝や崖があるような地形）に連なるコンヴェックス斜面（凹形斜面）に多いとされている。

また、雪崩の発生する位置は一般に斜面の上部が多く、スラブなどの岩盤が露出してたり、氷などで覆われた滑らかな地形などは危険と云われている。

ナンダ・カートの頂上雪壁は太古の昔から培われた蒼氷と堅雪のミックス壁となっており、北峰よりの斜面にはハンキンググレッシャーがひな段状に積み重なっていた。

(4) 気　象

モンスーンの影響を受けるネパールやガルワール・ヒマラヤではモンスーン中に大量の雪がもたらされる事は周知の通りである。

4月から5月にかけてインドでは太陽が殆んど頭の真上にくるようになり、強大な熱的にできる低圧部となる。こうして形成された熱低気圧が徐々に北へ移動するためベンガル湾北部では東北モンスーンにかわって南東風が吹きこむようになる。

この南東風はヒマラヤ山脈のため東風に曲げられ、インド北部では多量の雨に恵まれる。

ヒマラヤ山中もこの時期には、ヒマラヤジェットの南枝の衰えや下層の南東風循環の加速などにより上層気流が撹乱されるようになって大量の降雪がもたらせるようになる。

恐らくこのモンスーン時が新雪雪崩の号音が最も激しく山々に響きわたることであろう。

9月下旬になると、普通はこれらの南から侵入する季節風は衰え始める。然し、モンスーンの末期には偏西風の谷に伴われた低気圧が襲来することが多く、モンスーンのなごり雪とも云うべき豪雪に見舞われる事がある。

太古の昔から積層されてきたヒマラヤの氷雪層の表面が大量の新雪によって一度に覆われた時、山々は極めて危険な状態となる。

事故当時の気象

雪崩の概念を摑んだところで、今回の雪崩遭難に就いて考察してみよう。

まず、最初に事故当時、ヒマラヤの各地を襲った豪雪からみてみることにしよう。

昨年秋のネパールやガルワール・ヒマラヤの気象を見ると9月11日までは、モンスーンに依る典型的な悪天が続いた後、一転して12日から26日までの2週間にわたって概ね良好な天気が続いた。このため早いモンスーン明けと錯覚された登山隊が多かったようである。早々にB・C入りして登山活動に入っていた登山隊は、この好天期間のお陰で順調にルートが延び、ナンダ・カートの当、協会隊のように早くもアタック態勢に入った隊もあった。こうしてルートが延びきっていたところで9月27日から悪天が始り、3日間にわたって異常降雪がヒマラヤの各地にもたらされた。そして、この異常降雪は乾燥雪崩のセオリー通りとなって3隊を襲い、わずか2日間に13名もの命を飲みこんでしまったのである。

特にこの異常降雪は、ヒマラヤ東部ほど多く、同時期入山していたネパール・ヒマラヤのランタン・リ（7,239 m）のネパール・HAJ合同隊のベース・キャンプでは27日から29日にかけて約2m近い降雪に見舞われている。この隊は、たまたま全員アタック前の休養でB・Cに下っていたためにこの白い悪魔に掴まらずに済んだようである。

一方、アンナプルナ山群の北面でマルシャンディ河からガンガプルナ（7,455 m）北西稜に挑んでいた明治大学駿台山岳部隊も27日から29日にかけて豪雪に見舞われ、29日の朝までにC・2(6,750 m）の積雪は2mを越えたと報告している。それ

で、この隊は、29日にC・2が雪崩に襲われ不幸にも2名の隊員を失なうことになってしまった。

このアンナプルナ山群では前日の28日にも惨劇が起っている。アンナプルナI峰（8,091 m）に北面の北西バットレスから頂上を目ざしていたフランス隊は、27日夜にC・2（5,650 m）が雪崩に襲われ、シェルパ2名が死亡、翌28日にはC・1（5,100 m）も雪崩に襲われ2隊員が犠牲となった。同じ頃、裏側の南壁から取付いてた日本のイエティ同人隊も死亡事故に至らなかったものの雪崩の襲撃を受けている。27日に南壁に起った大雪崩の爆風でC・2（5,500 m）のテントが吹き飛ばされ2隊員が新雪に埋められたのである。幸いにも脳震とうというだけで済んで大事には至らなかったようだ。

このようにネパール・ヒマラヤ各地を襲った豪雪は、インド、ガルワール・ヒマラヤも襲い当協会のナンダ・カート隊もこの白い悪魔の爪にかかってしまったと云えよう。

ガルワール・ヒマラヤ東部のナンダ・カート周辺では、この嵐の襲来はネパール・ヒマラヤ中部周辺に比べて半日から1日位遅れて襲来した。ネパールのドルジェ・ラクパ（6,989 m）(法政大第Ⅱ部山岳会隊)では26日午後から天候が崩れ出し夜半より雪が降り出したと報告しているのに対して、ナンダ・カートでは27日の朝もまだ快晴に見舞われており、C・2に居た7名は何ら逡巡することなくC・3建設に向けてC・2を後にしたのである。

午前中はたいした天候の崩れもなく、順調に登高も捗り12時の交信時には、すでにC・3予定地に辿り着いてテントを設営中との事であった。

然し、午后になって天候が崩れ出し、サポートの4名がC・2に戻る頃にはブリザードが荒れ狂いホワイト・アウトの中を彷徨う事になる。ルートを見失なった彼ら4名はやっとの思いでC・3へ引き返すことが出来、再び7名が一緒になったのである。

事故当時のこのような天気は、ガルワール・ヒマラヤのピンダリ河側だけの局地気象だけだったのだろうか。同じ時期に山稜を挟んだ裏側のトリスルI峰（7,120 m）に挑んでいた仙台山岳会の人達の話しを聞いてみよう。

仙台山岳会の人達は、9月27日、C・3からC・4へのルート工作に向った。午前中は晴れており、6,100 m付近迄ルート工作を行なう。午后になって濃霧が上ってきて風雪に見舞われるようになり、16時頃、激しさの増した風雪の中をC・3に戻ったらすでにテントが埋れていたと云う。

翌、28日は朝から風雪であったが、8時半頃にC・3から下降を強行する。C・2へ下る途中でフィックス・ロープを堀り出している時に新雪雪崩が発生して1名流されるもフィックス・ロープのお陰で助かる。C・2の雪壁の所には、かなり大規模なデブリが見られ、腰までの深いラッセルを強いられる。C・2からC・1迄は通常1時間でいけるところを6時間もかかったと云う。この日は、さらにBC迄下降している。

29日も1日中風雪が続き、翌、30日の午後になって漸く上部キャンプから晴れ間が現われはじめたと云う。

このように隣接するトリスルI峰でもこの荒天を予知出来ないまま風雪に襲われていた。

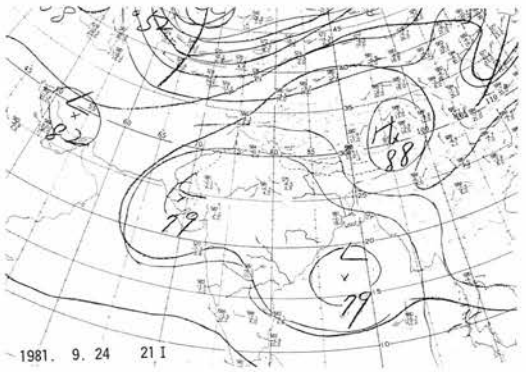
一方、この時期には平地でも大雨に見舞われ、インド、ネパールなどでは大洪水による大きな被害が出ている。

これらの原因は一説によるとアラビア海で発達した低気圧がインド西部からネパールにかけて縦断したと云われている。（註3）

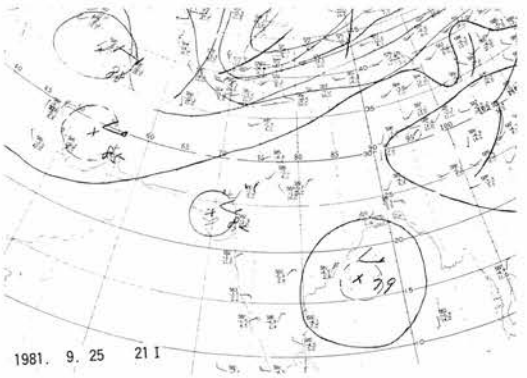
然し、当時の北半球の500 mb等圧面天気図や地上天気図を見てみると9月24日にベンガル湾（北緯16°30′、東経87°30′）にサイクロンが発生しており、このサイクロンはかなりの速度でインド亜大陸に上陸したあと、なお北西方向に進路を取って進み、28日にはパキスタンに近いインディアン・デザート（砂漠）まで達している。

この天気図を見る限りに於いては、平地を襲った豪雨は、このサイクロンの北上に伴う南からの高温湿潤な風の吹き込みによるものと見るべきではないだろうか。

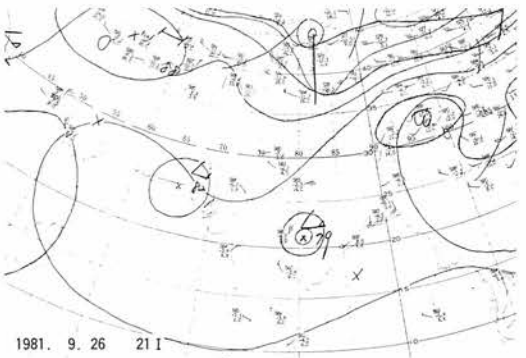
確かにヒマラヤ山中にもたらされる豪雪が、単にこのベンガル湾からの影響によるものでなく上層気流の影響によるものとされてる事は（註4）周知の通りであるが、今回の豪雪をもたらした要



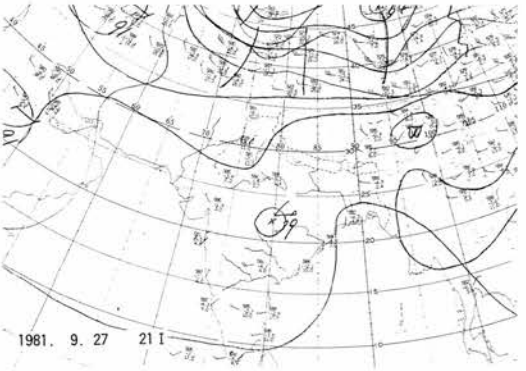
図－1　北半球 500 mb等圧面天気図



図－2　北半球 500 mb等圧面天気図



図－3　北半救 500 mb等圧面天気図



図－4　北半球 500 mb等圧面天気図

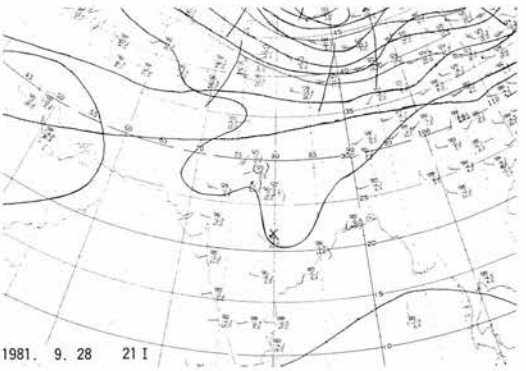
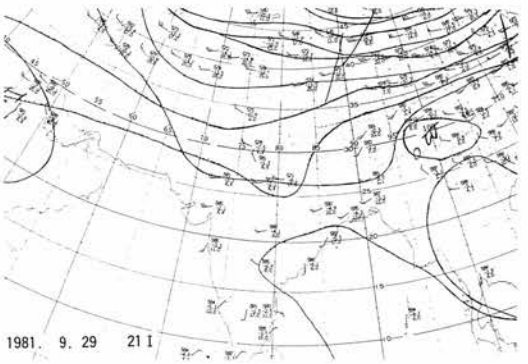


図　5　北半球 500 mb等圧面天気図



図－6　北半球 500 mb等圧面天気図

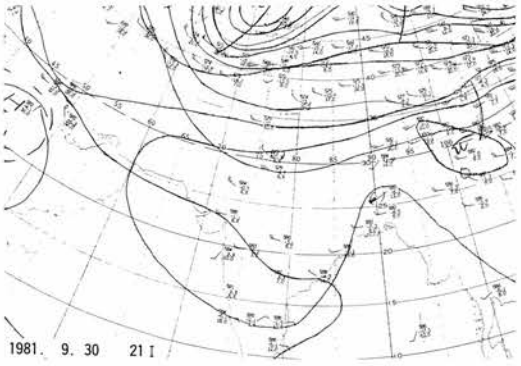


図 －7　北半球 500 mb 等圧面天気図

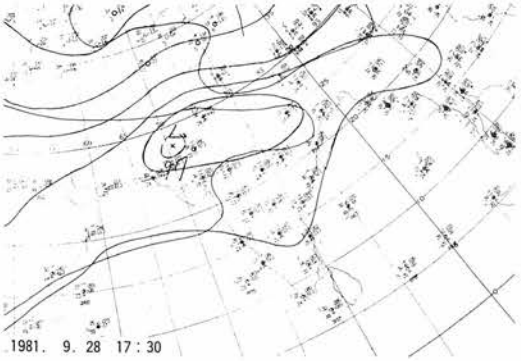


図 － 9　北半球地上天気図

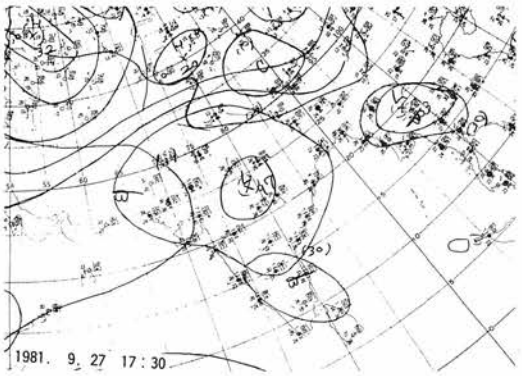


図 － 8　北半球地上天気図

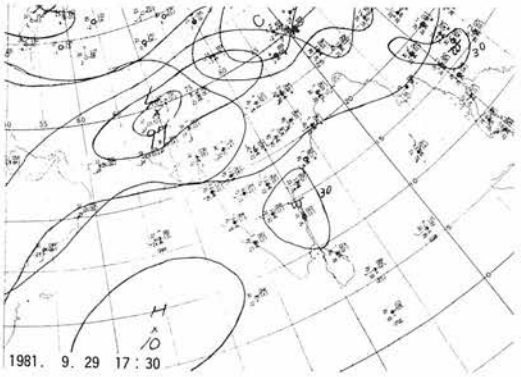


図 － 10　北半球地上天気図

因としてこのサイクロンが作用した事は確かであろう。

図－1～7は、北半球の500 mb 等圧面天気図である。この天気図は、丁度、標高 5,500 m位の高さのところの天気図である。従ってこの高層天気図に現われる風の流れ、寒気の状態は直接5,500 m級の山岳における風や寒さの程度、天気状態のよき指標となるのであるが、生憎とヒマラヤ山中ではゾンデ観測がやられてないため我々登山者が一番知りたい地域のデーターが無いのが残念である。

ナンダ・カートは北緯 30°18′、東経 80° 55′に位置するわけだが、ここに一番近いインドのゾンデ・ポイントとなるとヒマチャルプラディシュ州のアンバラ（北緯 30°23′、東経 80°55′）となる。300 kmも離れたHP州のゾンデ観測から地形入りくんだUP州の外れに在るナンダ・カートの局地気象を推測することは難かしいであろうが、ここでは、この9月のインド北部の気象推移をこのアンバラの高層気象からみてみることにしよう。

表－1は、9月のアンバラの高層気象であるが、この表を見るとアンバラの上空は、通常は偏西風の影響を受けて北西寄りの風が吹いているのが判る。24日にベンガル湾にサイクロンが発生してから風向きが南西に変わり熱い湿った空気が吹き込んだのであろう気温、湿度（註5）ともに急に上っている。25日、26日の両日も同じような観測

表－1　9月のアンバラの高層気象（北半球500 mb等圧面天気図による）（時刻：21時）

月日	高度(m)	風向	風力(ノット)	気温	気温と露点の差
9/1	5,830	NW	15	−2.5	12.0
2	5,820	NW	10	−2.5	×.×
3	(入電無し)				
4	5,800	WNW	15	−4.7	×.×
5	5,820	WNW	15	−1.1	×.×
6	5,830	SW	5	−5.7	×.×
7	5,790	NW	5	−8.5	×.×
8	5,820	SE	10	−6.7	11.0
9	5,800	NE	5	−8.5	11.0
10	5,780	W	15	−9.9	×.×
11	5,760	NW	20	−8.3	16.0
12	5,900	NW	15	−0.3	×.×
13	(入電無し)				
14	5,840	NW	5	−6.9	×.×
15	5,810	NW	10	−7.5	×.×
16	5,800	ESE	5	−9.1	15.0
17	5,800	NNW	5	−8.3	11.0
18	(入電無し)				
19	5,780	NNW	5	−8.1	×.×
20	5,790	NNE	10	−8.7	×.×
21	(入電なし)				
22	5,860	ESE	5	−3.9	×.×
23	5,770	NW	5	−7.5	13.0
24	5,840	SW	5	−0.7	4.6
25	5,850	WSW	10	−4.9	1.6
26	5,800	WSW	10	−7.1	3.0
27	5,990	NNE	5	−7.3	11.0
28	5,750	SW	30	−3.3	2.4
29	5,780	WNW	15	−7.5	2.2
30	5,720	NW	10	−10.3	×.×

データーが見られており、当然午ら27日もサイクロンの北上に伴って同じ様なデーターとなるべきであろうと考えられるのだが、どう云うわけかガラリと変った観測データーが得られている。即ち風向が北北東に変り、急に気圧が上がり湿度が低くなっているのである。

若し、この観測データーが正しいものだとすると、サイクロンの北上に伴って（とは云っても前日に比べて130 kmも移動してないのだが。）吹き込まれていた南からの高温湿潤な空気の上に北から冷い気流が流れ込んだ事が予想される。そうだとすれば非常に不安定な上層界相を生じさせることとなり当然のことながら悪天に見舞われることは必至である。

果して、そのような事が起りうる現象なのであろうか。ちなみに気象庁で閲覧した500 mb等圧面天気図のこの日のデーターについては、データーが異常であるとの赤印が入っていた。

風向が北北西と云っても風力が5ノット（2.5 m／sec）と非常に弱く、500 mbの高度が上がったとしてもこれは気圧・気温から算出する値であるし、湿度も気温と露点の差から求めるとなれば、気圧・気温の観測が間違えばこれらの値も変ってくる筈である。然し、気象変化によるヒマラヤ山中での遭難事故は27日から28日にかけて起っているのである。

それでは、次に28日の天気を見てみよう　翌日になると一変して風向は南西と向きを変え30ノット（15 m／sec）の風となって吹き込むようになり、湿度もグンと上昇する。

29日の地上天気図をみるとこのサイクロンは、勢力を劣えながら（前日の500 mb等圧面天気図からは見れなくなり地上天気図だけとなる。）パキスタンのジャコババド辺り（北緯290°、東経70°）まで進んでいる。アンバラの高層気象もまだ湿度は高いものの風向きは北西寄りに変ってきている。

こうして24日にベンガル湾にサイクロンが発生してからの気象の推移をみてみると、やはり27日の観測データーは特異であり、気に懸るデーターである。当日、300 kmも離れたヒマラヤ山中のナンダ・カートでは午後より激しい風雪に襲われている事などを考え合わせると、やはり、アンバラの上層では、この気象庁も疑問視するような特異な気象現象が起ってたのではないだろうか。

以上の事から9月末にヒマラヤ山中に豪雪をもたらした悪天候について推察してみると、ベンガル湾に発生したサイクロンの北上に伴って、南東もしくは南西の高温湿潤な風が吹き込み、それによってヒマラヤの上層を流れる偏西風に攪乱が生じ、気圧の谷のようなものが出来たところへまた吹き込みがあってあのような豪雪をもたらしたのではないかと思われる。

遭難事故の反省

此の度のナンダ・カート峰遭難事故で7名もの有望な岳友を失った我々は、云うまでもなく大きなショックを受け、悲しみの深潭に突き落された。

この遭難事故で我々が受けた大きなショックも我々1人1人が深刻に受けとめ、冷静に分析し、彼らが生命と云う掛け替のない代償を払って示してくれた大自然の教えを生かしていかなければただの個人的感傷として残るだけであろう。

志しを同じとした我々としては、こうした悲劇を二度と再び繰り返す事のないよう自らの問題として指摘する点は指摘し、反省すべき点は反省してそれらの事柄がそのまま自分達の今後に具体的な形で生かされるようにしなければならない。

遭難事故はいつの世もそうであるように突如として恰も青天の霹靂の様に起るもので、その発生要因も幾つかのファクターが競合して起る場合が多く、そうした全ての要因を分析して反省を加えるのが事故報告書の役目であろう。然し、それは自分達の手に余る問題もあるであろうし、到底短い文章では書き表わせるものではないであろう。

ここでは、現在の自分達にとって可能な範囲で詳述し、省察していきたいと思う。

まず、はじめに直接原因となった雪崩遭難についてであるが、これは前述したようにベンガル湾に発生したサイクロンの北上に伴った上層気流の攪乱によってヒマラヤ山中に一度に大量にもたらされた豪雪で起った雪崩と云えよう。

では、このヒマラヤ山中を襲った悪天を事故が起る前に予知することはできなかったのであろうか。

ヒマラヤ登山を目的とする大半の登山隊では、昔のマナスル隊（JAC）の様な大がかりな気象観測器材を携えて出かける事は、まずない。「ヒマラヤの気象」を学術テーマとしてとらえて専門家が随行して行くような隊でもなければやられてないのが現状である。

日本国内の様にB・Cにファクシミリでもあって常時、北半球の500 mb等圧面天気図などが送られてくるのを眺められれば確かに素晴らしいことであるが、高価な機材や操作（オペレーターが常に張りつけ状態になりうる。）などに問題があるために余り一般化はされてない。それに過去に持参した登山隊の報告でも余り有効利用である事が述べられてないことなどもあって多くは活用されていない。

多くの登山隊は、往路のアプローチ・マーチやB・C設営を通していち早くその山塊の局地気象のパターンを摑むことに努力し、把握した気象パターンの日々の気温、風向き、高度計の指針の変動などから天気を予報したり判断するのが常である。

今回のナンダ・カート登山隊でも当然の事乍らこれら局地気象の掌握には注意が払われていた事は、小島隊長の言葉からも伺える。

昨秋の天候は、前述したように、9月11日頃迄、典型的なモンスーンによる悪天候が続いた後、一転して好天期間が訪れており、これを境に昨秋のほとんどの登山隊は早いモンスーン明けと錯覚したようである。

この落し穴にはまった為に9月末になって3日間も悪天が吹き荒れるとは予知できなかったのであろう。

確かに500 mbの等圧面天気図や地上天気図を後になってみてみるとサイクロンの発生を知る事ができ、なるほどと考えさせられるわけだが、実際、我々が山の中に入って観天望気だけの手段で此の度のような悪天を予知することが出来るのであろうか。天候が崩れるとか雪が降るだろうの予測はできても、それが豪雪に見舞われるとか何日も降り続くなどは、観天望気だけでは難かしいように思われる。

ヒマラヤ登山と云っても最初から四方に眺望の利く山稜を登ってる訳けではなく、通常は谷間に設けたB・Cから山塊の一角を頂上目指して登るわけであるから山の反対側からどのような悪天を知らせる雲がたなびいているのか、どんな雲堤が押し寄せているのかなどを掌握することはなかなか難しい事である。

観天望気の技術にもよるであろうが、ヒマラヤ山中での谷間（側面）からの観天望気には限度が

あるのではなかろうか。一部の気象学者は、観天望気さえしていれば予知出来たことであると語っているが、果してそうであろうか。

ヒマラヤ登山に於いて高度計は必携品であるが、我々はそれを単なる高度計としてばかりでなく晴雨計としても用いることが多い。即ち同一地点の気圧の変動で天候を予測するのであるが、9月27日朝、C・2に居た彼らがC・2の気圧変化をどのように受けとめたか、またどの様な気圧変動があったのかは誰も居ない今となっては不明である。

前日迄、好天が続いていて27日、当日も朝から快晴となれば、上に向って行動を起しても当然ではなかっただろうか。

確かに、この澄みきった青空が、日本の冬山で遭遇するような疑似好天（註6）であることを看破して下っていれば今回の遭難事故は回避できたであろう。

然し、日本の様な詳細な気象通報も無いヒマラヤ山中でそれを予期できるかと云ったら、それは我々登山者の予知能力をはるかに越えるものであり困難な事と思われる。

それに今回の登山隊の様にB・Cから上での登山活動を14日で攻略しようとする短期速攻登山にあっては一日の無駄も許されない効率の良いローテーションが望まれるタクティックスにあって、翌々日は第一次アタックをかけると云う最終段階の中で朝から快晴であればアタック・キャンプ建設へと登っていっても当然ではなかったろうか。

この日、下ると云うことは頂上アタックを放棄することであり、好天が続いてきた中、快晴で向えた朝に下山しようと云う決断が下せるであろうか。これと云った判断材料も無い状態でそのような決断をするのは勘だ難かしい事に思える。

こうして振り返ってみても27日にC・3建設へと彼らが行動を起したのは決して間違っていたとは云えないのではなかろうか。

それでは次にキャンプ・サイトについてみてみることにしよう。

これまで今回の遭難事故は諸般の状況からみて7人の居たC・3のテントが雪崩に襲われて埋没したのであろうと云う推定の元に考察してきた訳けであるが、それではC・3のキャンプ・サイトは、キャンプ地として適地であったのだろうか。

実際、彼らがC・3を何処に建設したのかは、C・1に居た隊長との交信内容から推定するよりほかない訳けであるが、彼らが伝えてきた高度6,000m付近というのは500～600mにもわたって広大に展開するスノー・プラトーなのである。

彼らはこのサッカー場が何面もとれるような広大な雪原の何処に最期の宿を設けたのであろうか。

このプラトーに上がるルートは1個所だけであり、頂上雪壁のアタック・ルートも初登ルートが唯一雪壁の弱点をぬったルートに思える。このプラトーへの入口点と頂上雪壁の取付点の2点を結ぶラインをこの大雪原に引いてみると彼らのトレールが浮んできそうな感じがする。さらに、雪原のどん詰りから迫上がる頂上雪壁を見ていれば、そうそう壁の際へは設営しないであろうし、かと云って翌日のアタックの事を考えればアルバイトが長くなるようなプラトーの上がり口付近にも設営はしないであろう。

このような観点から前に描いたラインを追ってみるとある程度、彼らのキャンプ・サイトが判然としてきそうな感じがする。そして、そのポイントを追い求めていった所は悲しくも塁々としたデブリの山と化していたのである。

設営した後、27日夕方の隊長との交信でも雪崩への危惧感は抱いておらず、彼らにしてみれば、よもや雪崩が起るとは予想しなかったのであろう。然し結果的には驚異的な豪雪に依って予測もしなかった大雪崩が発生し、埋没させられてしまったのである。

予測しえなかったとは云え、結果的に雪崩の襲来する所へテントを設営した事は失敗であった。

このどこでもキャンプ地となり得るようなプラトーがキャンプ・サイトとして不適とするならばこのルートのファイナル・キャンプは、かなり下方に設けなくてはならなくなり著しくアタックに不利となる。そうなるとこれは、キャンプ・サイトと云うよりもルートの問題ともいえよう。（このルートについては後述することにする。）

彼らは先蹤者達のルートに従ってあのルートを登りつめていきプラトー上にファイナル・キャンプを設営した。これ迄培ってきた経験から当然の

事として判断したのであろう。

日本でも5月のゴールデン・ウィークには穂高の涸沢にかなりの数のテントが張られテント村が出来る。テントを張っている登山者達は何の疑いも持たずに設営しているのであろう。然し、昔に北穂沢側から起った大雪崩が涸沢の池ノ平をひとなめにして北尾根の5・6のコル付近迄押し寄せた雪崩の猛威を眼にした人は、例えそれが100年に1度起ったものであってもけっして5月の涸沢にテントを張ることはしないであろう。

予期しなかったとか、まさかあんな所からと云うのは登山者の経験から判断されることが多い。登山において経験が大切なことは云うまでもないが、長い自然界の歴史にくらべて、我々の登山史は余りにも短かい。ましてやヒマラヤ登山にあってはなおさらそうである。わずかな経験を過大評価して自然に対する謙虚さを失ってはならない事を改めて教示された思いである。

では次に先に触れたルートについて反省してみよう。

国内の計画準備段階に於いては初登ルートが判然としないまま現地に赴いた事は先に述べた通りである。

HAJの登山学校は、その趣旨にもあるように比較的短期間に於いてヒマラヤ登山の基礎と実際を経験しようとするヒマラヤ登山のガイダンス・システムとなっている。

成田から成田まで28日間で準7,000m峰に登ってこようと云うわけである。従って往復のキャラバン・マーチを考えるとB・Cから上部の実質登山活動はせいぜい2週間位となる。

このような短期速攻型の登山は、すでに1907年頃からロングスタッフなどによってガルワール・ヒマラヤで展開されており、日本では、ソ連のパミール・キャンプへ行って強烈な印象を受けてきた原真氏が1977年秋にガルワールのタルコット峰（6,099m）で試みられたのが最初となり、其の後このタクティックスは序々に浸透するようになった。昨今では「高所登山のルネサンス」なるものが叫ばれるようになってこの短期速攻登山のタクティクスは、8,000mの高峰でも展開されるようになった。

この短期速攻登山にあっては、いかに短期間に身体を高所に順化させて頂上を勝ち取るかが問題となる。その手段として「高所順応法」なるものがある訳だが、これを行なうには目標とする山のルートも問題となってくる。即ち、この「高所順応法」をやり易い山としては、登った距離に応じて高度もコンスタントに稼げるようなルートが良い訳けで、例えばB・Cから山頂まで30～40°位の斜度で上がっているルートなどが一番望ましいのである。それに対して登り降りがあったり途中にプラトーがあるルートや冗長な山稜で登った距離に対してなかなか高度が稼せげないようなルートではこのタクティクスは不向きと云える。

この原則を良く踏まえた上で山の選定やルートの検討をしないと短期速攻登山はうまくいかない。

'80年のケダルナート登山学校では、ガンゴトリ・エリアのオープンと云う事でこの聖なる秘境への入域が優先してケダルナート（6,940m）が選ばれた。我々が辿ったキルティ氷河側からのノーマル・ルートは、まず、B・Cからガンゴトリ氷河に沿ってシブリンの裾をからんだところにキャンプを設けそこからキルティ氷河を横切って漸くケダルナート・ドームから派生している冗長な雪稜に取り付く。冗長な雪稜はドームから快適なスキー滑降の斜面となるような傾斜で続いている。そして最後の大詰に来てケダルナート・ドームからケダルナート本峰への主稜線は高度差にして約150mも切れ落ちたギャップとなっているのである。

このように短期速攻登山を実践するには非常にやりにくいルートであった為、結果的には本峰の攻略にはならなかった。結局、ドームまでしか届かなかったのであるが、その登頂者が19名と大量に及んだ為、この遠征は失敗と云う現実をよそに「ケダルナート・ドーム大量登頂」と云う成功に置き換えられてしまった。

この遠征で山・ルートの選定のまずさから敗北感を味わった当時者として帰朝早々にこの事を登山学校委員会へ具申したが、やはりドームの大量登頂と云う成果のために、この紙一重の裏側に隠された危険性について余り関心は引かれなかった。

そのうち月日の流れとカンチへの躍動の中でこ

の事は次第に忘れ去られ、ナンダ・カート登山学校は新たな陣容の中で準備が進められていった。結局,'80年のケダルナート遠征から短期速攻登山に於ける一番の大きな反省点として上げられたルートの問題点に関しても、それほど深い検討もされないまま山は決りルートも決められていったことは送り出す側の立場にあった者として大いに反省している。

捜索隊の一員として現地に赴き、何もかも雪で覆われてしまった斜面にルートを切り開きながら感じた事は、短期速攻で攻めるには非常に不向きなルートであったと云う事である。

C・1へのルートは、河岸段丘から上部の氷河函養台地を形成している稜迄急峻な斜面のトラバースを強いられ、その稜上からは一担、裏側の沢へと下り、さらに急峻なクーロアールを登って対岸の稜へ上がると云うアップ・ダウンの激しい長いルートとなっており、さらにその上に続く広大な斜面を右上へとトラバースして漸く彼らのC・1へ到達すると云ったルートであった。

C・2から上部もクレバスが錯綜する広々とした雪原状となっており、途中に立ちはだかる懸垂氷河の高捲きによって高度を稼ぐようなものであった。

9月頃は、まだ雪線も高くC・1まではズックで行けたと云うから羊を放牧する牧童の如く大したアルバイトもなく登ることが出来たのであろう。

C・2から上部もクレバスにさえ気をつければ何処にでもルートが取れる容易なルートの為、これと云ったルート工作も必要としないまま、1日でC・3予定地へ到達して設営することができたのであろう。

結果的にはこれが命取りとなった。確かに今回のようなルートは、鋭い岩稜や急峻な氷壁などを登るルートに比べたら技術的困難さはさほどない易しいルートだったと云えよう。然し、ここで今一度、我々は困難性と危険性の違いを認識する必要があるのではないだろうか。

冗長で広々とした雪稜や雪壁のルートは、登攀技術面では困難性がないにしても、逆にホワイト・アウトや雪崩など自然界の危険性を背負うことになるのである。技術的な困難さは登山者側の技倆によって克服することはできても、この自然界のリスクは登山者側の努力ではいかんともしがたいものがあり、時として人間の予知能力をはるかに起えた悲劇となってもたらされることを肝に銘じておきたいものである。

ここで誤解のないようにもう一度融れておくが、今回の遭難が短期速攻登山にふさわしくなかったルートであったがために起ったというのではない。短期速攻に云々と云うのはあくまで「順応法」の問題であり、この高所順化に関しては、今遠征では実にうまくいっており、高度障害による脱落者も出ずに登山活動は順調に進捗した。これは偏に、今回参画したメンバー1人1人が優れた基礎体力の持ち主だったことに他ならないであろう。

要は、安易なルートであったがゆえにこの大きな惨劇に見舞われたと云う事である。

次に7名もの隊員が一度に消え失せてしまった今回の大量遭難について言及してみよう。

これは前述したようにC・3へサポートに出かけた4名がC・2への下山中、ホワイト・アウトに摑ってルートを見失ない再びC・3に戻った事に起因している。

C・2からC・3のルートに関しても前述したが、大きなクレバスが錯綜する広い雪原状の所は晴れてれば（視界が良ければ）何ら問題もなくそれこそ鼻歌混りで通れるルートであったであろう。

然し、それがひと度、風雪が咆哮するようになるとクレバスと云う悪魔の口を見ているがゆえに動きがとれなくなってしまう。

こうした危険を回避するために我々は通常、目印用に赤布を付けた旗竿を途中に立ててくことにしている。今回の彼らも当然の事ながら所々に赤旗を立てていっている。（捜索隊も彼らの赤旗を何本か回収している。）

それでも4名は、C・2へ下りきれなかった。結局、猛烈に吹き荒れる風雪によって視界が妨げられ赤旗を見い出せなかったのであろう。それと、最初に登ったその日にホワイト・アウトに摑ったのも不運であった。何度かキャンプ間を行き来していればトレールもしっかりしたものに固められるから摺足ででもそのトレールを踏み外さないように出来たであろうに、残念至極である。

では、赤旗の間隔はどうであったろうか。普通我々が道々に付けていく赤旗は、ルートにもよるがせいぜいまめに付けても10 mに1本位ではないだろうか。それでもルートが長くなれば旗竿の数も馬鹿にならない。

然し、このようにまめに赤旗を立てても一寸先も見えなくなるような風雪下では実際問題として役に立たないのである。

捜索隊もC・3捜索活動の最終日に、荒れ狂うブリザードに摑った。往路のトレールは、すっかりかき消され、事故隊の二の舞を踏むまいとかなりこまめに立てた赤旗さえ見つけるのは苦労した。何度か通ったお陰でトレールが良く踏み固められてあった為、摺足でこのトレールを踏み外さぬよう注意してかろうじてこの白い魔手からのがれることが出来た。

こうしてみると赤旗によるホワイト・アウト対策と云うものには限度があるように思える。ヒマラヤに於いて帰途、風雪に見舞われる事はよくあることであり、その肝心な時に用をなさない赤旗では、別な手段を講じなければならないであろう。

従来のヒマラヤ登山にあっては、ルートの難しい個所にはフィックス・ロープを張って通常の安全が計られてきた。ルートによっては、キャンプからキャンプまで張られる事がある。こう云う所ではテントからフィックス・ロープにカラビナをかければ、どんな悪天でもルートを見失うこともなく次のキャンプ地へ辿り着くことが出来る。

かと云ってB・Cから頂上迄全てフィックス・ロープをべた張りにするとなるとべらぼうなロープの量となって大変である。

今回のC・2から上部のようなルートでは、技術的な難しさはなく、単なるルート標示が出来れば良いのであるから、細い3～4 mm位の細引を張りめぐらすことで悪天によるルート・ロスは防げるのではなかろうか。

いずれにしろこのホワイト・アウト対策に関しては、最近のヒマラヤ登山にみられる短期速攻登山やアルパイン・スタイル登山に於いては重要な課題であり、逆に云えば、ルート途上にこのような対策を講じなければならない雪田を有するルートでは上記のようなタクティクスは不向きであるとみなければならないだろう。

今回の遭難事故に依って受けた我々の打撃は大きかった。この大きな犠牲を強いられたことで、こうして反省してみると遭難そのものの性格は単純である。即ち悪天や雪崩に対する危険予知の判断と云う純技術的な問題に絞られるのである。

確かに今回の9月末の豪雪は、これまで云われてきた気象現象からすれば異例のものであったのかも知れない。現に豪雨によって大洪水に襲われた平地の新聞報道などでは40年ぶりとも報じられていた。

我々は、ヒマラヤでの大きな気象遭難の後、よくこう云った何年ぶりに1度の異常気象であったと云う事が強調されるのを耳にするが果してそうなのであろうか。表－2は、ここ最近12年間に起ったヒマラヤの雪崩遭難事故である。

この表を見ると、1971年の同じポスト・モンスーン期にネパールのガンガプルナ峰で大量雪崩遭難が起っている。この隊は、登頂后から始った豪雪にC・2が襲われて6名が埋められて死亡、さらにC・3からC・2に向ったシェルパ2名も深い雪のため死亡と云う惨劇に見舞われた。

この時も平地では豪雨による大洪水で大きな被害がもたらされており、一説では70年ぶりの異常気象であったと云われている。

このように実際、この11年の間にその気象要因は違うかも知れないが2度も大きな事故が起きている事態を直視すれば、これは自分達の不運を肯定する言逃れにすぎないのではなかろうか。

我々、ヒマラヤの高峰登山を志す者としては、これらの尊い教訓を生かしていく上でも、ただその不運を嘆きその偶然性を怨むことよりも、最初の計画段階からこう云う異常気象はありうるのだと云うことを念頭に置いて、徹底した豪雪対策としてルートなりキャンプ展開、人員配置等を考慮すべきではないだろうか。特に易しいルートと云われるようなところが意外と自然界の落し穴が潜在していることを留意したいものである。

註１：「雪崩の世界から」新田隆三著Ｐ86
註２：「冬山技術セミナー」金坂一郎著Ｐ54
註３：「ガンガプルナ北西稜事故報告書」明治大学駿台山岳部　Ｐ9
註４：1934年ドイツ・メルクル隊が、ナンガ・パルバットで遭難した際、ヴィーンが天気図解析を行ってこの原因がベンガル湾でなく上層にある事を発表。
註５：高層気象観測では気温と露点から湿度をみている。露点は、その時点での空気を冷していった時に結露する温度であるから気温と露点の差が大きいほど湿度は低いと云える。
註６：疑似好天、西高東低の典型的な冬型の気圧配置になると谷川岳や剣岳などの脊梁山脈では連日風雪に見舞われるようになるが、日本海に低気圧が発生したような時は、この季節風の吹き出しが一時的に弱まり、雪が止み時には薄陽さえ射しこむような好天となることがある。然し、この好天はせいぜい３～４時間程度のものであって低気圧の進行と共に再び激しい風雪に見舞われるようになる。この一時的な晴れ間を疑似好天と呼ぶ。

（参考文献）

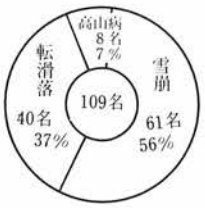
「雪崩の世界から」新田隆三著
「雪崩」アメリカ林野局著・橋本誠二・清水弘訳
「冬山技術セミナー」金坂一郎著
「雪崩」日本山岳会
「雪崩の危険と遭難対策」北海道大学体育会山岳部
「登山講座」（第五巻・第六巻）山と溪谷社編
「現代アルピニズム講座」（第四巻・第六巻）第Ⅱ次RCC編
「登山指導者研修会テキスト」文部省編
「ヒマラヤの気象」岩と雪Vol 14
「ガンガプルナ遭難の解明」岩と雪Vol 25
「雪崩事故における人間的要素」（第一部・雪崩と伝承、第二部・人間の挙動）岩と雪 Vol 34,35
「高所登山と雪崩」岩と雪Vol 43
「大気圏外からみたヒマラヤの気象」岩と雪 Vol 21
「恐怖の爆風雪崩」岳人 380号
「第17回海外登山技術研究会資料」日本山岳協会編
「年報・ヒマラヤ」(1980) 日本ヒマラヤ協会
「ガンガプルナ北西稜事故報告書」明治大学駿台山岳部

▲岳友を求めて

ヒマラヤの雪崩遭難事故

1970年から1981年までの12年間にヒマラヤの6,000m以上の高峰に向った日本人は、408隊で3,476名にものぼり、このうち57隊が遭難事故に遭遇し109名もの人が亡くなっている。

これら驚くべき数の遭難事故を原因別に書き表わしたのが図-11であるが、この図を見るとヒマラヤの遭難事故に於ける雪崩遭難がいかに多いかが窺えられる。即ち、これ迄に61名が雪崩によって死亡しており、その数は遭難死亡者数の半分以上も占めることになるのである。（実際死亡事故につながらない雪崩事故はもっと多いと思われる。）



図－11　原因別死亡状況

また、表2はここ12年間に日本隊がヒマラヤで雪崩に遭遇した登山隊の一覧表である。表中の死亡者数欄を見ると7人、6人、5人など大きな数字が眼につくわけだが、雪崩遭難の場合、その大半が大量死亡事故につながるということも見逃せない特徴の一つである。

ヒマラヤの雪崩

表2の分類で見ると（不明なものも多いが）やはり、何日か悪天が続いた後、大量に降り積った新雪による乾燥雪崩にやられているのが多い。これらの事例を見ると、雪崩に対する「急斜面においては降雪が終ってもせめて一日くらいは待たなければならない。」と云った誰もが認識しているようなルールが、迫り来る雪崩の恐怖感から守られず行動を起して雪崩に流されたり、異常な降雪などによって、ある程度安全を見極めて設営したであろうと思われるテントに居ながら埋没してしまったりしている悲惨な例も見られる。

また、爆風雪崩による大きな被害も見逃せない一つであろう。

普通、我々が雪崩による遭難事故というと、雪崩によって流されたり埋没してしまうことを考えがちであるが、雪崩によって甚大な被害をもたらすのは、実はこの爆風雪崩なのである。

爆風雪崩は、外国ではエアー・ウェーブ（参：雪崩の世界から　新田隆三著）とも呼ばれている軽い雪粉と空気の混合体の流れである。日本でも泡（ほう）とかホウラと呼ばれ、各地に大きな被害をもたらしている。

吉村昭の小説「高熱隊道」にも出てくる黒部志合谷の鉄筋コンクリート造りの宿舎がそっくり600mも離れた対岸の奥鐘西壁に叩きつけられたり、同じように阿曽原の宿舎が忽然と消失してしまったりしたのもこの仕業である。

1978年にユトマル・サールで5名が死亡した遭難事故もこの爆風雪崩であった。

C・1に居た5名が遭難したのだが、消息が途絶えた2日後に現場へ急行した救助隊が目にしたものは、地形は元のままであり、テント場の下流には雪崩のデブリ跡も無く、雪崩になど襲われた形跡が全く無い状態でC・1は跡形も無くなっていたのである。又、テント場の上部50m程の所には大きなデブリが押寄せていたという。

結局、テント場より30m程下方のクレバス内で遺体やテントの残がいが見つかったのである。

この事例から考えるに、テント地を設営する際、古いデブリの痕跡などからデブリの最長到達距離だけを見て、ここまでは来ないだろうとの判断は危険といえよう。

また、これは爆風雪崩に限ったことではないが、雪崩に対する防禦対策として小さな山やクレバスを楯として頼りにしている報告がよくなされているが、これらの防護楯は余り役に立たないことも知るべきであろう。

エアー・ウエーブが爆発的な力を発揮し易い場所の一つとして、ヒマラヤやアルプスなどの広いU字谷が上げられている。これは壁の急峻な斜面を落ちてきたエウー・ウェーブが谷底に来て急にゆるやかになるために爆発するといわれており、前述したユトマル・サールやエベレストA・BCのヌプツェ側から来る雪崩などがその実例であろう。

もう一つヒマラヤの特徴的な雪崩に氷河雪崩がある。氷河雪崩の典型的なものは、ハンギング・グレッシャーの舌端が欠け落ちるものである。氷

おける日本隊の雪崩事故（1970～1981年）

者	分　類	内　　容
		○内数字は現地人死亡・負傷者数
	乾燥雪崩	C・2（5,900m）にいた隊員2名、シェルパ2名の計4名はC・2上部右方のルンゼにルート工作中、上部で雪崩が発生5,950m地点から600m流されて1名死亡。
	乾燥雪崩	10／15午後から天候が崩れ、翌日の夜間にC・2（5,900m）が大雪崩に襲われ、隊員3名とシェルパ3名の計6名死亡。
	乾燥雪崩 〃	C・4から指令を無視して降雪中を行動開始して雪崩に遭遇。5／16から降雪が始まり、遮蔽物のないC・3が危険にさらされたために撤退する途中で雪崩に襲われる。
		C・5（6,300m）入りした3名がキャンプごと雪崩に襲われて埋没。雪崩の発生原因として当地を襲った地震の影響かともいわれている。
		キュンカ・リの偵察中、5,800m附近にて雪崩に襲われ3名死亡。
	乾燥雪崩	C・5（6,900m）で就寝中テントごと80m流されセカンド・サーダーは歩行不能となり装備も流失する。
	爆風雪崩	B・C（4,200m）が大雪崩に襲われ全壊する。L・Oとシェルパ1名が爆風でテントごと吹き飛ばされて負傷。装備・医薬品を紛失する。
	ブロック雪崩	ヌプツェ側からのブロック雪崩にA・BC（6,400m）が襲われ、隊員テント2張、シェルパテント1張が埋没する。
	乾燥雪崩	3／23から始った降雪は3日間続き、25日の深夜C・1（4,500m）が雪崩に襲われ隊員2名、シェルパ3名が死亡する。
		頂上氷壁の基部に設けたC・4（6,850m）が雪崩のため埋没し、頂上攻撃用資材の大半を失なう。
	ブロック雪崩	頂上稜線から東壁を下降中、7,500mの地点で雪庇崩壊による氷塊を頭に受けて死亡。
		C・4予定地へ荷上げの途中に6,900m附近で雪崩にあい2名が重傷。
		C・4（6,450m）からルート工作に向ったまま3隊員が消息を絶つ。6,500mの雪庇の張り出した鋭い尾根から南壁側へ雪崩た跡があった。
	爆風雪崩	C・2（5,240m）で荷上げ用ワイヤー設置工作中、西壁と南西壁を分ける1,000m余りの垂壁上部の懸垂氷河が崩壊して直撃する。
	ブロック雪崩	C・2へのルート工作中、ルンゼ内でブロック雪崩の直撃を受け、1名右腕骨折する。
	乾燥雪崩	C・4（6,800m）を建設してキャンプ入りした3名が夜の10時に雪崩に襲われ、テントを潰されたが大事に至らず。
	乾燥雪崩	2日間の気象停滞のあとC・1へ荷上げに向った3パーティ9名のうち、先頭を登ってたシェルパが雪崩にまきこまれて200m流される。
		大雪崩により5,200mのC・2が壊滅。
		B・C手前の4,000m地点で隊員2名、ポーター1名が埋まる。

表2　ヒマラヤ登山（6,000m以上の山）にお

No.	山名	隊名	事故発生年月日	時刻	パーティ人数	雪崩遭遇者	死亡者	負傷
≪ネパール≫								
1	ダウラギリV（7,618m）	九州大学山岳会	71.10.6	11:40	10	4	1	
2	ガンガプルナ（7,454m）	長野県山岳協会	71.10.16	夜間	10	6	③ 6	
3	アンナプルナI（8,091m）	JAC信濃支部	73.5.18	11:15 14:40	11	5 7	3 2 ①	
4	プタヒウンチュリ（7,246m）	四日市山岳協会	73.10.12	夜間	8	3	① 3	
5	キュンカ・リ（6,979m）	瀬戸水南山岳会	73.10.8	?	5		3	
6	ジャヌー（7,710m）	成城大学岳士鉄人会	74.5.8	23:00	9	4		2
7	アンナプルナS（7,200m）	蒲郡山の会	74.4.4	夜間	8			②
8	エベレスト（8,848m）	日本女子登攀クラブ	75.5.4	夜間	15			
9	ダウラギリI（8,167m）	東京都山岳連盟	75.3.25	夜間	17		③ 5	
10	P 29（7,835m）	兵庫県山岳連盟	75.4.30	20:00	13			
11	ヒマルチュリ（7,893m）	明治大学山岳会	77.5.12	17:30	14		1	
12	チューレン・ヒマール（7,371m）	川崎山岳会	77.4.21		10	3		2
13	ダウラギリI（8,167m）	群馬山岳連盟	78.9.23		18		3	
14	P 29（7,835m）	ツラギの会	78.9.14		10	6	3	
15	ランタン・リルン（7,245m）	大阪市大山岳会	78.10.12	10:30	9	3		1
16	プモリ（7,145m）	広島修道大学	78.5.2	22:00	6			
17	ツクチェ・ピーク（6,920m）	長井山岳会	78.9.20	13:30	6			①
18	ニルギリC（6,940m）	姫路岳友会	79.10.21		11			
19	パタル・ヒウンチュリ（6,337m）	しゃくなげ同人	79.10.9		7		① 3	

		5,000mの地点でルート工作中3隊員が雪崩に遭遇して行方不明
	乾燥雪崩	A・BC(7,300m)からC・4への荷上げに向ったシェルパがA・BCの直ぐ上で表層雪崩にまきこまれ負傷する。
	乾燥雪崩	異常降雪のためC・2(6,750m)で気象停滞していた2隊員がテントごと埋没。
	爆風雪崩	C・2(5,500m)のテントが南壁に起った大雪崩の爆風で吹き飛ばされ、2隊員が新雪に埋められ脳震とうを起す。
	雪板雪崩	頂上直下150mで3名が雪板雪崩に巻き込まれて負傷。
		ブリア氷河に設けたC・2が大雪崩に潰ぶされ荷上げしておいた装備を紛失。
	乾燥雪崩	C・1(4,600m)からB・C(3,700m)に向けて下山中の3隊員が雪崩に流されて1隊員が行方不明となる。
		10／10,3名で5,700m地点より頂上をねらうことになっているが、9日～10日の悪天候の中で消息を絶つ。雪崩に遭遇したのではと考えられる。
	乾燥雪崩	午前2：30にC・2(5,530m)を出発した隊員4名とハイ・ポーター2名は、前日の最高到達点を越えてさらに登高を続けている途中、トップの足元より雪崩が発生。
	乾燥雪崩	C・3(6,000m)の7名が、9／27,18時の交信を最後に消息を絶つ。後日C・3附近が大規模なデブリに覆われてるのが発見された。
	爆風雪崩	C・1がブロック雪崩の爆風で60mも下方へ吹き飛ばされ2名が負傷する。
	ブロック雪崩	C・3からC・4への荷上げに堅雪の斜面をユマールで登り、大トラバースにさしかかったさい突然ブロック雪崩に襲われる。
		C・1～C・2の約70度の雪壁をトラバースしながら固定ロープを張っていた2名が雪崩に襲われ、1名が負傷する。
	爆風雪崩	C・1(5,150m)が大雪崩の爆風に襲われ、C・1にいた3隊員及びポーター2名の全員が死亡する。
		クーロワールの約50m上方から発生した雪崩がC・1(5,500m)を押し流す。
		6隊員がC・2で休養中、大量の雪と氷のブロックに襲われ埋没、全員死亡。
		6,150m附近のセラックが崩壊してルート工作隊員を直撃し、3名死亡、1名骨折。
		C・2からC・1への下降中、4,600m附近で雪崩に襲われ食糧等を紛失。当地を襲ったマグニチュード7の大地震による影響か。
		C・4からC・5へ向っていた2次アック隊員2名は、ホーンバイン・クーロアールの7,900m附近で雪崩に襲われ、1名死亡。

20	ガネッシュⅢ（7,130m）	愛知＝ネパール合同隊	80.10. 9	②		3	
21	カンチェンジュンガ（8,598m）	HAJ	81. 5. 3 8:30	22			①
22	ガンガプルナ（7,454m）	明治大駿台山岳部	81. 9.29 6:15	6	2	2	
23	アンナプルナ（8,091m）	イエティ同人	81. 9.27	12			
≪イ ン ド≫							
1	シックル・ムーン（6,574m）	日印合同	73.10.12	⑦	3		3
2	パンワリ・ドワール（6,663m）	佐久アッセントクラブ	79. 5.16	5			
3	パンワリ・ドワール（6,663m）	九山同人	80. 1.29	9	3	1	
4	ホワイトセール（6,440m）	一ツ橋大学山岳部	81. 9. 9	3		3	
5	ジャオンリ（6,632m）	山岳同人タンネ	81. 9.23 9:10	5	6	①	2
6	ナンダ・カート（6,611m）	HAJ	81. 9.27 夜間	8	7	7	
≪パキスタン・アフガニスタン≫							
1	バインダーブラック（7,285m）	静岡登攀クラブ	74. 7.23 18:37	8			2
2	バツーラⅠ（7,785m）	都庁山岳会	77. 7. 9	12	9	1	6
3	ティリッチ・ミール（7,708m）	福岡登高会	78. 6.28	10	2		1
4	ユトマル・サール（7,330m）	東京志岳会	78. 7.23	9		②	
5	ラトックⅠ（7,145m）	京都カラコルムクラブ	79. 6.21 夕方	10			
6	ゴーカール・サール（6,249m）	白河山岳会	79. 7.28 昼すぎ	15	6	6	
7	ガッシャーブルムⅣ（7,980m）	関西クライマースクラブ	81. 7. 7	5	5	3	1
≪そ の 他≫							
1	レーニン（7,134m）	新潟大学山岳部	74. 7.23	14	9		
2	チョモランマ（8,848m）	日本山岳会	80. 5. 2 17:30	26		1	

表3 ネパール・ヒマラヤにおける日本登山隊の雪崩事故時期別比較（1970～1981年）

年	プレ	ナダレ		ポスト	ナダレ	
		件数	死亡者数		件数	死亡者数
1970	10	0	0	3	0	0
1971	11	0	0	5	2	7③
1972	4	0	0	6	0	0
1973	8	1	5①	5	2	6①
1974	9	2	0	3	0	0
1975	9	3	5③	4	0	0
1976	3	0	0	3	0	0
1977	5	2	1	2	0	0
1978	7	1	0	11	4	6
1979	7	0	0	8	2	3
1980	8	0	0	7	1	3
1981	12	1	0	15	2	2
計	93	10	11	72	13	27

○印数字は現地人死亡者数

河雪崩は氷河の流下に伴って押し出されるものであるから、降雪がなくとも、日射や気温上昇がなくとも落ちるときは自然に落下するので予測は極めて難しいものとなり、大きな犠牲が強いられている。

雪崩と降水量

昨今は、ヒマラヤも冬期登山の時代へと突入し、より厳しい自然条件下での登山を実践しようと苛酷な闘いが展開されている。こうした時代到来の中で登山時期について云々と述べることは、いささか時代に逆行するようで恐縮であるが、ヒマラヤの登山時期と雪崩遭難事故の相関についてみてみよう。

これまでは、モンスーンの影響を受けるネパールやガルワール・ヒマラヤなどでは登山時期をプレ・モンスーンにするかポスト・モンスーンにするかが真剣に検討されてきた。（最近は、ヒマラヤへの登山隊数急増のため目標とする山が空いているかどうかで時期を決めざるを得ないようであるが。）

表3は、1970年から81年までの12年間にネパール・ヒマラヤへ出かけた日本隊を登山時期別に分けて雪崩事故の頻度を比較したものである。これで見ると、プレの登山隊数は93隊とポストの72隊を大きく引き離しているものの、雪崩事故の発生件数は逆転してポストの方が13隊27名と多く、死亡者数に致っては倍以上にも達っしているのである。プレの10％に対してポストは18％の割で登山隊は雪崩に遭遇していると云うこの実態は何を物語っているのであろうか。

ネパール・ヒマラヤの場合、モンスーン中に大量の雪がもたらされるのは周知の通りである。

雪崩事故の場合、日本の統計を見ると積雪量が多い年には事故件数も多くなっており、上述したデーターから、この雪崩と降水量の関係がヒマラヤでも通用しそうとは考えられないであろうか。

即ち、ポストの場合、プレに比べて雪崩に遭遇する危険率が高いということをまず念頭において周到なるルート検討及び雪崩対策が必要になるのではないだろうか。

ヒマラヤ登山遭難と捜索隊派遣を考える

山森欣一

ヒマラヤ登山で遭難事故が発生し、行方不明になった場合、通常は国内で捜索隊を編成して捜索に向かうことはない。日本の山では、何年かかっても捜索活動を継続しているが、ヒマラヤではどうして？、何故行かないの？との質問を浴びせられる。

何故だろうか。考えられることは、

①遺体の場所が不明である。
②遺体の場所が判明していても、地形等により到達するのが不可能
③二重遭難の可能性が大きい
④捜索隊を編成するメンバーがいない
⑤捜索隊を派遣する資金がない
⑥捜索隊を組織し派遣する装備期間がない
⑦命は自分持ち

幾つかの要件を考えてみると、一番大きなことは、捜索隊に参加してくれるメンバーが集まらない（多分に参加するには個人負担金を払って参加）ということではないだろうか。

今回の捜索隊派遣が可能だった背景をみても

①冬期エベレスト計画の準備中であった。
②このメンバーが参加を快く引き受けてくれた。
③物資その他も手配中であった
④協会と家族が資金を負担してくれた
⑤インドとのつながりが強く、捜索許可・ビザ取得の面でスピーディに便宜を計ってもらえた

等の条件が揃ったことによって、はじめて可能となったのである。

しかし、例え、このような条件に支えられたとしても、その捜索隊の中核となるメンバーの、しっかりとした考えが浸透していなければ、捜索そのものの中味が問われたり、対家族へのジェスチャーと受け取られたり、最悪の場合は二重遭難となる場合も想定される。

今後のヒマラヤ遭難に於る捜索隊の派遣についても、以上のようなことを考えると、これが一般的な形として定着して行くとは考えにくく、やはり今回の捜索隊派遣は異例のケースと考えるのが妥当ではないだろうか。

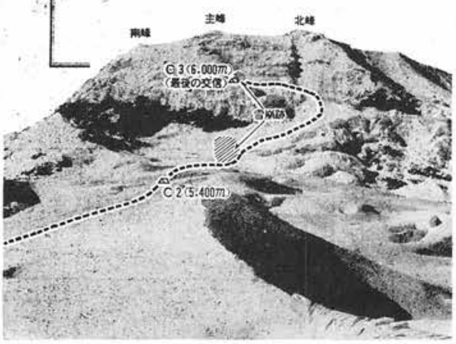
月13日（木曜日）　夕刊　読売新聞　（第三種郵便物認可）

ナンダ・カートで何が起きた

ヒマラヤ登山学校遭難

7人の岳友はどこに

二十人に一人が死亡するという、史上最悪の数字を記録した昨年の日本隊のヒマラヤ遭難。その多くが遺体の確認もできず、事故原因の詳細も不明のまま年を越した。中でも、ナンダ・カート峰（六、六一一ﾒｰﾄﾙ）に挑み、隊長だけを残して七人がこつ然と姿を消してしまった日本ヒマラヤ協会（HAJ）隊。いったい何が起きたのか――異例の大捜索を組んだ十一人の仲間たちの行動を追って、ヒマラヤ遭難その後を報告する。（江本 嘉伸記者）



ナンダ・カート。ここで7人は姿を消した（捜索隊撮影、テントの位置は推定）

異例の大捜索

標高6千、恐怖のドカ雪

遺品もみつからず

ゾンデ必死に突いては抜く

広い雪田を、二・五ﾒｰﾄﾙほどのゾンデ（鉄の棒）で必死に突いては抜き、突いては抜く動作を繰り返す男たち。六千ﾒｰﾄﾙの高地に呼吸は乱れがちだが、一瞬一瞬に「もしや――」の期待をかけているのが、表情からうかがえる。

東京・高田馬場駅に近いビルの五階にある日本ヒマラヤ協会の事務所。撮ってきた一時間二十分に及ぶ八ミリフィルムを回しながら、菊地敏之さん（三五）が語った。

「午後になるとバテてくるんです。でも、棒の先に硬いものが当たるたびに、"テントじゃないか"って、あたりを懸命に掘り返す。結局氷の層しか出てこないのですが……」

◇ ◇

遭難は昨年九月二十八日に起きた。第一キャンプの小島（おじま）守夫隊長が、この定時通信（午前七時半）呼びかけに、第三キャンプにいるはずの七人からまったく応答がない。前夜「天候は非常に悪く、動けない」という報告をしたのが最後で、七人の行方はようとして知れなかった。

「HAJヒマラヤ登山学校ナンダ・カート一九八一」というのが、遭難隊の正しい名前である。小島隊長と、ヒマラヤ四度目の森和男さん（三二）を指導役に、比較的経験の浅い六人の隊員を募って編成した同協会の"ヒマラヤ学校"。その「学校」の七人が、帰らない。隊長がテープに吹き込んだ肉声の"緊急報告"がメール・ランナーの手でデリーに届き、十月三日、協会にもたらされた。

◇ ◇

ヒマラヤでは普通、二重遭難の危険や経費負担を考えて、捜索活動をしない。それに、この冬同協会は、これまでどこの隊も成功していない「エベレスト西稜（りょう）冬季登山」許可をネパール政府から得て、菊地さんを隊長に準備を進めていた。しかし、「ヒマラヤ登山の指導的役割を自負し、無事故を誇っていたうちの隊が――」（山森欣二・同協会事務局長）という思いが、エベレストを棒に振っての異例の大捜索に踏み切らせた。

十月末、捜索隊デリー集結。日本から八人、ネパールで登山中の仲間を含め総勢十一人。八人までが冬季エベレスト隊の予定メンバー。

C3付近を必死で捜索する仲間たち

キャンプ地点一面の雪原に

十一月二日、ピンダリ川右岸標高三千七百ﾒｰﾄﾙの放牧地にベースキャンプを張る。激しい降雪で、翌日テント一張りがつぶされた。氷点下二十度を超える寒さの中でラッセルを続け、七人が消えた問題の第三キャンプ（C3）地点にたどり着いたのが同十六日。

「がく然とした。サッカー場なんてものではない、その何倍もの雪原と化していた」。藤森さんの高校時代からのザイル・パートナーだった尾形好雄さん（三三）の話だ。

急しゅんな尾根や、壁のルートと違って、一見どこからも登れそうな、なだらかな山容。それがドカ雪に見舞われると、雪崩やヒドン・クレバス（雪で隠された氷の裂け目）などたちまち一歩も踏み出せないような危険な[illegible]と化す。尾形さんらの見た雪原はまさにそれだった。

回収はロープ、赤旗数本だけ

広い雪原を、用意した鉄棒やスコップで「じゅうたん爆撃的に」捜す。捜索は極端に遅い。二回にわたる大量の降雪が、捜索をさらに困難にした。

十一月末まで二週間近い必死の作業にもかかわらず、回収できたのは固定ロープと、赤旗数本だけ。遺体も遺品も見つからなかった。

「神々の寝所に召されし 七名の日本人勇者 此処に眠る」ナンダ・カートを正面に見すえるベースキャンプ下の大岩にこう刻みこみ、捜索隊は山を下りた。

捜索に要した経費は千二百万円。うち九百万円を家族たちが均等に負担した。「捜索隊に託す家族の気持ちは、遭難者家族の目となり、手足となって現場の状況を確かめ報告いただけることによって、心の整理をしたいところにある」という同意書が家族から出ていた。

沈痛な表情で捜索の模様を語る菊地さん（右）、左は山森さん

◇ ◇

捜索を終えて、山森事務局長は「遭難の原因は、インド洋上に発生した強大な低気圧による大量の降雪」と分析している。同じ九月二十七日前後、ネパール・ヒマラヤのガンガプルナ（日本隊二人死亡）でも、アンナプルナ（フランス隊四人死亡）でも、同じ気象状態から雪崩遭難が起きていることが、それを裏付けている。

やさしさの中に落とし穴が

だが、どうしたらそれを避けられただろう。ただ一人の帰還者・小島隊長（今回は日本に待機）に、最後に聞いた。

「何よりも、ヒマラヤの大きさをつかんでいなかったこと。具体的には、たとえばあの日、七人のうち四人は第二キャンプへ下りかけてホワイトアウト（濃い霧などで前後左右、天地さえもわからなくなる現象）にあい、第三キャンプに戻っている。あまりにもだだっ広い雪原で動けなくなることがあるんですね」

やさしく見える山にこそ、落とし穴がある。そのことをナンダ・カートは教えた。

INE... ING FOUNDATION

C/o. Ministry of Defence
18, "Q" Block,
New Delhi-110 011.

No.1071-IMF/80.

June 19, 1980.

Dear Mr. Matsumoto,

Thank you for your letter of June 7, 1980.

Peaks Nanda Kot (6861 mts) and Changuch (6322 mts) in Garhwal Himalaya are not available, as these peaks are located in the protected area. However, peak Nanda Khat (6611 mts) near Panwali Dowar peak in Garhwal Himalaya was booked for your Expedition for September-October 1981, as desired by M/s. Shikhar Travels. If you are interested to climb this peak, kindly let us know immediately and also send two copies of the route chart for further action.

Yours sincerely,

Munshi Ram

(Munshi Ram)
for Secy. IMF.

I・M・Fからの手紙

第Ⅴ部

追　　悼

追悼のことば	柴田金之助	93
今は亡き７人の岳友へ	小島守夫	94
モンスターの歩み	尾形好雄	95
陽一　お前は今どこに	鈴木重子	98
追　悼	加藤幸男	99
「阿部ちゃん」を偲ぶ	佐野義勝	100
想い出よ さようなら	市原　優	102
兄　荘八を偲んで	本田良雄	103
本田君の思い出	石井清一	104
我が子正則の死を悼んで	埜口四郎	106
友　埜口君よ	平家啓作	107
寺本くんは　いま	石田文男	108
わが生涯のザイル・パートナーに	氏家　章	110

追悼のことば

日本ヒマラヤ協会
会長　柴田金之助

10月3日　ナンダ・カート登山学校隊より悲報を受けてから早くも2ヶ月余りが経過し、本日ここに追悼会を開催する運びとなりました。

年末を迎えて御多忙のところ御家族および関係の皆様の御参会を得ることができましたことについて厚く御礼申しあげます。

事故発生の報を受けてから本協会としましては対策本部を中心にしまして会を挙げて全力を尽して今日まで進めてきました。この間、御家族の皆様及び関係各位におかれましては深い悲しみの中で積極的に御協力下さいましたこと哀心より御礼申しあげます。特に今回の隊員が全国各地に分布することから充分な意思疎通に欠けることがあったにもかかわらず深い御理解をいただけたこと本当にありがたく存ずる次第であります。

また、私たちの要請にこたえてひじょうに好意的な御支援を下さいましたインド登山財団総裁サリーン氏をはじめとするインド側関係各位に深甚の感謝を申しあげる次第であります。

10月下旬に派遣しましたナンダ・カート捜索隊は12月上旬、その任務を終えて無事帰国いたしました。既に冬を迎えたヒマラヤにおける捜索活動は困難を極めたわけでありますが、その中で隊員は全力を尽して時には自分の身を危険にさらしながら捜索に従事したことを御理解いただければ幸いであります。

結果的には遺体を発見することも、決定的な証明を得ることもできませんでした。そして、まことに無念の極みでありますが、万般の事について検討した結果7名の隊員の生存は全く断念せざるを得ません。神々が住むというヒマラヤの奥深く永遠の眠りについた7名の御霊の安かれと祈るのみであります。

本会といたしましては、この事故の社会的責任を深く認識いたし、また、御家族の皆様の深いお気持に想いをいたし、今後再びこのような事故を起こさないために可能な限りの努力をすることをお誓いいたします。

すなわち事故の直接的原因の究明はもとより、よってきたった間接的、潜在的要因を含めた総合的な検討を行ない、我国登山界に何らかの寄与をすることが我々の責務であると存じます。

御家族の皆様には貴い肉親を失われまして、まことに痛恨の極みであります。これからの人生においていかばかりの重荷かと哀心より拝察申しあげます。どうぞ、世の荒波に屈することなく力強く生きて行かれますことをお祈り申しあげます。

私たちもこの事故において得ました教訓を厳しく生かして進むことが7人の御霊にこたえる道であると確信いたします。

ナンダ・カートの雪に眠る御霊は、やがて山を下り、なつかしのベースキャンプを過ぎてアラクナンダの河に入ることでしよう。

そして、聖なる河ガンジスに合して、信仰厚いヒンズーの人々がささげる熱帯の花とともにインド洋に入り、母国に帰るものと信じます。

今は、現世の苦楽を超越して安らかに天上にまします7人のたましいの御めい福を深く祈念いたしまして追悼の言葉といたします。

（昭和56年12月20日、追悼会における献辞から）

今は亡き７人の岳友へ

隊長　小　島　守　夫

藤倉君を除く６名のメンバーとの初顔合せは81年３月７日、８日の第１回ミーティングでした。

日本ヒマラヤ協会の事務所において、インド隊の記録や写真等を見ながらルートをたどり、早くもナンダ・カートへ夢を馳せたのも、つい先日のような気がしてなりません。

広域チームではありましたが、各々が自分の役割をきちんと果してくれました。

1.2 ケ月はまたたく間に過ぎてしまい、５月の富士合宿を迎えることになりました。

集合場所の佐藤小屋にはすでに殆んどのメンバーが集まっていました。

結局この時のメンバー、私を含めた７名に、カンチェンジュンガ登頂後、ネパールから駆けつけてくれた藤倉を加えた８名が、今回の登山隊のメンバーだったのです。

富士山では、濃いガスと強風にたたられ、予定の訓練は消化できませんでしたが、初めての山行でお互いに気心を知ることが出来ました。

下山後、山中湖畔の富士青少年センターで行ったミーティングは本当に熱の入ったものでした。

そしてまた、暑い盛りの協会事務所での梱包作業へと、皆んなにとってヒマラヤとは何だったのだろう。

９月27日、午後６時Ｃ３の藤倉副隊長からの「天候にもよりますが、明日は当初の予定通り、藤倉、寺本、鈴木が頂上アタック、残りの４名はＣ２り下降ということで行きたいと思います。それでは明朝の交信まで、ナマステ」という交信を最後に、28日朝７時の私の呼び掛けに誰も応じてくれませんでした。

この間に何が起ったというのでしょうか。

先発隊の藤倉副隊長は、81年プレのＨＡＪカンチェンジュガ隊で“モンスター”の愛称で親しまれていた当代屈指のクライマーで、寺本隊員はヌン峰登頂などの豊富なヒマラヤ経験を生かし、先発隊として、現地での渉外活動やルート工作にフル回転の活躍でした。キャラバンでは、１thinkso を連発し、ヒマラヤは厳しいや、と云いながら荷上げに出掛けていった阿部隊員。キャラバン途中の草原で、野イチゴを摘んでいた斎藤隊員。インドに入った日の昼食に全然手をつけず心配したが、元気で頑張っていた本田隊員。キャラバン最後の村、カティで沢山手紙を書き皆にひやかされていた埜口隊員。子供達に好かれ、すばらしい写真をものにし、又若さにもの云わせて先発の２人と一緒にルートの先端で頑張っていた鈴木隊員。何かの間違いであってくれればいい、必ず帰って来ると信じて待った。ＢＣでの１週間でした。しかし、あのヒマラヤの大自然の前に何らなす術もなく、雪深きナンダ・カートに君達を残して、ベースキャンプをはなれなければならなかった私は、自責の念と敗北感に打ちひしがれ、無念さをかみしめて、ひとり歩いた帰りのキャラバンでした。

君達にとってヒマラヤは何んだったのか、その解答を聞かせずに逝ってしまった。もっともっといろんなことを知りたかったのに。

それでも各々が自分のヒマラヤの幾分なりかをナンダ・カートにおいて昇華させたことを信じ、更に、この教訓を次代を担うヒマラヤニスト諸兄のために役立てることをお誓いし、ここに心からご冥福をお祈りいたします。

藤 倉 和 美

モンスターの歩み

雪と岩の会
尾 形 好 雄

昭和40年6月、小さな眼の美しい一年生が部室の扉を叩いた。藤倉との邂逅であった。

彼の本格的な登山の萌芽は、この県立福島工業高校に入学して山岳部へ入部した時から始まったと云える。

福島盆地の信達平野の中ほどに海抜273 m程の信夫山と云う小さな山が在り、彼は、この山の麓で生まれた。

彼は、幼少の頃からかなり腕白だったようで、この裏山を遊び場としていろいろな遊びをしていたようである。この頃からすでに野外彷徨型の性格が培われたのであろう。高校に入って山岳部に入部するや憑かれたように山々を彷徨するようになっていった。

在学中の頃の彼は、身体も小さく1尺8寸のキスリングを背負わせると足がちょっと出るくらいの可愛いものであった。後年、彼が「モンスター」の異名を取るような面影はなかった。然し、山椒の例えでは無いが、内に秘めたる活力は素晴らしいものを持っており、人一倍負けん気の強い性格は小さな身体をものともせず日増しに逞しい体力を築き上げていった。

高校3年になって主将に就任した頃から彼は身心共に大きく成長した。彼はこの一年でたしか10 cm 位身長が伸びたと記憶している。一方、高校山岳部でありながら代々顧問の先生に恵まれず、指導を仰ぐ機会の乏しい中にあって、良くクラブをまとめ上げ自ら指導する立場に立って引率していった。

高校3年間で吾妻、安達太良山のホームグランドはもとより飯豊、朝日、南会津など東北の山々を隈無く跋渉して高校時代の山歩きを終える。

高校で機械科を専攻した彼は、卒業と同時に埼玉の鴻巣に在る協和化工に入社した。彼としては東京方面に就職すればいろんな山へ出かけられるだろうとの思惑があったのであろう。

上埼して間も無く私が所属していた雪と岩の会へ彼も入会してきた。

就職して自分のお金が得られるようになって社会人山岳会に入会した彼は水を得た魚の様になって山に狂いだし毎週のように出かけるようになった。こうした山への精進に依って彼の体力・技術には一層の磨きがかかっていった。そして彼もまた山ヤのお決まりコースの如く、夏から冬への岩壁登攀を実践する中でヒマラヤの高峰登山の夢が芽ばえていった。

入会して4年目の昭和47年、当会初のヒマラヤ登山の計画が持ち上った。勿論、彼は即座にこの夢を自分のものとして準備に取りかかっていった。

準備に費やした2年の歳月は瞬く間に過ぎ去り49年2月、たった4人の遠征隊は、ネパール・ヒマラヤのツクチェ・ピーク（6,920 m）へと出発した。本隊が出発する20日前に彼は単身、先発として現地入りした。初めての海外で、どちらかと云うと語学も不得意な彼であったが、持ち前のバイタリティーで全ての先発業務を1人で消化して本隊を受入れて呉れた。

初めてのヒマラヤ遠征と云う事で国内では随分と嚇かされて出かけたものの難無く全員で頂上を極める事が出来、さらには2つの周辺峰の登頂、ビドンバレーの踏査、アンナプルナ北面、ランタン谷のトレッキングなど幅広く歩いて第1回のヒマラヤ遠征は終わった。

この第1回のヒマラヤ行は、どちらかと云うと出ることに主眼が置かれ山が二次的になったこともあって次なる夢の萌芽までに時間はかからなかった。

昭和51年の秋、ネパールのナショナルチームとしてネパール警察隊に依るツクチェ・ピーク登山計画がたてられた時、ネパール警察よりツクチェ

ピークのアドヴァイザー・コーチを1名派遣してくれるように日本山岳協会に要請があった。

この要請を受けて彼は51年の8月、カトマンズへ赴いた。約1週間程、いろいろなアドヴァイスのため滞在した後、帰国したのだが、其の后、この登山隊が成功した事もあって、彼は、グルー（先生）としてカトマンズのポリス・ヘッド・クォーターでは信望を集めた。

この頃には、当会の第二回ヒマラヤ遠征の計画も燃焼しだし、当然乍ら彼もその中心メンバーとして活躍していた。ツクチェの時、余程悔しい思いがしたのであろう、彼は、ダウラギリI峰へ行きたがっていた。然し、許可等種々の問題があって山はヒマルチュリ（7,893 m）に落ち着いた。

彼は出発の半年前に勤め先を辞め、なかば専従的にこの遠征準備に没頭していった。この遠征でも彼は先発として現地に赴き、一切のエージェントを使わず通関等の先発業務を大変苦労しながらも全てクリアーした。とても常人では考えられないような苦労を味わいながらも、登攀活動に入るや常に最前線でルートを切開き、そして第一次アタック隊を引き連れて16年振りに主峰登頂の第二登を果したのである。15時間に及ぶC・5からのロング・ランの中、疲労困憊したカメラードを抱えながら無事C・5に帰着出来たのは、彼の強靱な体力と精神力の御陰であった。

こうした余力を残しての登頂で自信をつけた彼の心の中には、6,000 m峰，7,000 m峰と歩んできた過程から当然のことながら次なる目標として8,000 m峰が描かれるようになった。

ヒマルチュリ西峰登頂を巡ってペナルティ問題が生じ、ネパール・ヒマラヤから締め出されたこともあって第3回の遠征はカラコルムの8,000 m峰が上げられた。中でもアプローチ、費用等の面からナンガ・パルバット（8,125 m）が上げられた。

然し乍ら、計画が具体化しだした矢先、国内での遭難事故に依り隊員予定のカメラードを失ってしまいこの計画も断念せざるを得なくなったのである。結局、ヒマラヤの高峰登山を目指してから8,000 mの巨峰へと10年もの間、情熱を継続することが出来たのは親愛なる彼だけとなってしまったのであった。

▲1981年3月　カンチェンジュンガ BCにて

HAJのカンチェンジュンガ縦走と云う一大プロジェクトがある事を耳にしたのはヒマルチュリへ出かける前であった。

ヒマルチュリの後も何度か誘いの話はあったがなんとかクラブ独自で8,000 m峰をと云う願いが強かった事もあって辞退していたのだが、彼には大きな遠征の中でいろんな人達と関り、自分の持てる力を充分に発揮出来るような遠征を経験してみてはと参画を勧め、彼はそれに応じた。

ポスト・カンチにカラコルムで合流と云うプランも流れてしまった後、私もカンチ縦走に夢を馳せてHAJ隊に参画することになった。

ヤルンカンからカンチ主峰へと云う8,500 mラインの大縦走に彼は激しく燃え、自分に厳しいトレーニングを課した。己れに厳しく徹底的に鍛え

上げた素晴らしい基礎体力は他人の追従を許さず、「モンスター」の異名を取るようになった。

最終段階の縦走隊メンバーの選考の際、私は、縦走隊々長として彼をパートナーに選んだ。然し2パーティによる交差縦走と云う縦走型態の変更によって彼とのペアは許されず、彼は主峰隊側にまわった。56年5月9日、カンチとヤルンカンの頂で彼との交信を交すなかで、いつもの彼らしくなく縦走に対する絶望の念を淡々と伝えてきた。いつもは彼の猪突猛進的な行動を制動するのが私であったのがあの時は逆転していた。

共に縦走の夢破れ、頂きで対峙しながら涙してカンチ遠征は終った。

"燃え残しのカンチ"と国旗にサインして彼は海へ出かけた。「一つの大きな山が終った後は、海が良い」と常々語っていた彼は、カンチの後、スリランカに渡った。4ケ月近くの氷雪の世界での闘いで疲れた心身を休め、秋の登山へと英気を養ったのであろう。

HAJではカンチが終った後、ポスト・カンチの計画として厳冬期のエベレスト西稜登山が持ち上がり、一足先に帰国した者によって着々と準備が進められていた。彼は、ナンダ・カートの登山が終り次第、カトマンズへ戻って現地準備に携わる予定でおり、スリランカやデリーなどから何度も熱い便りが寄せられた。

9月8日、デリーでの先発業務を全てクリアーして明日、デリーを出発して山へ向いますとの国際電話が入った。彼の元気な声の最後であった…

高校山岳部から17年間もの長きにわたって 国内の山々からヒマラヤの高峰へと共に跋渉してきた岳友(とも)が今は居ない。

幾多の山行の中から培われたお互いの太い絆は一生涯絶ち切れるものではないと信じて疑わず、次から次へとヒマラヤの高峰へと夢を馳せてきた真のカメラードが、恰も青天の霹靂のように忽然と自分の前から消え去ってしまった。

ポッカリとあいた心の穴は、埋めるにも埋められず、己れが魂は糸の切れた風船の如く虚空を彷徨(さまよ)う。

呼べど戻らぬ彼の御霊は、最早、ヒマラヤのジャイアンツよりももっと高い所を登高していることであろう。

藤倉よ、長い間、ほんとうに御苦労様。
もう登ることも無く一息ついて、雲上のカルカでやすらかに休んで呉れ！

さようなら

鈴木陽一

陽一　お前は今どこに……

母．　鈴木重子

昭和28年7月4日生　鈴木陽一　現住所
相模原市文京上原団地　3号棟　208号

小さい時名前をきかれると、僕は太陽の陽一だ、太陽の陽一だ、と誰れにでもほこらしげに答えていたお前、生れた時は4,000ｇもあったっけ……。すくすくと病気一つしないで成長したお前、無事に帰国して居れば、今頃結婚式を上げていたかも知れないお前。

そのお前が、インドヒマラヤ　ナンダ・カート峰で遭難死、したのだと云ふ……。

行方不明の知らせを受けて上京し、協会側からの色々の説明を聞きながら、頑張れ、頑張れ、生きるんだ、生きて帰るんだ、たとえ手足がなくとも良い、生きてだけ来てくれ、と祈りつづけていたあの時……。あれからもう5ヶ月になろうとしている。だがお前は、とうとう帰らなかった。こんなに待っている母、家族、フィアンセを残しお前は、とうとう今日も帰らない。陽一の現住所相模原に行く。小田急の相模大野で電車を下りる……。

毎日陽一が朝早く、そして夜おそく、会社に通ったであろうこの道、もくもくと歩いた。

毎日、何を考え、何を思って通ったであろうこの道……涙がとめどなく流れる。泣きながら歩いた。通りすぎる人が振り返って見る。〝上を向いて歩こう涙がこぼれない様に〟の唄が頭をかすめる。上を向いて見た。だが涙がどんどん頬をつたわって流れて来た。

××××××××××

きちんと片付いた部屋、まず山の道具が目につく。私は名前も知らない。本箱には山の本がぎっしり、カベには「ヒマラヤ」や山の写真や地図がはりめぐらっていた。20冊位のアルバム 全部山行の写真、記録、それに真新らしい赤いアルバムが3冊……。それは今度の写真をはるべく買って用意したのに違いない。それが涙をさそった。

主のいない部屋で私は泣いた。大きな声で名前を呼びながら、部屋中をなでさすりながら、私は思ふ存分泣きじゃくった。こんな思ひをするならどうしてきつく止めなかったのだろう。

〝独身最后だよ　あと大きな山には行かないから……。〟と軽く笑っていたお前の顔。私は今も昨日の事の様に思えて忘れられない。

インド・ヒマラヤってどこにあるんだろう。私は、どこにあるかも知らない。遠いナンダ・カートのC3　6,000ｍの地点だと云ふ。今すぐにも、とんで行きたい。鳥だったら、翼があったら……。陽一、一人っきりでなくて良かったね、7人一緒だもの淋しくないでせう。それに、将棋仲間の本田さんもいる事だし、いつまでも仲良く、静かにねむっておくれね。陽一、でもお母さんは、お前のねむっている彼の地に、いつかいつの日にか、かならず行って見たい。そしてこの目で山の姿をながめ、彼等が歩いたであろう道を、この足で一歩一歩、歩いて見たい。その空気も吸って見たい。山に向って大きな声でお前の名前を呼びたい。

××××××××××

〝お母さん　これっきりだよ〟と陽一、それでは兄さんにもらって行かなくては、と私　うすよごれた雪の中から顔だけが出ていた。が次の瞬間、スノーボートに乗せられた陽一の顔が、長男の博の顔と重なり合ってうつった。私は其の姿にしがみつき、大声で泣いていた。そしてフト、目がさめた。あっ　今日は何日だろう　と思った。去年の9月30日 夜もしらじらと明け始めた　朝がただった。陽一お前は、ほんとうの頑張りヤだった。だから、30日の朝がたまで頑張って生きて居たんだなあ　と私は信じたい。いや信じています。

××××××××××

陽一のすべてが終った今、残っているのは淋し

さ、悲しさ、心の中にポッカリと穴のあいたような詫びしさだけです。

世の中にある悲しさを現わす形容詞のすべてを味わった、切ない母の胸には今も尚お前の事ばかりです。

上野駅にて

山形に帰る車中、私のなゝめ向側に座っていた赤ちゃん連れの若夫婦がいた。あゝ陽一にもこう云ふあたゝかい家庭の味を味わせたかった……と。

新宿にて

こんなに大勢の人達が居るのに、どうして陽一だけがいないのだろう、とさがし始めたりした。

原宿にて（去年の12月20日）

テレビや話で聞いていた竹ノ子族だか何んだか知らないが、若者達が大勢輪になって踊りまくっていた。しばらくは呆然としてながめていた。

私はその事が良いか悪いかは知らないが、こんなになっても良い、生きてさえ居てくれたら、と涙でかすんで見えなくなった。

今日2月14日はバレンタインデーとか、家の今度2年生になる女の孫が、陽一オジチャンにとチョコレートを仏様の陽一の写真の前に供えてくれた。今度3才になる男の孫は、私が泣いていると〝陽一オジチャン今日お天気が良いから山から帰ってくるよ〟と云ふ、ほんとうにやさしい孫達私は子供達、孫達の前ではもう泣くまい、と心にちかった。

色々と書きならべたが、生きて行くうえに笑ふ、心から笑えると云ふ事が、どんなに素晴らしい事であるかをつくづく思われる、今日この頃です。

最后になりましたが、陽一が生前お世話になった会社の方達、会社の山岳部の方達、ヒマラヤ協会の方達、ほんとうに有難うございました。厚く御礼申上げます。それから同じ立場に立たされた6人の隊員の遺族の皆様、彼等はナンダの寝所に召されたんです。

そう思って、悲しみを乗りこえて頑張りましょう。

今夜もすばらしい星空です。この空も、インド・ヒマラヤまで続いているんだナァと心がしめつけられます。出来る事なら、せめて、せめて、布団だけでもかけてやりたかった。切ない親のこの悲しみ、陽一　お前にきこえますか、この叫びが…

この切ない母の気持、とどいておくれ。インド・ヒマラヤの彼達のねむっているナンダ・カートまで。そして、そのねむりをさましてほしい。

鈴木陽一

追　悼

日本電気 横浜山岳部
加藤幸男

最初に遭難の知らせを聞いた時は何かの間違いであり、その後毎日のように開催された現地状況の報告会においても、まさか彼が遭難するなんて、遭難しても必ず生きて帰ると確信していた。

しかし、彼のお母さんが9月30日未明、スノーボートに乗せられて山からおろされている夢を見られ、また同じ日の同時刻にやはり彼の弟さんが愛用している鏡が何もしないのに落ちて割れてしまったことを聞き、私はその時初めて、彼は肉親への思いを残しながら霊界へ旅立って行ったのだなあーという思いをしたのである。彼は昭和47年に入社、その1年後に山岳部に入部した。それと同時に毎年の冬山合宿にも積極的に参加し、年間山行日数は平均55日以上を数え、最高は昭和54年度の72日である。そして常に第1線で 活躍して多くの部員をリードしていた。

さらに遭難対策、安全対策も積極的に推進し、「オール日電山岳部合同遭難対策申し合せ事項」の制定にも尽力してくれた。

これら活動の集大成として本田荘八君と一緒に今回のヒマラヤに参加したものである。出発前有志で行なった壮行会の時には「気を付けて行って来ます」と言っていたのに、このような結果になり誠に残念であり、ご家族の気持ちを思うとお慰め

▲ 1981年5月　八ケ岳にて 右が鈴木陽一　左は本田荘八

の言葉すら見当らない心境である。

また、約2ヶ月間に及ぶ必死の捜索にもかかわらず何んの具体的な成果もなく、ただ山頂附近を7羽の白い鳥が飛んでいたということであり、捜索の人々に最後の別れを告げて遠い世界へ旅立って行ったのである。ただ7人の御霊よ、心安らかなれと祈るのみである。

阿　部　直　彦

「阿部ちゃん」を偲ぶ

京橋郵便局
佐　野　義　勝

「幼い時から山遊びの好きな子でした……」

合同追悼会出席のため大分県竹田市から上京したお父さんの言葉である。山に魅せられ山を愛し、そして散った好漢阿部直彦君。多くの友人や仲間から「あべちゃん」の愛称で親しまれ独特の人なつこい笑顔でそれに応えていた彼。念願のヒマラヤ登山を実現し大きな期待を胸に成田を発った彼。日頃の鍛練はもとよりこのヒマラヤ登山に向けて1年前から綿密な計画をたて体力づくりに励み万全の態勢で臨んだ彼であったがヒマラヤの大自然は容赦なかった。悲報に接して早くも半歳が過ぎた今私は生前の彼の人柄を偲び永く追悼文としてとどめることとした。

昭和42年東京中央郵便局から京橋郵便局へ転勤してきた彼は間もなく組合の執行委員に選ばれた。いかにも野性的で男臭い強烈な個性は当時はまだ21才という若さで、恵まれた頑強な身体は彼をじっとさせてはおかなかった。そのエネルギッシュな行動は山と海へ向けられ、多忙な組合活動の合い間をぬって展開していた。とりわけ本格的な登山活動は高校時代からやっているというだけあってなかなかのものらしく、その実力のほどは山にうとい私にも容易に察せられた。「こぶし山の会」に所属する彼は、会の中心メンバーとして登山に励むかたわら職場の仲間とは釣りに興じるという多忙な日々を送っていた。山の話しもさることながら、時には太公望となっての釣りの話など文字通り山と海のかけもちで特徴ある大きな目をよりまるくしてその話術を披露し聞き入る人々を魅了した。持前のジョークと毒舌で笑いをふ

りまき仕事の疲れを癒やしてくれた彼は、その容貌からお世辞にも知性派とは言い難かったが身についた教養は日頃の語らいの中で随所にみられた。多くの仲間達がプロ野球の話しに没頭したり、一部の人間がギャンブルの話などしているのを傍らで聞いていて「そんな話ばかりしていると韓国に攻めてこられて日本は滅びるぞ」などと冗談混じりの厳しい批判も忘れなかった。もう2年も前のことになるだろうか彼のユーモラスな一面をみせた思い出の一つにこんなこともあった。日頃自慢の自宅裏の雑木林で、他の人にとられまいと栗の木をゆすっていくつか落としていたまではよかったが、もう落ちてこないだろうと、ふと顔を上げたところもろに落ちそこないのひとつが彼の目玉に直撃をみまったからたまらない、栗のいががささって目をまっかにはらしてしまった。治療を施こした医者いわく、「私はこの仕事をはじめて30年になるがあなたが2人目です」。この話を聞いた職場の仲間は抱腹絶倒し「いかにも、あべちゃんらしいや」と言ったものである。ここで、彼と同じ横浜に居住し仲の良かった友人N君の話を二つ三つとり上げてみたい。

『阿部君の釣り好きは有名だったが、何度か一緒に行った黒鯛釣りは彼が最も夢中になった釣りと言えるだろう。少しの風にも荒れやすい磯。竿と糸をコントロールしながら、研ぎすまされた神経でウキの動きを追う彼の姿に鍛えられた抜群の忍耐力、集中力をかいま見たのである。「通い続けて1年目に1匹だよ」と冗談で言うと、1ヶ月2回位のペースで通い始め、1年後にみごと体長45センチ、15キロの黒鯛を釣り上げたのである。その時の喜びようは大変なもので1週間位魚拓を眺めてニヤニヤしていたものである。
何かと忙がしい彼だったが、時には一緒に飲むこともあり、酔った勢いで場末のミュージックショーを観に行ったこともある。その日はあいにく土曜日で館内は満員。ショーのクライマックスのたびに館内総立ちとなり、見えるのは客の頭ばかり。と彼は突然コンクリートの壁の一段高い出っぱりに足をかけ、身体を壁に張り付けるようにしてスポットライトに浮き出た踊り子をのぞき込んでいた。意外なところで岩登りの真価をみせつけられた私はただ驚き入った次第である。最終電車に乗り遅れ、オールナイトの鑑賞となって帰宅時の言い訳を捜していた大の男二人。今でも品川駅のホームで無意識にうしろを振り返って彼の姿を捜す。ホームの柱の影から悪戯っぽく笑った顔を不意に出して私を驚かしたりしたチャメッ気さを、そんな彼の姿を懐かしく想い出している。』

やはり彼も人の子、男の子であった。そんな彼の人柄が多くの友人や仲間を生んだのだ。
阿部ちゃんの思い出話は尽きることを知らない。数々のエピソードはいかにも彼の人柄を偲ばせる何よりの証拠である。いよいよ出発を目前にした三、四日前の宿直勤務を共にした私は、湯上がりのビールを片手に隣りで一生懸命何やら大きな用紙に記入しているのをみて「何書いてるの」ときいた、「隊員の1ヶ月分の献立表です」と言う。話によると食糧の担当を受持ったとのこと、なかなか面倒なものだなと思いながらも細い神経の行届いた彼には適役だなと感ぜずにいられなかった。心はすでにヒマラヤにあったその時の姿が私の脳裏にやきついてはなれない。登頂まであと一歩の地点での不運な出来事。さぞ無念であったろう、悔しかったことだろう。しかし常に健康的な精神で山と海の大自然に己れの肉体をぶっつけることの出来た彼は、いまその満たされた心で、共に行動した6名の山仲間と静かに山を語り合っているにちがいない。そして夜がくれば、山で結ばれたという愛する妻と一粒種の正彦君の姿を夢にみて眠りについているにちがいない。
安らかなれ「阿部直彦君。」……

阿　部　直　彦

想い出よ　さようなら……

東京こぶし山の会
市　原　　優

今また一人の岳友を失ってしまった。それもまた一番親しみのあった友を、悲しくも残念な事だ。人の一生は長くも短くもあるが、短いのは特に悲しくて淋しい。でもまさか阿部がとだれもが思っているに違いない。でも今だに帰っていない現実を信じなければならないのだろうか。いや信じたくない。何かのまちがいであってほしいと思う。今職場で、また岳友、妻、子供が君の帰りをまっているのを君は知っているか。残された者達の悲しさや苦しさを君は知っているのか。少し早すぎたようだ阿部、ヒマラヤの美しさや楽しさは私にも分っている。でも祖国で妻や子供、また友人達と語らい合うのもまた楽しいものだ。それを君は捨ててしまった。今君は重苦しい雪の下で何を考えているのだろうか。きっと桜の花が咲きみだれようとしている季節の日本へ帰ろうとして渾身の力でもって、もがいているのかも知れない。その君の力に我々の仲間が手を差しのべる事が出来ないのが非常に残念だ。君をガッチリととらえて離さない巨大なヒマラヤの力は我々には痛い程わかっている。我々に出来る事はたゞ君の安らかな冥福を祈る事だけだ。残念だがたゞそれだけだ。でも人との別れなんてそんな簡単なものなのか。いや違うと思う。阿部と我々には素晴しい数々の想い出があるじゃないか。今となってその楽しかった想い出を仲間達と語るのが我々の慰めでしかない。でも阿部我々岳友達はいつまでもくよくよしてなんかいないぞ、我々には悲しみを乗り越えてやらなくてはならない事が多くある。我々は残された妻や子を守らねばならない。また君と共に作り上げていった「東京こぶし山ノ会」をもっと大きく立派に育て上げて行かねばならない。君がやりかけた事を今我々が受けついで行こうではないか。それがヒマラヤに居る君へのお返しとなるだろう。

今この事を書いている頃、まだ日本の山々は深い雪をかむっている。美しさはヒマラヤにも負けずキラキラと輝いている。でももう君は残念だが見る事は出来ない。我々と共に山へ登る事も出来ない。きっと君の想い出と登る事があっても、あの笑顔の君がすぐそばに居ないと言う事がどれ程さみしい事か、阿部、山ノ会の事務所はあのままだ。君が行ってしまってから、天井のペンキがまた一枚とはがれて行ってるのも変りはしない。
うすよごれた湯飲み茶わんもそのままだ。相変らず水曜の夜には集まっては山の話に花が咲いている。本当なら君も居るべきじゃないのかと思っている。遠く離れていても心は参加しているだろうな、そんな気がする。阿部実は4月下旬から君の所へ行く事にした。近藤、千葉、浅野、佐野、そしてオレだ。かつての仲間が行くぞ、よろこんでくれ。きっと君の事だベースキャンプまで迎えに来てくれるだろう。そうあってほしい。阿部、オレはその時、ナンダ・カートに向って思い切りの声で君にさけぶつもりでいる。その時必ず答えてくれ、お願いだ。その時また逢おうきっとな。その頃にはシャクナゲの花が大きく咲いていると言う。君にその花ビラを思いきりまこうと思う。きっとナンダ・カートの頂きの彼方に舞い上り、やがて小さくなって大空の中に消えてゆくだろう。その時が君との永遠の別れの時だと思っている。そして共に阿部直彦の名も消えて行く。嗚呼消えて行く。君の35年の生涯の数々の想い出を残して消えて行く。さようなら安らかに眠ってくれ。そして君の祖国へ返った御霊の名「常證院釋智海」
嗚呼　合掌

本田荘八

兄　荘八を偲んで

弟．本田良雄

未だに信じきれない、兄が亡くなったなんて。近いうちに、ひょっこり現われ「おい、オジ（兄は次男、私は三男。テレ屋で口の悪い兄は、私のことを呼ぶ時いつも"オジ（叔父）"と言っていた）帰って来たぞ。なんか食う物はないか」と真黒に焼けた髭だらけの顔を見せそうな気がしてならない。

思えば出発直前の９月11日の夜、兄から電話があり、「俺だけど、今ヒマラヤに行くメンバーが皆新宿のヒマラヤ協会に集まっている。これから成田へ行くとこだが、家（実家）とオジの所へ電話しておこうと思ってな。元気で行ってくるからよ、余り心配するな。奥さん、おなかが大きいんだから大事にしろよ」などと少々酒が入った様な雰囲気の中で言ってきた。そこからは大きな目標に立ち向う希望に溢れた気持と、家族に心配かけまいという思いやりの両方の気持が感じられた。私も「頑張ってこいよ。インドに着いたら手紙をくれよ。帰ってきたら、うまい物を用意しておくからヒマラヤ登山の話しを聞かせてくれよ」などと言いつつ受話器を置いたのであるが、これが兄、荘八との最後の語らいになってしまった。

兄は私の願い通り、出発直前に一通、インドに着いてから二通の葉書を書いてくれた。『無理をせずに頑張ってきます』、『13時間の飛行によりデリー空港に着きました』、『キャラバンを開始して５日目、インド最奥地の村カティからは、ヒマラヤの山々が見え感激を新たにしています。今月の末頃、頂上に立つ予定であり、体調は上々です』　しかし、カティ村からの葉書は、遭難事故発生から11日目の10月８日に我家に着いたものであった。

兄は、家族に対し山のことは余り話したがらなかった。学生時代に登山経験の全く無い兄が、山に熱中しだしたのは日本電気(株)入社後６年目の昭和49年頃からではなかったろうか。以来正月・五月・お盆等の長期連休は言うに及ばず、職場の土、日の連休を利用しては、いつも山に行っていたようで、実家への帰省回数が少なくなっていた。稀に帰ってきても、冬山合宿の帰りの途中とかで、顔に凍傷のあとを作り大きなザックを担いでのものであった。心配する母が小言の一つ二つ言っても「大丈夫、心配ない」の一言で片付け、あとは陽気に酒を飲んでは歌を歌う兄であった。

そんな兄が、ナンダ・カート峰登山の話を家族に打ち明けたのは、出発８ヶ月前の昨年の正月であった。この年は珍しく、冬山へも行かず真直に帰省し「インドのヒマラヤ、ナンダ・カートと言う山へ行ってくる。エベレストの様な危険な山ではないし心配はいらない。大きな山は、これが最後だから」と心配する父母を前にして言ったのである。

具体的な登山計画は、何も言わなかった。私自身は、最近ちょっとしたブームのヒマラヤトレッキングみたいなものなんだろうと思い、父母にもその様に説明して、余り心配しなくても良い様なことを言った。兄が詳しいことを言いたがらなかったのは、今になって思うと、やはり余計な心配をかけまいという配慮からだったのであろう。

後になって、この登山が２年に渡って準備された本格的海外遠征登山であり、会社の反対を会社をやめても行くと押し切ってのものであることを知り、並々ならぬ決意のもとでの用意周到な登山であったことを初めて知った。

忘れもしない、あの日。10月３日の夜 TV を見ているとニュース速報で『ヒマラヤにて日本登山隊遭難』という報道が流れ、兄達は確かインドヒマラヤ登山隊という名だったはずだから違うなと思いつつも、不安感がよぎったところへ実家の長兄から電話が入り「荘八が遭難したらしい。先程、日本ヒマラヤ協会から連絡があった。９月28日の

ことらしい……」私は、受話器を耳にあて乍ら、ぶるぶる震え出してしまった。

しかし、あの豪傑の兄が、そう簡単に死ぬはずがない。よしんば雪崩にあったとしても、這い出て来るはずだ。死んでたまるかとの思いが頭をめぐった。それに、心配している父母の胸中を思うと、いてもたってもいられない気持だった。

生存を願う家族の強い思いにも拘らず、兄達の事態は絶望的となってしまった。

遭難から早5ヶ月、現地捜索から3ヶ月が過ぎようとしている。この間HAJとの情報連絡会、家族会、兄のお世話になった会社との諸手続、アパートのひき払い、合同追悼会、除籍手続、葬式等、慌しい中を関係各位の皆様の手助けにより、なんとか済ませることができた。がしかしこれらを行なうことが、兄の生存を願うごく僅かばかりの望みをも、完全に断ち切られてしまうような気がしてならなかった。

見かけによらない兄の人柄の良さ、几帳面で綺麗好き、他人への深い思いやりなどが、兄の山仲間や職場の先輩、アパートの大家さんなどの話、或いは、アパートひき払い中に出てきた数々の手記などから伺うことができ、兄の知らざれる一面を改めて家族は認識したものである。

30才になったばかりの、中堅どころとして、いよいよこれからという矢先での永遠の別れ。いくら好きな山でのこととはいえ、本望だったというには余りにも悲しすぎる。HAJ専務の稲田さんの話によれば、インド気象庁では今回の遭難を機に、ヒマラヤでの気象通報を実施することを決定したという。兄達の尊い死が、気象通報という形で今後のヒマラヤに於ける安全登山に、大きく貢献されることを考える時、決して無駄死ではなかったということを、声を大にして叫びたい。

現地捜索の最後の日、7羽の白い鳥が、いづこともなく現われ捜索隊の上空を舞っていたという。異例ともいえるヒマラヤでの捜索活動に対し、7人の御霊が鳥の形となって、山仲間や家族に感謝の気持と永遠の別れを告げる為に、現われたのではないだろうか。

今でも時々聞こえてきそうな気がする「おい、オジ」と私を呼ぶ兄・荘八の大きな声が。

"ナンダの女神の山、ナンダ・カートに倒れし荘八と6人の岳友達
どうか、安らかに眠り給え"

本田荘八

本田君の思い出

日本電気 横浜山岳部
石井清一

今回のヒマラヤ登山学校には、日本電気横浜山岳部より本田君と鈴木君の両名が参加しておりました。入部以来の友人として、本田君の思い出を書かせていただきます。

私が本田君と初めて出会ったのは、昭和45年3月に創立した横浜山岳部が同年7月、一般従業員を対象に募集したハイキング大会「富士登山」の時でしたが、一般参加者の一人としてお互い話をする機会もありませんでした。

その年の秋、山での失敗にこりて山岳部に入部した私は、お酒の出る山行だけに来て人一倍、いや五倍も十倍も飲み歌い騒ぐ人が、本田君である事を改めて知ったのです。しかも年が一つ下で、あのハイキング大会以後ずっと誘われ続け、偶然にも私と前後して入部したと聞かされたのは、それからずっと後の事でした。

その頃、彼は柔道とボディビルをかけもちしている上仕事柄外出も多く、集会等には出席しませんでしたが、お酒の出る山行だけには参加し、こぶしのきいた山の歌をうたい、コンパの場を盛

左から２番目　本田荘八

り上げる人気者でした。

ところが新入部員が多く入った48年（その中には鈴木君もいました）の秋からなぜか彼は、山岳部の定例山行の全てに顔を出す様になり、雪国育ちで雪に慣れている事、持前の体力等々などですぐに主要メンバーとなりました。翌年の春合宿を担当した私が、ためらわず彼をサブに指名したほどです。

その後の彼は、頑固なくらいガンバリ屋の鈴木君と好ペアで、「本田、鈴木の両エンジン」と異名を取るほどの馬力で部を引っぱってくれました。

又、彼は足も早く、先頭を歩くといつも二番目が遅れ、ラッセルの時などはみるみる差がつき、しばらく行ってからふと気づいた様に振り返って待っているのが常でした。山行を記録した８mmの中に我々の前を歩く単独行の人が時々登場しますが、それはまさしく本田君である事を部員は皆知っています。

その最も顕著な例は54年度の冬山合宿の折、北岳で天候が悪化し、下山パーティのサポートを彼と鈴木君にしてもらったのですが、任務を終え、八本歯のコルから吊尾根分岐へ引き返す時、トップを行く彼のペースが例によって早くなり、鈴木君が遅れまいと負けずに追いかけるという具合で、とうとう信じられない時間で着いてしまったと言う話があります。

しかも、これには後日談があって、我々が分岐から北岳稜線小屋へ向う途中の危険な所に残して置いた荷上品を、彼は平気でぶらさげ、スタスタ持って来てしまったのです。それを見ていた鈴木君曰く、『まるでバケモノみたいだった。』との事。

本田君はこの『バケモノ』の他に『野獣』と言われた事もあります。

我が部が毎年秋に催す強行と名付けたカモシカ山行で、東と西から奥秩父に入った折、陽が傾く頃、金峰の頂上についた本田君達に、どこかの女性グループが「今日は、どちらまで？」と声をかけてきました。そして、「たぶん大地小屋か富士見小屋だろう」と想像していたその女性たちに本田君は、「甲武信を越えて雁坂峠まで」と答えたのです。それを聞いたとたん『野獣！』との声が返って来ました。

本田君はその前年の夏に鈴木君らと南アルプスを８日間で全山縦走し、次の年には、北アルプスの笠が岳を振り出しに日本海までを７日で駆け抜けています。早朝ではなく、夜中の１時とか２時に出発して日暮れ迄歩き、全食ジィフィーズとパンだけと言う山行をしたのでした。この時の写真を見ると他のメンバーが、骨と皮ばかりにやせこけている中で彼だけはなぜかいつもと変らずに写っています。

数多くの山行を共にした中で特に印象深いのは53年の春、北アルプスの表銀座の稜線にテントを張った翌早朝、突然カミナリの洗礼に会い、気絶するほどのショックを受けたのですが、彼だけはカミナリもよけて通ったらしく水ぶくれの跡すらなかったのです。

山の中では、豪放な彼でしたが、家ではお酒も飲まず、音楽を聞くのが趣味だった様で、狭いアパートの部屋には、ベビーダンスほどの大型スピーカーそしてラックに組み上ったオーデオセット類が並べられ、ちり一つなく、その風貌からは想像出来ないほどきちんと整頓されていました。

彼はおおらかな性格の他に繊細な一面も持っていたのです。

今回のヒマラヤ行きは、ヒマラヤ協会会員だった鈴木君の誘いでしたが、行くからにはと昼休みのトレーニングを、ボディービルからランニングに変え、道具を全て買い替え、準備その他にも並々ならぬ意気込みが感じられ、我々もその成功を確信していたのです。

私の知る限り、本田君そして鈴木君も本当に強い男でした。ですから今回、「遭難か？」と聞いた時も彼らの事だからきっとどこかで待機し、無事帰って来ると信じていたのですが、運命とはわからないものだとつくづく思います。

彼らには登山学校で得た知識や技術を生かし、後輩の指導、山岳部の充実など、してもらいたい事は山程あり、その将来に期待していたのですが、今はそれも叶わずなんとも無念でなりません。けれどその無念さも、これ迄育ててこられたご両親のそれには、はるかに及ばないものでしょうが。

遠く異郷の地ヒマラヤに消えた本田君、鈴木君の御霊よ安らかに眠って下さい。

埜口正則

我が子 正則の死を悼んで

父．埜口四郎

憶々　昭和56年９月28日この日我が子正則は、６人の岳友と共に不帰の客となってしまった。痛恨の日である、なんと悲しい打ちひしがれた日であることか。この日吹雪は荒れ狂い、彼等７人の若者を押流し埋めてしまったのであろう。この悲しい大雪崩、思い出す度断腸の極です。

天にましますナンダの女神も７人の前途ある若人の加護をたまわらなかったのですか？　悲憤やるかたなく痛惜にたへません。

我が子正則は幼い時からやさしい心の子でした。自分の分をわきまへ自分の出来る限り人の為、社会の為役立つ人になろうと頑張った子であったと思います。

吹田郵便局においては全逓青年部の一員として大学時代はユースホステルクラブの部長を務め、岳友クラブにおいてはクラブのリーダーとして先鋭的な山行を、大学の友、山の友、職場の友より拝聞しても後輩には面倒見がよく信頼を集め常に積極的で、友人に対する友情は人一倍厚かったときいて居ります。又目上に対する礼節も厚かったといふことです。

郵便局では仕事が終るとウェイトトレーニングとジョギングを毎日やっていた様です。

郵便局の先輩や後輩も異口同音に腕の力もジョギングも埜口君にはかなわないと言って居られました。ヒマラヤ山行への準備をやっていたのでしょう。この様に訓練に山行集会に岳友との交際交遊に職場の集会にと、ほとんど家に居ないといふ毎日でした。私達はあまり無理をしてもと思ふほどで山に行って疲れたのでしょう、帰ってくるとす

ぐに寝てしまって朝までといふ様なこともありました。又停年退職まで務めて子供を連れて山に登るのだと言っていた姿が目に焼きついてはなれません。

職場においても上司にへつらふことなく絶対にそうしたことはしない子供でありました。今から考へると純粋で正々堂々とした考への持主だった様に思います。同僚の友人から聞いたのですが、仕事の上では課長さんにでも文句をつける様なはげしい一面もあったと聞かされました。

其の反面親にはやさしい子で思いやりのある子でした。私達の言ふことにはさからわず、よくやってくれました。又月給袋も賞与も手をつけずに渡してくれる様な子供でした。

正則は生きて居れば社会の為、職場の為、山岳界の為、大いに働いてくれる息子であったと思います。又今日までの日本山岳会のエベレスト遠征について、若い人に登頂の機会をもっと与へるべきだとの話も聞きました。

我が子正則がこんなにも早く世を去ってしまったことは本人の無念さは勿論ですが、かへすがへすも残念でなりません。

私達がなすべくしてなし得なかったことをやってくれる子であると常日頃からひそかに期待して居りましただけに、愛惜の念で一杯です。

私達は何物にもかえられない最愛の我が子を失ってしまったのです。

さきに長女を失い、今又長男正則を失ってしまった私達の悲しみは、恐らく他人にはわからないだろうと思います。今はともすれば働く気力さえも失はれそうなむなしい毎日を妻を励ましながら送って居ります。

願はくば、正則よ、お前の魂は
岳友、職場の友、学生時代の友　の胸の中に
生きつづけるであろう
お前が残した山の本、職場の本、山の道具
みんなそのまゝ残してあるんだよ、
正則よ。
父も母も命のある限り待っている
お前の帰るのをいつまでも
いつまでも

こんなことを書いた私達の馬鹿さ加減を皆様お笑い下さい。笑はれても馬鹿にされても息子正則が立派だったと思いますので、あへて書かせて戴きました。

埜口正則

友　埜口君よ

岳友クラブ
平家啓作

昭和56年5月、親しい会員を立山でうしない二度と悲しみをみんなで味わいたくない、楽しい安全な登山を目ざそうと、誓い合った矢先、まだ悲しみのさめやらぬその日、埜口君、君がインドヒマラヤの奥深く、帰らぬ人になろうとは。

昭和56年9月28日、そこに一体何がおこったと云うのですか。家族や友人の心配をよそに、君はとうとう連絡をくれなかった。すぐにでも飛んで行きたいと思えど、遠いヒマラヤの山なればそれもかなわず、思案の毎日をすごしてきました。

想えば君が岳友クラブに入会以来、常にクラブの事を思い、クラブの新人の育成や、レベルアップのために活動してくれたことに対し、また、クラブの運営委員長として、みんなを引っぱって行ってくれたことに対して、心から御礼をいいたい。

ヒマラヤ登山を一つのステップとして、君を中心としたクラブが、一まわりも二まわりも大きくなることを期待していたのに。

君がヒマラヤに出発する前、一連のヒマラヤ遭難が発生する中で、一抹の不安があったとはいえ君にそんな心配はないと送り出したのに。

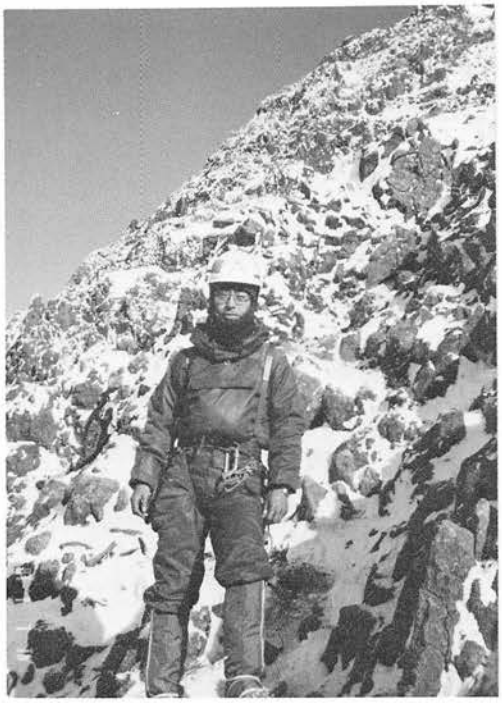
残された御家族のことを思うとき、僕達が今まで、楽しい安全な登山をクラブのモットーとして来たことが、果しえなかったむなしさで一ぱいです。

今はただ君の事故を教訓として、安全な登山に全力をそそぐことをお約束するのみです。

君の告別式も終り、悲しみに打ちひしがれていた君の仲間達も、又山を想い出しトレーニングにはげんでいます。君の記録集も出来上りました。

君の意志をつぎ、君がはたしえなかった山行も仲間達がきっと受けついでくれることでしょう。

遠いヒマラヤの地で、共に苦労した親しい6人の仲間とともに、安らかにねむりたまえ。



▲1981年1月1日

寺本政幸

寺本くんは いま

ちんぐるま山の会
石田文男

〝原動力〟

〝身体から湧きいずる逞しい力と優しい力〟

それは君をそのまま表わす言葉。

我々〝ちんぐるま〟の仲間だけでなく、誰もが君を表現できる一致した言葉、これが〝原動力〟。座談会等で君に感する所感を度々述べてきたけど、自然にこの言葉を口にしている。それは〝ちんぐるま山の会〟を発足以来、君が会の重鎮的存在であったからだと、私の胸から消えることがないからにほかならない。時にはトラブルの生ずる事もあったが、それも自己の主張と仲間の意見を尊重しながら、事を解決するという態度、こうした一貫性ある姿勢が信望を厚くし、仲間への原動力となっていた。

君が〝ちんぐるま〟の中に本格的に溶け込みだしたのは、〝山の会〟として発足してからのこと。東山工高時代も勿論行動を共にしてはいたが君はもっぱら単独行が多かった。それは山岳部の主力

メンバーが、そろそろ夏山から春山へ移行し始めた頃で、君は鈴鹿や伊吹山へと精力的に動いていた。これは後に知ったのだが、自らのレベルアップを図ることで、主力メンバーに一日も早く追い付きたい、の一念がこの頃の君を支配したのだと。

君の生い立ちと環境が、この辺りから更に拍車をかけ始めたのだと言える。一度山に入れば下界の雑踏から逃れることが出来る。植物や岩を相手の生活は、下界で蓄積した心の疲れを癒し和ませてくれる。これは私にも経験のあることだけど、初めて南アルプスの深林を独りで歩き、時には雷雨に叩かれ脅えながらも高山植物に元気付けられ、でもその後のあのすっきりした山なみを眺める喜び。単独行は寂しいものだけど、それだけに何時になってもその想い出が鮮明に浮かんでくるのである。

最も感受性の高かった十代の君は、増々この魅力に吸い込まれて行ったのだろう。その後の山登りの地はこうして作られ、君を縛り着けて行ったのだろう。

君の一連の山行は、そのまま〝ちんぐるま〟の仲間の意志を表わしてもいる。恵那山冬山合宿以来の、数々の山行計画と実行がそれをもの語っているからだ。鈴鹿の山のバリエーション・ルートを求めて沢登りのジャンルに入り、それをアルプスへも求めて行く。そのための基礎の岩登りも始めて行く。

我々が東山工高を卒業する前後、春の3,000m峰をバリエーション・ルートから目指すことに大きな魅力を感じていた頃、一方にはヨーロッパ・アルプスを一度は登りたいという心が、書物からくる誘引に動かされたものだった。この頃は、日本の登山者の大多数が、ヨーロッパ・アルプスへと指向していた。〝氷河のある山〟への想いは、日本の山では満たされず、駆り立てられて行った多くの登山者の触発が、幾多の青年を躍動させ、大袈裟に言えば、その後の人生すら変えるほどの影響を与えた。学校卒業後は、山が主で職業は従、これが山を指向する者の一致した歩みのようだ。

私もそうだった。在学中でも職業のあった私は、学業と共に職業も従で、主が山に有ったように思う。これは十代から二十代にかけて、最も感受性に左右されやすい時期に一致している。そしてこの態度が、その人の一生を決定付けることになる。海外遠征の経験を多く持つ者は、この最たるものだろう。随分横道に逸れてしまったが、正に君の人生や職業での独立意識もこの一面を顕している。

君は僕の実現出来なかった多くの事柄を、一つ一つ現実のものにした。遭難から今日まで、君の多くの事に接しながら、今一段とこのことの感慨に更けっている。

きっと、君は今もなお、白い山稜を頂き目指して登りながら、あるいは氷河の中を歩きながら、一つ一つ過去の山行を想いつつ、次の山旅の思惑に心はずませていることだろう。

仲間の羨望の的になり
夢をふくらませる
それは、君の魅力の証明だ。

……いつしか
登山者の夢であるヒマラヤの
懐にとび込んでいった君。

真に山を想い
山を愛していたからだ。
欲望のままに
心底から湧きいずる情熱を傾けて。

君は
いつも山を想い
純粋に愛したから
山の女神に召された。

（「山に懐かれて」から転載しました）

斎藤孝雄

わが生涯のザイル・パートナーに

雪苞沓山の会
氏家　章

私たちは、最も大切なザイル仲間を失いました。

交信途絶という第一報に接し、その後の詳報を得られぬもどかしさに苛立ちながら、なお一縷の望みを捨てませんでした。

「ごめん、ごめん。悪かった。心配させたね。」と照れながら、皆の前に現れる彼の姿を、だれもが信じたかったのです。

しかし、日を重ねるに従って悲観的なデータが届けられ、ついに悲しい公電に接することになってしまいました。

本当に残念でなりません。

会のだれからも信頼され、慕われている彼の資質について書くなら、たちまち紙数が尽きます。

彼のながい山歴やすぐれた登攀技術もさることながら、そのすがすがしい人柄こそ、私たちにとって欠けがえの無い大きな財産だったのです。

どんなに辛いアルバイトやどんなに苦しい登攀でも、決して弱音を吐くことが無く、いつも経験の浅い若手を気づかい、すすんで重い共同装備を引き受け、内に秘めた情熱を着実な登攀に実現してきた斎藤孝雄氏。

アルピニストとして、クライマーとして、ザイルのトップとしての厳しい戒律を自らに課し、常に新しい目標を見つめていた彼の姿に、私たちは生きてゆくための一つの規範を見ていたと思います。

彼は17年前、剣岳で初めての岩のぼりを経験してから、それまで以上に深く山へ傾注するようになりました。

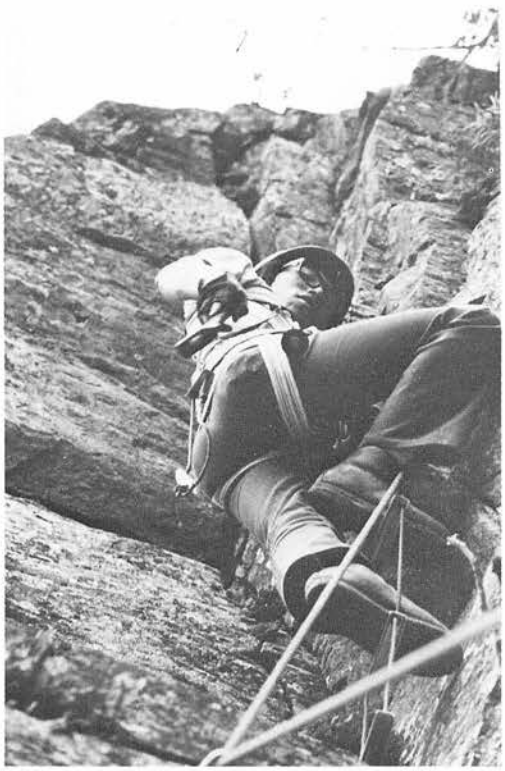
とりわけこの10年というものは、朝日連峰や神室連峰、鬼首山塊の谷々にチーフリーダーとして際立った活躍を重ねてきました。

それらの活動は、牧恒夫を中心とする同人誌「雪苞沓」にきちんとまとめられ、更に「岳人」や「山と渓谷」等の専門誌にも次々に発表されました。

1980年には、会創立以来の課題となっていた、朝日連峰三面川岩井又のガッコ沢初登攀に晴れやかなトップをつとめました。

同じ年に白水社から刊行された「日本登山大系第一巻、東北・北海道の山」でも、執筆担当の一人として大きな役割を果しています。

そして、この頃から彼は長い間あこがれ続けていたヒマラヤに、一層あつい思いをかきたてたようです。



▲半俵山岩場にて

出発を旬日後にひかえた一夜、会の仲間と酒をくんだ折の嬉しそうな笑顔が忘れられません。

山と登山が自分にもたらしてくれたもの……自分の登山の新しい展開となるヒマラヤ……などについて、少年のように眼を輝かせていた斎藤氏。

しかし、念願のナンダ・カート峰をすぐ目前にして、彼は6名のパートナーと共に、白い神々の座に召されてしまいました。

いまは、ただただ御霊の安からんことをお祈りするだけです。

斎藤君ーいえ、慣れ親しんだニックネームで呼ばせていただきます。

エーちゃん、私たちはあなたが成しとげた数々の登攀と、その大きく重い意味とを、御子息の仁君と奥様に正確にお伝えすることをお約束して、お別れの言葉に致します。

どうか、安らかにお眠りください。

第 Ⅵ 部

資　料　編

ヒマラヤ登山死亡事故の処理 …… 山 森 欣 一 115

ヒマラヤ地域における日本人死亡調 …… 山 森 欣 一 118

1. ヒマラヤ登山死亡事故の処理

山　森　欣　一

登山において遭難事故は無いにこしたことはない。又、計画中のメンバー達も「自分達に限って……！」と勝手に決めつけ、遭難事故を他人事とし傍観しのんびりと構えているのが大多数である。しかし、既に何度も発表したように日本隊のヒマラヤ登山における死亡事故は32名に一人が死亡している現実を避けて通ることはできない。まして、1968年から15年連続死亡事故が発生している中にあっては準備を周到に行っても、しすぎたということがない。だがどんなに周到に準備され確実に実行された登山の中にあっても、大自然界の力の前に何等なすすべもなく遭難してしまったケースを見るにつけ「絶対」ということが登山の世界ではありえないという厳しい現実を思い知らされるのである。

ここでは、万が一死亡事故が発生した場合の現地での処理や除籍に到るまでの流れについて記したい。

ヒマラヤ登山といえども、日本の法体制から見れば何等特別なことはなく、一般の旅行と変ることはない。

楽しかるべきヒマラヤ登山も死亡事故の発生と共に一転して悲しき旅行と姿を変えてしまう。

しかし、残されたメンバーは悲しんでばかりはいられない。現地での事故処理を誤まると、更に故人となった岳友の葬いをも遅らせることにもなりかねないからである。日本では除籍と葬式が一体感として定着している。

自然人である我々が死亡した場合は最終的には戸籍のまっ消（除籍）をもって死亡が確定する。

（一般的に）これは葬式をするためには故人を埋葬しなければならず、このためには、「埋葬許可」が必要であり、そのためには「死亡届」が受理されなければならない。しかし、ヒマラヤ登山の多くの死亡事故では遺体がなかったり、あっても収容できなかったりで現場へ埋葬してくるケースが多い。ここから様々な問題が起きてくる。

◎登山隊をとりまく関係者と役割

1.隊　長……遭難事故報告と報告書
2.隊付医師……死亡診断書
3.事故目撃者・死亡確認者…「現認書」
「死亡確認書」
4. Liaison Officer ……遭難報告書
5. District Magister
6. Deputy Commissioner
7. Sub Divisional Magister
その地方の大小により置かれている行政官が違うが、この三者のいづれかがL/O隊長の報告からIMFへ
8. Indian Mountaineering Foundation（IMF）……死亡推定証明書
9.現地救助隊……救助（捜索）報告書
10.日本大使館……死亡（推定）証明書

ヒマラヤ登山・死亡事故発生の場合の作成書類例

◎　まず、自分の隊が次のいづれに該当するかを判断して該当欄を参照する。

1. 隊付医師（医師法に定める医師）が死亡を確認した場合
2. 医師は死亡を確認できなかったが、隊員が死亡を確認した場合
3. 医師及び隊員のだれもが死亡を確認できなかったが、事故を目撃した者がいた場合
4. 事故の目撃者がいない場合

(1)　隊付医師が死亡を確認した場合

隊長が日本大使館宛「死亡届」を提出するが、この時医師が死亡届に付いている「死亡診断書」に所定事項を記入し署名なつ印する。更に隊長は可能な限り詳細な「遭難事故報告書」を作成してこれに添付する。（隊長が死亡した場合はその代理者が以上のことを行う）

(2)　医師は死亡を確認できなかったが、隊員が死亡を確認した場合

隊付医師がいない場合や、いても現場まで行けない場合がこれに該当する。隊長が日本大使館宛「死亡届」を提出するが、「死亡診断書」は出せないので、それに準ずるものとして「死亡陳述書」を死亡を確認した隊員が作成し、隊長が作成する「遭難事故報告書」と共に死亡届に添付して提出する。

(3)　医師及び隊員のだれもが死亡を確認できなかったが、事故を目撃した者がいた場合

遺体が埋没したり、遺体まで到達することができなかったが事故そのものを目撃した者がいる場合。隊長が日本大使館に提出する「死亡届」に「死亡診断書」を出せないので事故を目撃した隊員により事故の模様を詳述した「現認書」を作成して、隊長が作成する「遭難事故報告書」と共に死亡届に添付して提出する。

(4)　事故の目撃者がいない場合

遺体もなく、事故そのものをも目撃していない場合や、事故が起きつつあることはトランシーバーで伝えられたものの結果的には遺体もなく目撃もしていない場合。隊長が日本大使館に提出する「死亡届」に「遭難事故報告書」を添付して提出する。

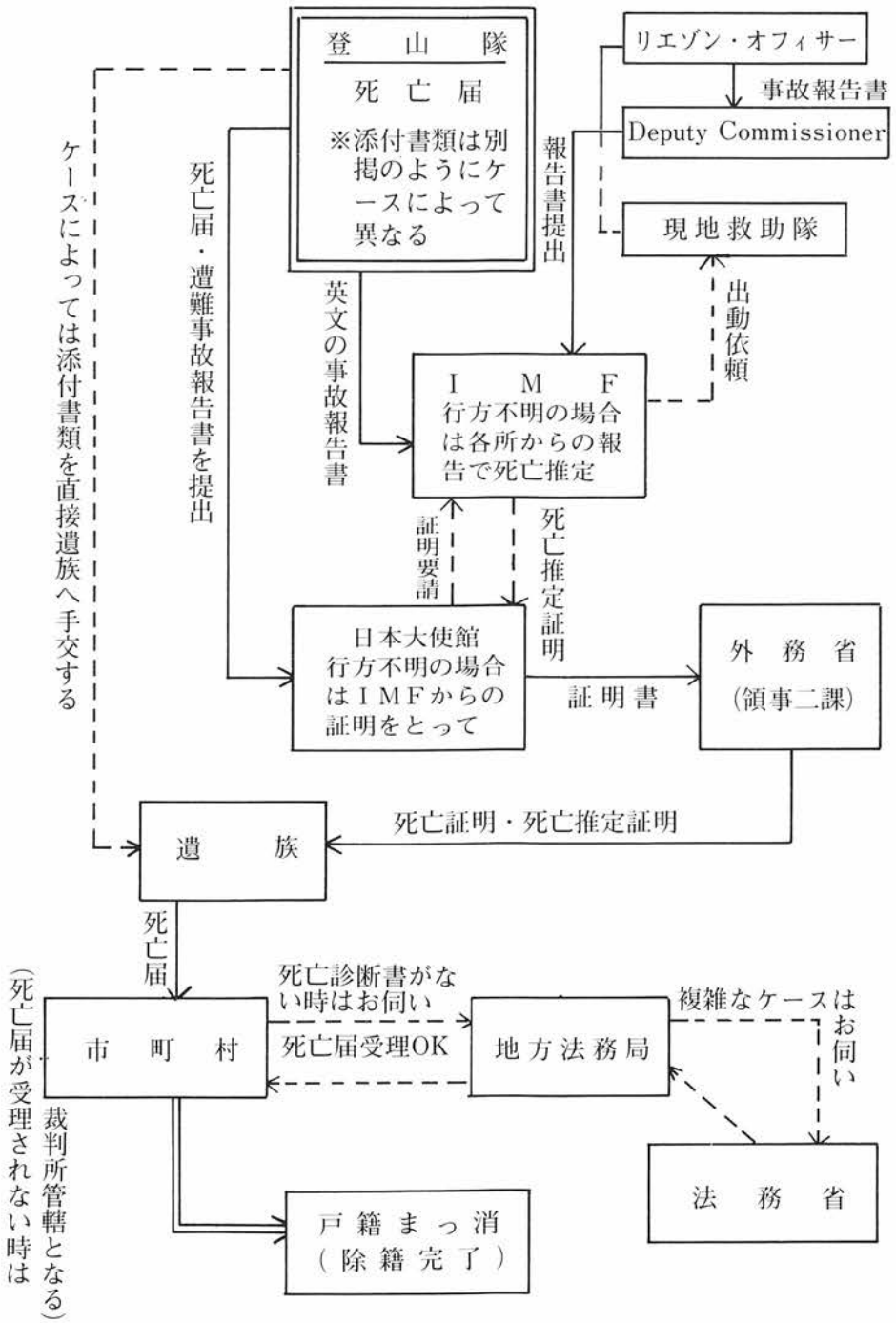
※尚、死亡届を日本大使館で提出するか、帰国後死亡者の本籍地・住所地で提出するかは、日本大使館の指示に従った方が良いであろう。

※現認書・死亡陳述書・遭難事故報告書には山の概念図・現場の見取図・ルート図・それまでの行動記録等を必ず盛り込むこと。

※死亡届の用紙は日本大使館にも常備してある。

ヒマラヤ登山・死亡事故発生から戸籍まっ消(除籍)までの例

———— 一般的な流れ
- - - - - - - 特殊なケース



2. ヒマラヤ地域における日本人死亡調

山　森　欣　一

日本隊によるヒマラヤ登山が始まってから、1982年で31年を迎えた訳であるが、この間6,000m以上の高峰へおおよそ550隊、延4,500人が登山した。6,000m未満の峰への小登山や、トレッキングを含めると膨大な数の日本人が、ヒマラヤを登り歩いている。

ヒマラヤの最大の特長は「高所」であり，登山ばかりでなく，トレッカーもこの「高さ」故の事故に遭遇している。外国隊も含めた、ヒマラヤ地域での死亡者の調査は行なわれていないようであるが、ここでは、日本人の死亡事故を調査してみた。登山は言うに及ばず、トレッカーも含めた全てを収録した積りである。今後の登山、トレッキングの準備の段階で参考にしていただきたい。

ヒマラヤ地域における日本人死亡調集計表

	計		ネパール		パキ・アフガン		インド		中国	
1961	1	2	1	2	−	−	−	−	−	−
2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
4	1	1	1	1	−	−	−	−	−	−
5	1	1	−	−	1	1	−	−	−	−
6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
8	4	5	−	−	3	4	1	1	−	−
9	2	2	1	1	1	1	−	−	−	−
1970	4	4	4	4	−	−	−	−	−	−
1	7	11	6	10	1	1	−	−	−	−
2	3	3	2	2	−	−	1	1	−	−
3	7	13	7	13	−	−	−	−	−	−
4	5	6	3	3	2	3	−	−	−	−
5	5	7	3	5	1	1	1	1	−	−
6	4	6	1	1	2	4	1	1	−	−
7	3	3	2	2	1	1	−	−	−	−
8	7	14	4	9	3	5	−	−	−	−
9	4	10	2	3	2	7	−	−	−	−
1980	7	9	4	6	1	1	1	1	1	1
1	14	36	5	6	1	3	5	15	3	12
2	9	11	2	3	1	1	2	2	4	5
	88	144	48	71	20	33	12	22	8	18

※1982年11月5日現在調　　事故件数　88件　　死亡者　144名

表１　ヒマラヤ地域における日本人死亡調査表（1952～1982）

発生年	番号	地域	山名	高度	派遣団体名	隊長名	隊員数	死亡			
								原因	隊員	現地人	合計
1961年（1件）	(1)	NH	ランタン・リルン	7,246 m	大阪市立大学	森本嘉一	6	雪崩	2	1	3
			5月11日午前4時45分第3キャンプ（5,600 m）が雪崩に襲れ、就寝中の森本嘉一(41)隊長・大島健二(26)隊員並びにシェルパ1名が死亡した。　※「ランタン・リルン7,246 m」　昭和55年10月　大阪市立大学山岳会刊								
1964年（1件）	(2)	NH	ギャチュン・カン	7,922 m	全日本山岳連盟	古原和美	11	滑落	1	0	1
			4月9日午前11時45分、標高約7,700 m付近から大滝明夫（29）隊員がチベット側へ滑落死亡した。 ※「1970年度年報」　昭和46年5月　長野県山岳協会刊								
1965年（1件）	(3)	K	クンヤン・チッシュ	7,852 m	東京大学スキー山岳部	白木博次	13	雪崩	1	0	1
			8月19日午前11時20分仮第8キャンプを出発し、ルートを伸ばしていた中村岳生（25）隊員の足元から雪崩発生し巻き込まれて死亡。　※「キンヤンキッシュ1965」　昭和43年5月								
1968年（4件）	(4)	HK	コー・イ・バンダカー	6,843 m	愛知学院大学	湯浅道夫	7	滑落	1	0	1
			7月29日登頂に成功し下山中に黒宮義孝（23）隊員がサキ谷へ転落行方不明となった。 ※「ヒンズー・クシュ，カラコルム登山探検誌」　1980年12月　日本ヒンズー・クシュ，カラコルム会議刊								
	(5)	HK	南アトラック・ゾム	6,241 m	札幌医科大学	松浦正司	4	滑落	1	0	1
			8月23日第2キャンプ（5,700 m）から下降中、村田俊雄（32）隊員が滑落しクレバスに転落。チトラルに戻るも死亡。　※「ヒンズー・クシュ，カラコルム登山探検誌」前出								
	(6)	HR	コタルカシュ氷河		RCC Ⅱ	雁部貞夫	3	行方不明	2	0	2
			8月8日橋野禎助（30）剣持博功（23）の2名がコタルカシュ氷河探査に出発したが、帰着予定日になっても帰らなかった。　※「ヒンズー・クシュ，カラコルム登山探検誌」　前出								
	(7)	IH	バランザール	6,575 m	登歩渓流会	小原ケイ	4	転落	1	0	1
			頂上アタックに向かったが断念し、下降中滑落して腰を痛めた。小原ケイ（40）隊長は4日間ビバークして更に下								

発生年	番号	地域	山名	高度	派遣団体名	隊長名	隊員数	死亡			
								原因	隊員	現地人	合計
			降中の6月24日ビバーク地（5,700 m）のテラスから転落死亡した。 ※「山旅のらくがき」 昭和43年12月登歩渓流会刊								
1969年（2件）	(8)	NH	ニルギリ南峰	6,839 m	関西登高会	梶本徳次郎	2	高山病	1	0	1
			南尾根を4,850 mまで試登し、ベースキャンプ（4,450 m）に下降したが、梶本徳次郎（48）隊長が高山病のため死亡した。 ※「ダウリギリⅥ－関西登高会1970ヒマラヤ登山報告書」 昭和47年3月 関西登高会刊								
	(9)	HK	イストル・オ・ナール	7,403 m	関西学院大学	野村 晃	5	滑落	1	0	1
			第4キャンプ（6,600 m）からアタックに向かったが断念。計3日間のビバークの後、第4キャンプへ下降中の7月31日森本隆（25）隊員が滑落死亡した。 ※「ヒンズー・クシュ，カラコルム登山探検誌」 前掲								
1970年（4件）	(10)	NH	エベレスト	8,848 m	日本山岳会	松方三郎	29	高山病	1	0	1
			4月21日第2キャンプを往復後、胸部痛のため酸素を吸った成田潔思（28）隊員が突然の沈黙状態の後、午後8時50分死亡。 ※「高峰への挑戦」 1979年12月15日岳書房刊								
	(11)	NH	ピーク29	7,835 m	大阪大学	水野祥太郎	9	滑落	1	1	2
			10月19日午後4時50分、登頂を果して下山中の渡部洋（26）隊員とシェルパのラクパ・ツェリンが滑落死亡した。								
	(12)	NH	ツクチェ・ピーク	6,920 m	早稲田大学	山本聖二	17	滑落	1	0	1
			5月1日、前日登頂に成功した菊地裕介(23)隊員が帰路ビバークの後、6,500 m付近から滑落死亡した。								
	(13)	NH	バウダ	6,672 m	慶応大学	磯 弥須彦	7	滑落	1	0	1
			4月24日第3キャンプに下降中の板矢晏男(25)隊員が6,200 mから滑落行方不明となった。								
	(14)	NH	アンナプルナⅡ	7,937 m	信州大学	西郡光昭	11	滑落	1	0	1
			5月4日第5キャンプからアタックに向った佐藤正敏（22）隊員は7,800 mで断念し下山中7,300m付近で滑落し歩行不能となった。救助に向ったが既に姿はなかった。 ※「岩と雪24号」昭和47年4月 山と渓谷社刊								

	(15)	NH	マカルーⅡ	7,640 m	千葉大学	沼田　真	9	高山病	1	0	1
			7,300 mまでルート工作をして第4キャンプに戻った高木邦夫（28）隊員の動作がにぶくなり、10月18日意識不明となり第2キャンプ（5,830 m）に降ろした10月20日午後10時20分死亡。※「岩と雪24号」前出								
	(16)	NH	ダウラギリV	7,618 m	県陵山岳会	矢崎源一	8	滑　落	3	0	3
			5月4日アタックに向かった手塚英信（30）柳沢利文（27）青木憲一（23）の3人は疲労が激しく下山中、柳沢隊員が転落し、他の2人を引きずり込んで落下死亡した。※「白き山嶺」　昭和53年11月　県陵山岳会刊								
	(17)	NH	ダウリギリV	7,618 m	九州大学	白水　隆	10	雪　崩	1	0	1
			10月6日5,950 m付近で発生した雪崩に千々岩玄（29）隊員が600 m流されて死亡した。※「岩と雪24号」前出								
1971年	(18)	NH	ガンガプルナ	7,454 m	長野県山岳協会	清水　澄	10	雪　崩	3	5	8
（7件）			10月16日夜と推定されるが第2キャンプ（5,900 m）が雪崩に襲われ小木曽厳（29）笹川広平（25）箱山益夫（23）の3隊員とシェルパ3人が死亡した。更にこれを確認した他のシェルパ2人も消息を断った。※「ガンガプルナ登頂」「岩と雪24号」前出								
	(19)	NH	ランタン					高山病	1	0	1
			11月5日キャンジュン（3,800 m）で高山病のため前田光雄（56）が死亡した。※「ヒマラヤ21号」　昭和46年11月　HAJ刊								
	(20)	HK	ウドレン・ゾム南峰	7,050 m	下関山岳会	山下貞美	5	転　落	1	0	1
			7月23日約7,000 m付近で下山準備中の三上勲（26）がウドレン氷河側に転落し行方不明となった。※「ヒンズー・クシュ，カラコルム登山探検誌」前出								
	(21)	NH	ダウラギリⅣ	7,661 m	群馬県山岳連盟	小林二三雄	9	高山病	1	0	1
			4月28日第4キャンプ（6,200 m）から上部のルート工作を終えた松井高重郎（34）隊員は、体調悪く翌日は停滞。								

発生年	番号	地域	山名	高度	派遣団体名	隊長名	隊員数	死亡			
								原因	隊長	現地人	合計
			30日下のキャンプへ降りる予定であったが、12時45分頃口いっぱいに水溶物を吐き死亡した。 ※「青と白の厳しさ DHAULAGIRI－IV, 1972」 1974年5月群馬県山岳連盟刊								
1972年（3件）	(22)	NH	ナンパ	6,754 m	青森県山岳連盟	松島静吾	5	転落	1	0	1
			5月5日初登頂に成功し下山中の懸垂下降の途中（約6,600 m）高橋進（23）隊員が北側へ転落し行方不明となった。 ※「岩と雪30号」 昭和45年4月山と渓谷社刊								
	(23)	IH	デオ・ティバ	6,001 m	ガネッシュ山の会			高山病	1	0	1
			5月16日ベースキャンプで井本貴子（23）隊員が病死した。 ※「岩と雪44号」前出								
1973年（7件）	(24)	NH	ヤルン・カン	8,505 m	京都大学学士山岳会	西堀栄三郎	15	滑落	1	0	1
			5月14日登頂後ビバーク（約8,000 m）した松田隆雄（31）隊員は15日行方不明となった。 ※「ヤルン・カン」1975年12月朝日新聞社刊								
	(25)	NH	アンナプルナI	8,091 m	日本山岳会信濃支部	塚本茂樹	11	雪崩	4	1	5
			5月18日、降雪の中第4キャンプ（7,100 m）から下降中の高橋貞利（37）浜正則（36）片桐一三（23）の3隊員と第3キャンプ（6,800 m）から下降中の牛越正（30）隊員、シェルパのチョン・リンジの5名が雪崩のため行方不明となった。 ※「岩と雪35号」 昭和49年2月山と渓谷社刊								
	(26)	NH	ブタ・ヒウンチュリ	7,246 m	四日市山岳協会	野呂邦彦	8	雪崩	2	1	3
			10月12日、標高約6,350 mの第5キャンプに入った出口光男（20）水谷勇（25）隊員とシェルパのアン・ニマはその夜から交信が途絶え行方不明となった。捜索隊がキャンプ地まで到達してみると大規模なデブリに覆われていたという。 ※「岩と雪36号」 昭和49年4月 山と渓谷社刊								
	(27)	NH	キュンカ・リ	6,979 m	瀬戸水南山岳会	押谷光喜	3	雪崩	3	0	3
			10月8日、5,800 m付近で雪崩のため押谷隊長（30）鈴木慎一（25）副隊長、加藤学（22）隊員の3名が死亡した。 ※「ヒマラヤ33号」 昭和48年10月 HAJ刊								

	(28)	NH	テシラプチャ峠	5,755 m	上智大学		1	疲労凍死	1	0	1
			10月12日、疲労のため鈴木幸造（23）が凍死した。 ※「岩と雪44号」 前出								
	(29)	NH	ティルマンのコル	5,670 m	仙台山岳会	今泉 均	1	行方不明	1	0	1
			10月九州のパーティーがティルマンのコルに登り、残されていたツェルトとスキーを発見した。								
	(30)	NH	ナムチェバザール					高山病	1	0	1
			2月19日、ナムチェバザールの裏山に登った白石勝教（40）は病気のため死亡した。								
	(31)	NH	マナスル	8,156 m	同人ユングフラウ	黒石 恒	10	滑 落	1	0	1
			5月5日第5キャンプに向かった鈴木貞子（30）隊員は約7,300 m付近から滑落し行方不明となった。								
	(32)	NH	タンボチェ	3,875 m	ATSトレッキング			高山病	1	0	1
			1月1日、高山病のため浜田富久子（40）が死亡した。 ※「岩と雪44号」前出								
	(33)	NH	エベレスト街道					高山病	1	0	1
1974年			11月11日、高山病のため阿部玲子（32）が死亡した。 ※「岩と雪44号」前出								
（5件）	(34)	K	K12	7,468 m	京都大学	岩坪五郎	5	滑 落	2	0	2
			登頂後下山途中でビバークとなった翌日9月1日第 キャンプ上で高木真一（24）伊藤勤（24）両隊員が滑落死亡した。 「K12峰遠征記」昭和51年9月中央公論社刊								
	(35)	HR	ブニ・ゾム北峰	6,338 m	山岳同人仙人	桑川 透	3	転 落	1	0	1
			8月6日、6,100 m付近で登頂断念し下山中滑落し桑川隊長（26）が死亡した。 ※「ヒンズー・クシュ，カラコルム登山探検誌」前出								
	(36)	NH	ダウラギリI	8,167 m	東京都山岳連盟	雨宮 節	17	雪 崩	2	3	5
			3月26日 午前1時頃3日間降り積った雪が第1キャンプを襲い就寝中の沼尾吉忠（25）井村哲（23）両隊員と								

発生年	番号	地域	山名	高度	派遣団体名	隊長名	隊員数	死亡 原因	死亡 隊員	死亡 現地人	死亡 合計
			シェルパ3名が死亡した。 ※「白き魔神の山」1979年12月 東京ヒマラヤ登山隊刊								
	(37)	NH	ダウラギリⅣ	7,661 m	大阪府山岳連盟	野村哲也	16	滑落	2	0	2
			5月9日 初登頂に成功した河津士郎（31）安田悦郎（27）両隊員は帰途ビバークとなり、翌日コーナボン氷河に滑落していることが判明した。 ※「ダウラギリⅣ峰」 昭和53年3月 大阪府山岳連盟刊								
	(38)	NH	カンジロバ	6,882 m	月稜会	滝口明	7	滑落	1	0	1
1975年			11月4日 高頭清次（28）隊員は第5キャンプ建設へ向かう途中足元の雪が崩れ、ジャグドラ・コーラ側へ滑落して行方不明となった。アンザイレンしたロープのもつれを直すために結び目を解いた瞬間のできごとであった。								
（5件）			※「岩と雪48号」 昭和51年4月刊								
	(39)	K	マルビティン中央峰	7,260 m	日本山岳会岩手支部	笠原潤二郎	10	滑落	1	0	1
			8月3日 第4キャンプを撤収して下山中の伊藤寿（43）隊員はバルプー氷河に滑落し死亡した。								
			※「ヒマラヤ48号」 昭和50年11月HAJ刊								
	(40)	IH	シックルムーン	6,574 m	自衛隊山岳友の会	柚木文夫	11	落石	1	1	2
			8月16日 第4キャンプ（6,050 m）が落石に襲われ、高地悟（28）隊長補佐とシェルパのアン・チョタールが死亡した。 ※「岩と雪48号」前出								
	(41)	NH	ペリチェ	4,250 m	山学同志会		1	高山病	1	0	1
			2月2日 ジャヌー峰の先発として高所順応のためトレッキング中の大木敬一（26）隊員はペリチェ（4,250 m）で病死した。 ※「JANNU SUCCESS REPORT 1976」 昭和51年9月山学同志会・ジャヌー登山隊刊								
1976年	(42)	K	ガッシャーブルムⅡ	8,035 m	登攀倶楽部岐阜	青木寿	13	転落 高山病	2 1	0 0	} 3
（4件）			5月27日 第2キャンプへ荷上中の宮本武敏（29）平松義範（26）両隊員はクレバスを飛び越えようとして転落死した。又この事故の収容のため疲労した松村修（34）隊員は下山中の6月1日ベースキャンプ下で病死した。 ※「ガッシャーブルムⅡ峰追悼報告書」1978年秋 登攀倶楽部岐阜刊								

	(43)	K	ラトックⅠ	7,145m	泉州山岳会	宮平良雄	12	滑落	1	0	1
			IV峰に向った坂本輝夫（26）隊員が7月13日頂上直下の6,150mから40m滑落しセラックに宙吊りとなって死亡した。 ※「岩と雪55号」昭和52年6月山と渓谷社刊								
	(44)	IH	ホワイトセール	6,455m	霧峰山岳会	竹本広泰	4	滑落	1	1	2
			9月6日 頂上アタックに向かった竹本隊長（27）とシェルパは捜索隊によって6,200m地点で死亡しているのが発見された。 ※「岩と雪55号」前出								
1977年（3件）	(45)	NH	ヒマルチュリ	7,893m	明治大学	菅沢豊蔵	14	雪崩	1	0	1
			5月13日 頂上アタックに向かい断念して下山中の近藤芳春（33）隊員は東壁の下降中、雪庇崩壊による氷塊を頭に受けて死亡した。 ※「岩と雪61号」 昭和53年6月刊								
	(46)	NH	ムグリン		登歩渓流会	今井孝雄	4	交通事故	1	0	1
			8月16日 ツクチェ・ピーク（6,920m）登山のためチャーターしたバスがポカラに向かう途中にあるムグリンの橋に衝突して、井上義雄（30）隊員が河床へ飛ばされ死亡した。 ※「秘境ムスタン潜入記」 昭和54年10月 東京新聞出版局刊								
	(47)	K	バツーラⅠ	7,785m	東京都庁山岳部	河野慎一	11	雪崩	1	0	1
			7月9日 第4キャンプへの荷上げに向かった9名が約6,600m付近で上部からのブロック雪崩に襲われ、天神園光徳（21）隊員が死亡した。 ※「バツーラⅠ 1977」 昭和52年11月 東京都庁山岳部刊								
	(48)	NH	ダウリギリⅠ	8,167m	イエティ同人	雨宮節	13	高山病	1	0	1
			4月22日 負傷して体調を崩していた永沼勝己（33）隊員が第3キャンプ（6,500m）で病死した。 ※「白き魔神の山」前出								
	(49)	NH	ダウラギリⅠ	8,167m	群馬県山岳連盟	田中成幸	18	雪崩 滑落	3 1	0 0	4
			9月23日 第4キャンプ（6,450m）からルート工作に出た阿久沢広（35）深沢勇二郎（28）小林清（28）の3隊員は雪崩のため南面側へ滑落行方不明となった。登山は続行され登頂が成功した翌日10月20日第4キャンプか								

発生年	番号	地域	山名	高度	派遣団体名	隊長名	隊員数	死亡 原因	死亡 隊員	死亡 現地人	死亡 合計
			ら荷上げに向かった小暮勝義（35）副隊長は、固定ロープに吊り下がって死亡しているのが発見された。 ※「峭峻の白き尾根」1980年9月　群馬県山岳連盟刊								
1978年（7件）	(50)	NH	P29	7,835 m	ツラギの会	田中文夫	10	雪崩	3	0	3
			9月14日　第2キャンプ（5,240 m）付近にいた6名が1,000 m余り上の垂壁上部の懸垂氷河の崩壊により飛ばされ牛沢守（30）万実久次（28）高橋義文（23）3隊員が死亡した。　※「岩と雪67号」昭和54年5月山と渓谷社刊								
	(51)	NH	ペリチェ	4,250 m				高山病	1	0	1
			ペリチェにある東京医科大学エベレスト高山医学研究所で死亡した記録があるが詳細は不明。（1978.10.～1979.5の間）　※「登山医学1」　昭和56年12月　第一回日本登山医学研究会刊								
	(52)	K	ジュトマルサール	7,330 m	東京志岳会	杉本忠男	9	雪崩	3	2	5
			7月24日　第1キャンプ（5,100 m）が雪崩により飛ばされ尾上均（30）横内正（26）佐藤正寛（25）3隊員とハイポーター2名が死亡した。　※「岩と雪67号」昭和54年5月　山と渓谷社刊								
	(53)	K	ハチンダール・キッシュ	7,163 m	山嶺登高会	緑川　広	7	転落	1	0	1
			6月20日　頂上アタックを断念して下山中の亀井建樹（29）隊員は第3キャンプ（5,030 m）上の固定ロープが切れて転落死亡した。　※「ハチンダール・キッシュ7,163 m」　1981年1月　山嶺登高会刊								
	(54)	K	ガッシャーブルムV峰	7,100 m	碧稜山岳会	馬場口隆一	12	転落	1	0	1
			8月2日　頂上アタックに向かった馬場口隊長（30）が頂上直下のクレバスに転落して死亡した。 ※「岩と雪67号」前出								
	(55)	NH	パタール・ヒウンチュリ	6,337 m	しゃくなげ同人	浅野博子	7	雪崩	2	1	3
			10月9日　ベースキャンプ手前標高約4,000 mで藤井博子（28）山崎のり子（28）両隊員とポーター1名が雪崩に襲われ死亡した。　※「岩と雪74号」　昭和55年5月　山と渓谷社刊								

1979年（4件）	(56)	NH	トロン・パス	5,416 m				雪　崩	1	0	1
			3月9日　トロン峠付近で雪崩のため落合昭（　）が死亡した。　※「ラムジュン。ヒマール北稜」　1982年3月法政大学体育会山岳部刊								
	(57)	K	テラムカンリⅢ	7,382 m	弘前大学	花田澄人	12	転　落	1	0	1
			8月6日　ベースキャンプに向けて下山中の岡正範（30）隊員がテラム氷河のスノーブリッジを踏み抜いて転落、流されて死亡した。　「テラム・カンリⅢ」1982年3月弘前大学カラコルム遠征隊刊								
	(58)	HR	ゴーカール・サール	6,249 m	白河山岳会	杉村吉男	15	雪　崩	6	0	6
			7月28日　荷上げのため第2キャンプ（4,920 m）で休憩中の斎藤清平（35）副隊長、仲西昌寛（45）固山良三（41）関口修克（38）鈴木仁（31）志賀文孝（29）の6名は上部アイスフォールの崩壊と思われる雪崩に襲われて死亡した。　※「白河山岳会ヒンズー・クシュ登山隊遭難対策報告書」　昭和56年　パキスタン・ヒンズー・クシュ登山隊遭難対策・残務処理委員会刊								
1980年（7件）	(59)	NH	アンナプルナⅡ	7,937 m	上市峰窓会	田辺郁夫	6	滑　落	1	0	1
			4月26日　第4キャンプ（7,000 m）から下山中の田辺隊長（36）は6,000 m付近で滑落し、ビバーク中に死亡した。　※「上市峰窓会ヒマラヤ登山隊仮報告書」　昭和55年6月　上市峰窓会刊								
	(60)	NH	ガネッシュ・ヒマールⅢ	7,130 m	愛知ヒマラヤ登山隊	今井祥司	12	雪　崩	3	0	3
			10月9日　5,600 m地点でルート工作中の黒岩薫（26）水野勝（22）照井博（35）3隊員が雪崩に襲われ行方不明となった。　※「岩と雪81号」　昭和56年5月								
	(61)	NH	ペリチェ	4,250 m				高山病	1	0	1
			12月20日　トレッキング中の松原喜久夫（26）はペリチェで病死した。　※「山と溪谷522号」　昭和56年3月								
	(62)	NH	ナムチェ・バザール	3,440 m	おいらく山岳会			高山病	1	0	1
			12月27日　トレッキング中の高橋しづ子（49）はナムチバザールで病死した。　※「山と溪谷522号」前出								

発生年	番号	地域	山名	高度	派遣団体名	隊長名	隊員数	死亡			
								原因	隊員	現地人	合計
	(63)	C	チョモランマ	8,848 m	日本山岳会	渡辺兵力	26	雪崩	1	0	1
			5月2日　第5キャンプへ向かった宇部明（31）隊員は約7,900 m地点で雪崩に襲われ死亡した。 ※「チョモランマ・チベット」　昭和56年11月　講談社刊								
	(64)	K	ビラフォンド・ラ	5,500 m	神戸大学	右田卓	2	転落	1	0	1
			8月6日　右田隊長（25）はヒドンクレバスに転落死亡した。　※「岩と雪81号」前出								
	(65)	IN	パンワリ・ドワール	6,663 m	九山同人	近藤和美	9	雪崩	1	0	1
			1月29日　ベースキャンプに下山中の岩田達司（32）副隊長は雪崩に襲われ行方不明となった。 ※「山と仲間132号」　昭和55年12月　日本勤労者山岳連盟刊								
	(66)	NH	エベレスト	8,848 m	明治大学	植村直己	17	転落	1	0	1
			1月12日　第2キャンプへ下山中の竹中昇（28）隊員が6,800 m付近で転落死亡した。 ※「岩と雪88号」　昭和57年5月　山と渓谷社刊								
	(67)	NH	アンナプルナI	8,091 m	イエディ同人	吉野寛	12	滑落	1	0	1
			10月31日　頂上アタックに向かった加藤康二（32）隊員は8,000 m付近で滑落行方不明となった。 ※「岩と雪88号」前出								
	(68)	NH	アンナプルナII	7,937 m	同人大阪登攀クラブ	桑原信夫	9	転落	1	0	1
			10月11日　第5キャンプから頂上アタックに向かった市川協一（29）隊員は7,400 m付近のテラスからバランスを崩して転落死亡した。　※「アンナプルナ二峰登山報告抄」　昭和56年11月　同人大阪登攀クラブ刊								
	(69)	NH	ガンガプルナ	7,454 m	明治大学駿台山岳部	鈴木雄一	6	雪崩	2	0	2
			9月29日　降雪が続き第2キャンプ（6,750 m）に停滞中の坂本武（29）鈴木明（24）両隊員は雪崩に襲われテントと共に埋没死亡した。※「ガンガプルナ北西稜事故報告書」昭和56年12月　明治大学駿台山岳部刊								

1981年（14件）	(70)	NH	ルクラ					高山病	1	0	1
			11月21日　トレッキング中の小川恵子隊員がルクラで病死した。　※「山と溪谷537号」 昭和57年2月								
	(71)	C	コングルー	7,719 m	京都カラコルムクラブ	高田直樹	20	行方不明	3	0	3
			アルパインスタイルによる登頂を目指して頂上へ向かった寺西洋治（36）鴨　満則（36）松見新衛（35）の3隊員は7月23日6,500 m付近にいるのが確認されたのを最後に消息を断った。　※「岩と雪88号」前出								
	(72)	C	ミニヤ・コンカ	7,556 m	北海道山岳連盟	川越昭夫	24	滑　落	8	0	8
			5月10日　頂上アタックに向かった藤原裕二（34）隊員は7,450 m付近で滑落行方不明となった。この事故のため登頂を断念し下山中の7名が7,300 m付近から滑落行方不明となった。島田昌明（28）佐々木茂（31）浦光夫（32）中嶋正博（35）松永浩（28）小田島均（34）小野寺忠一（29）　※「北海道新聞　昭和56年6月8日」								
	(73)	C	ボコダ主峰	5,445 m	京都山岳会	中井　巌	18	転　落	1	0	1
			6月10日　第1キャンプからベースキャンプに下山中の白水ミツ子（30）隊員がヒドンクレバスに転落死亡した。※「処女峰ボコダ」　1981年2月　京都山岳会刊								
	(74)	K	ガッシャーブルムN	7,980 m	関西クライマースクラブ	竹辺光一	5	雪　崩	3	0	3
			7月7日　ルート工作中に上部のセラック崩壊があり、竹辺隊長（30）白沢裕之（26）西岡寛和（21）両隊員が死亡した。　※「岩と雪88号」前出								
	(75)	IH	クン	7,077 m	杉並勤労者山岳会	栗山　博	10	高山病	1	0	1
			8月8日　不調のためABC（5,150 m）に停滞していた金沢直子（26）隊員はベースキャンプへタンカで運ばれる途中病死した。　※「遙かなるクン」　1982年4月　杉並勤労者山岳会刊								
	(76)	IH	ジャオンリ	6,632 m	同人タンネ	小美浪洋子	5	雪　崩	3	1	4
			9月3日6,000m付近から発生した雪崩のため小美浪隊長（32）田島よう子（33）副隊長、加藤れい子（27）隊員の3名とハイポーター1名が死亡した。　「遙かな友に」昭和57年11月　山岳同人タンネ刊								

発生年	番号	地域	山名	高度	派遣団体名	隊長名	隊員数	死亡			
								原因	隊員	現地人	合計
	(77)	IH	ナンダ・カート	6,611 m	日本ヒマラヤ協会	小島守夫	8	雪崩	7	0	7
			9月27日　夜からの短時間の豪雪によるとみられる雪崩のため藤倉和美（31）副隊長、鈴木陽一（29）阿部直彦（35）本田荘八（30）埜口正則（29）寺本政幸（30）斎藤孝雄（35）の7名が行方不明となった。※「本書」								
	(78)	IH	ホワイトセール	6,446 m	一橋大学	中村宣幸	3	行方不明	3	0	3
			9月6日　アドバンスベースキャンプから下ってきたハイポーターがもたらした「9月9日以降登頂予定」との伝言を最後に消息を断った。　※「一橋大学山岳部インド・ヒマラヤ登山隊1981遭難報告」1981年10月　一橋山岳会刊								
	(79)	IH	デュルン・デュルン氷河	5,170 m	学習院大学		2	転落	1	0	1
			8月10日　氷河遡行中5,170 m付近のヒドンクレバスに香椎正純（20）が転落死亡した。 ※「ラダック・ザンスカール」　昭和56年12月　学習院大学探検クラブ刊								
1982年	(80)	NH	アンナプルナⅢ	7,555 m	名古屋溪稜会 蒲郡山の会	中瀬司	11	雪崩	1	0	1
			4月24日　第5キャンプに向かって荷上中の岡部政美（30）隊員は上部セラックの崩壊による雪崩に襲われクレバス帯に埋没し発見されなかった。　※「アンナプルナⅢ峰北面事故報告書」　昭和57年5月　三河合同登山隊刊								
	(81)	N	アンナプルナⅠ	8,096 m	イエティ同人	赤松進	3	雪崩	2	0	2
			10月18日　北面の第2キャンプが雪崩に襲われ、赤松隊長（27）と小野幹雄（28）隊員が死亡した。 ※「読売新聞1982年10月22日」								
	(82)	C	ミニヤ・コンカ	7,556 m	市川山岳会	斎藤英明	7	疲労凍死	1	0	1
			5月1日　頂上付近でビバークしたアタック隊の2名は消息を断ち登山隊は遭難として帰国したが、その後2名は自力で第1キャンプ（4,900 m）まで下山。菅原信（26）隊員は歩けなくなったために松田宏也隊員が1人で下山し、3,000 m付近で現地民に救出された。菅原隊員の消息は不明である。　※「朝日新聞1982年6月9日（夕）」								

1982年	(83)	C	ポーロン・リ	7,292 m	大分県山岳連盟	伊東　亮	14	転　落	1	0	1
			5月17日　初登頂に成功し下山中の和田実（33）隊員が第4キャンプ（6,700 m）の約40 m手前で転落死亡した。 ※「毎日新聞1982年6月3日」								
	(84)	C	チョゴリ	8,611 m	日本山岳協会	新貝　勲	45	滑　落	2	0	2
			8月15日　北稜からの登頂に成功し下山中の柳沢幸弘（27）隊員が約8,000 m付近から滑落死亡した。又、8月31日ベースキャンプの裏山へ出かけた坂野俊孝（38）医師が死亡しているのが発見された。 ※「岩と雪92号」前出								
	(85)	C	ミニヤ・コンカ	7,556 m	市川山岳会	斎藤英明	6	高山病	1	0	1
			9月27日　遺体収容のため4,100 mまで登って頭痛を訴えて2,900 mまで下山していた、中谷武（27）隊員が肺水腫のため死亡した。 ※「朝日新聞1982年10月8日」								
	(86)	IH	クン	7,077 m	日本ヒマラヤ協会	山森欣一	17	落　石	1	0	1
			8月9日　第2キャンプへの荷上げから下山中の勝山教孝（31）隊員が上部岩壁からの落石を受け、約6,000 m付近から500 m滑落し死亡した。 「ヒマラヤ131号」								
	(87)	IH	ヌン	7,135 m	マウンテニアリング・アソシェーション	松本正城	5	疲労凍死	1	0	1
			8月19日　北稜の6,580 m付近で慶野順一（31）隊員が凍死しているのが発見された。 ※「朝日新聞1982年8月26日」								
	(88)	K	パスー	7,244 m	諏訪山岳会	成田俊夫	7	高山病	1	0	1
			6月26日　第3キャンプで肺水腫となった市川寛一（24）隊員が、下山中死亡した。 ※「朝日新聞1982年6月28日」								

※　地域区分略号
NH＝ネパール・ヒマラヤ　HK＝ヒンズー・クシュ　HR＝ヒンズー・ラジ　K＝カラコルム　IH＝インド・ヒマラヤ
C＝中国

ご協力者名簿

（敬称略・順不同）

（団　体）

外務省領事移住部領事２課　外務省情報文化局文化２課　法務省民事局第２課　在インド日本大使館　(社)日本山岳協会　東京都山岳連盟　気象庁天気相談所　京橋郵便局　在日インド大使館　エアーインディア（東京）　㈱ICI石井スポーツ　読売新聞社㈱　㈱カンダ　㈱西遊旅行　三井倉庫㈱　ソニー・マグネ・プロダクツ㈱　富士写真フィルム㈱　東レ㈱　㈱エムパイヤフーズ　大正セントラルホテル　シカールトラベル　I．M．F　I．T．B．P　前橋山岳会スワロガロヒニ登山隊　シチズンボール

（個　人）

五百沢智也　石井清一　伊丹紹泰　市原優　伊東満　氏家章　越前谷幸平　江本嘉伸　尾形好雄　小野有五　加藤幸男　片岡邦夫　菊地薫　北川勇人　絹川忠直　木村陽子　近藤和美　佐久間隆　佐藤誠　佐野義勝　清水澄　新郷信廣　鈴木茂　関久雄　館野秀夫　堤久美　飛田和夫　山田昇　土居正勝　平家啓作　宮崎久夫　村上豊子　物井洋子　八木原圀明　H・C・サリーン　モトワニ　ジョギンダール・シン　カプール

カンパ・借入れご協力者名簿

（敬称略・順不同）

(ア)　アイワ徽章　青木正樹　赤津光一　旭川志岳会　浅見昭夫　阿部淳　阿部忠正　安西憲一　安藤隆子　安藤忠夫　安中秀子

(イ)　飯沢実　飯島孝夫　五十嵐博　池田昭二　石川真知子　石川裕司　石黒重恭　石原俊洋　泉有輝信　板橋元一　伊藤督一　井手　稲垣公平　稲葉幸郎　井上英新　今井清和　井守克己　岩水龍峰

(ウ)　上杉純夫　植竹清孝　植松秀之　内田嘉弘

(エ)　榎木和介　江越弘人　江良勝輝　遠藤喜重郎　遠藤京子　遠藤康治

(オ)　大崎正信　大里祐一　太田正弘　大滝潤一　大野廣美　岡田伊佐男　緒方雅智　岡本英治　沖允人　荻野目節子　奥貞雄

(カ)　粕谷俊矩　潟上弘子　片山繁　加藤智司　加藤守　加藤善之　片岡啓輔　勝山良三　金沢健　金沢大学山岳部　金子英一

(キ)　菊池春枝　木崎幸子　北川勇人　木村喜代志

(ク)　葛谷剴治　工藤晃一　黒川篤　桑原健一　群馬女子バキラティ登山隊

(コ)　後藤須磨子　小玉義広　小林睦子　小林英見　小林静生　小松伸　駒井満男　近藤和美　今野一也

(サ)　斎藤哲也　斎藤秀雄　斎藤豊　㈱西遊旅行　榊原幸子　坂本真沙留　佐久間隆　酒井保　佐々木香代子　佐々木正　佐藤慶治郎　佐藤力　佐藤守利

(シ)　志田セツ子　設楽芳夫　柴田金之助　柴田満　清水正雄　白木和志　新谷暁生

(ス)　末吉鐵也　菅野武士　鈴木貞子　鈴木孝　鈴木康志

(セ)　関久雄　仙台海外登山研究会　仙台山岳会ガルワールヒマラヤ登山隊

(ソ)　薗田芳子

(タ) 高井勝夫　高坂裕紀　高橋毅　高橋亨夫　高原修　館野秀夫　田中重義
(チ) 千葉良正　長繁夫
(ツ) 土谷正伸　角田哲　釣部恵子
(ト) 藤条好夫　飛田和夫　戸部洋子　豊田昇
(ナ) 中岡久　名越実　那須宗一　名塚達夫
(ニ) 肉丸剛　西郡光昭　西田茂夫
(ノ) 野上国広　野島照雄　能勢真人
(ハ) 間安弘　橋本廣　長谷川宗親　長谷部稔　畠山秀男　畠山優　馬場俊裕　馬場洋一
(ヒ) 日向野恵美子　日高照雄　ヒマラヤ山荘
(フ) 福島県立福島工業高等学校山岳部OB会　福山茂　藤江幾太郎　藤原邦俊
(ホ) 保坂昭憲　細野孟士　本多夏生　本多日出彦
(マ) 真島博志　丸山寛子　増田秀穂
(ミ) 三浦敏弘　三笠喜美夫　水野勉
(ム) 村上泰賢
(モ) 舞木善郎　森美枝子
(ヤ) 八嶋寛　柳沢須佐男　矢野郁雄　八幡浩　山形正己　山倉洋一　山里寿男
(ヨ) 吉川祐治　米田薫
(ワ) 若林岩雄　若尾巻広　脇坂順一　和田誠治　渡辺真澄

編　集　後　記

ナンダ・カート峰で7名の仲間が忽然と消息を断ってから早や1年が過ぎた。

ご家族にとってもHAJにとっても、青天の霹靂の如く起ったこの事故を、でき得る限り忠実に報告し、その遭難の原因を推定し又、分析することに主眼を置いて編集した。

従って、内容も一般に良く理解されていない「登山学校とは」「捜索隊報告」「事故原因と分析」に多くのページを割いた。

本報告書の発刊が遅れたのは、気は急くもののいかなる内容にまとめ上げるかについて構想がまとまらなかった事と、編者が次の登山に巻き込まれてしまったからに他ならない。

玉稿を早い時期にお送りいただいた皆様には、申し訳なく、この欄を借りてお詫び申し上げます。

尚、捜索隊に参加していただいたメンバーの内、菊地、山田、佐久間、新郷の4名は、この事故がなければ実現していた筈であった冬期エベレスト登山のメンバーでもあったが、1年遅れで現在冬期マナスル（8,156m）で登山中であることを報告すると共に併わせて諸氏の無事帰国を祈念したい。

（山　森）

ナンダ・カート 1981
1982年12月20日　発行

発　行　者　　日本ヒマラヤ協会
発　行　所　　東京都新宿区高田馬場３丁目23番１号
　　淀橋食糧ビル506号
　　☎ (03) ３６７－８５２１ (〒160)
編　集　者　　山　森　欣　一

印　　刷　　株式会社 協 和 印 刷　　〈非売品〉